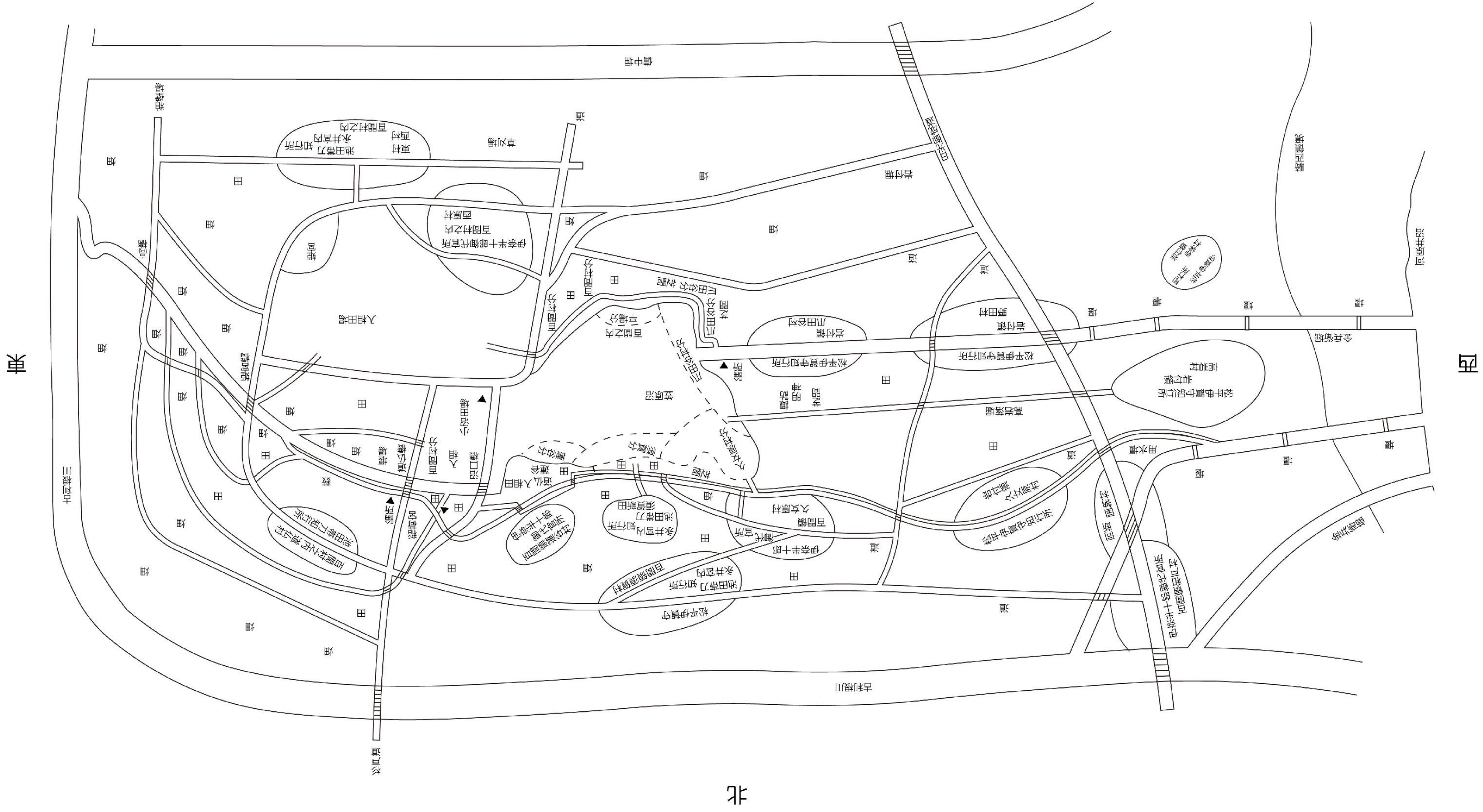
特別展「笠原沼新田と用悪水―江戸時代中期の新田開発―」関係史料集１

●元禄六年　騎西領落堀堰論裁許状（百間折原家文書　No.１）
（表面）



（裏面）
武州百間領西原村・西村・東村・道仏村与同領久女原村・須賀村・岩付領爪田谷村騎西領落掘堰論之事、百間領百姓訴候者騎西領悪水笠原沼江溜置道仏橋下ニ堰ヲ立用水引来候、然ニ為新堰由申掠旨申之、久米原村・須賀村・爪田谷村百姓申候者爪田谷村之内ニ百間領より堰致之用水引取候堀筋茂有之候、道仏橋下之堰者新ニ致之候、其上所々橋台築出ニ付悪水湛上郷田地及水損旨答之右論所遂糺明処、騎西領河原井沼より爪田谷村迄之内左右之村之堰五ケ所立之候、然上者百間領之用水五ケ所之堰末ニ而壱ケ所之堰計ニ而者用水可為不足、古堀跡有之由久女原・須賀・爪田谷三ケ村之百姓雖申之絵図之面溝筋所々令断絶草生茂用水通候躰ニ不相見候、寛文年中裁許証文之趣百間領より堰ヲ立用水取候義与相見、因是百間領之者爪田谷村江罷越堰ヲ立候儀ニ申掠此度申出候者相聞候、笠原沼之水百間領田地為近所間直ニ引落道仏橋之下ニ堰致之儀尤ニ候、且又先年之裁許百間村堰をいたし用水取之騎西領より落候悪水無滞様ニ可仕与載之雖、然爪田谷村之末ニ水道無之上者百間村堰致之悪水落候、為文言段無疑所之橋台之儀者三ケ村百姓申通無紛自今以後橋台取払之川幅之通長サ四間ニ橋可掛之並沼口より堰場迄弐百三拾間余深サ弐尺可掘之上郷満水之節者堰取払之水不湛様ニ可致之、仍裁許之趣絵図之裏ニ記之各加印判双方江下置之間永可相守者也

元禄六年癸酉九月廿六日

稲伊賀㊞
松美濃㊞
能出雲㊞
比安房㊞
本紀伊㊞
戸能登㊞
松壱岐㊞

御地頭様
御役人様衆中

百間領須賀村
訴訟人　平兵衛㊞
同　久兵衛㊞
同　平左衛門㊞
同　源兵衛㊞
同　清右衛門㊞
同　吉左衛門㊞
同　惣右衛門㊞
組頭
同　伊左衛門㊞
名主　権兵衛㊞
組頭　定四郎㊞

乍恐以願書御訴訟申上候

一笠原沼之内　殿様御知行下田壱町九反八畝弐拾七歩有之候、彼沼古より下郷用水溜沼ニ御座候故永荒地ニ罷成候、然処ニ廿七八年以来蒋植置面々馬草刈取申候所ニ、八年以前開発被為　仰付我々共難有奉存則開発仕候て毎年稲作仕付申候得共、右申上候通古より沼下ニ土堰を構上郷悪水溜置、其上　新井筑後守様御知行所騎西領野牛村より近年悪水落新堀掘込申候ニ付、弥致満水蒔田水腐仕候、其以後水干ニ罷成植田ニ仕候得ても溜沼之儀ニ御座候得は、大雨降申候節ハ一日壱夜之内ニも及大水ニ植田も水腐仕候て、累年不作ニ御座候故御年貢指上可申様無御座候得は、乍恐　殿様御為ニも不罷成、勿論我々共毎年種こやし二重ニ費何共難儀ニ奉存候、依之ニ何とぞ右之蒋原ニ願上度奉存候得共、一旦開発仕候場所荒シ候儀如何ニ奉存候、哀願は下々畑之御年貢被為　仰付被下候は少々成共年々御年貢差上、我々共も種手間こやし二重之費立不申候て偏ニ御救ニ罷成難有奉存候、右之趣乍恐以願書を御訴訟申上候、以上、

正徳五年未三月

●享保元年　須賀村年貢割付状（須賀戸田家文書　№１９３）

申ノ御年貢割付之事

一高三百石　　須賀村

　　此訳

上田弐町壱反七畝弐歩
　三反七畝拾七歩　　丑より畑成
　　此取永三百六拾四文　　反ニ九拾七文取
　壱町壱反七畝廿四歩　　当見捨
残六反壱畝拾八歩　　反ニ六斗三升取
　此取米三石八斗八升壱合
中田壱町弐反七畝歩
　九畝歩　　丑より畑成
　　此取永六拾九文　　反ニ七拾七文取
　七反廿四歩　　当見捨
残四反七畝六歩　　反ニ五斗八升取
　此取米弐石七斗三升八合
下田弐町三反壱歩
　壱畝拾歩　　丑より畑成
　　此取永九文也　　反ニ六拾七文取
八反壱畝九歩　　どぶニ引
　七反三畝廿壱歩　　当見捨
残七反三畝廿壱歩　　反ニ五斗三升取
　此取米三石九斗六合
上畑拾壱町三反歩　　反ニ百五文取
　此取永拾壱貫八百六拾五文
中畑拾四町六反廿七歩
　壱反三畝五歩　　井堀成
残拾四町四反七畝廿弐歩　　反ニ八拾五文取
　此取永拾弐貫三百六文
下畑拾九町三反八畝拾三歩　　反ニ七拾五文取
　此取永拾四貫五百三拾八文
屋敷壱町七反弐畝拾五歩　　反ニ百五拾三文取
　此取永弐貫六百七拾四文
下々田壱反壱畝拾三歩　　新田
　六畝七歩　　丑より畑成
　　此取永三拾七文　　反ニ六拾文取
残四畝九歩　　金剛寺
　此取なし
　廿四歩
　此取なし
下々畑八反七畝廿七歩　　巳ノ改新畑
　此取永四百四拾文　　反ニ五拾文取
下々畑弐反五畝九歩　　丑改新畑
　此取永六拾三文　　反ニ弐拾五文取
惣石合拾石五斗弐升五合
　此俵三拾俵弐升五合
惣永合四拾弐貫三百六拾五文
右割付之通り寄合遂ケ勘定、当霜月晦日以前、急度可致皆済者也、
　享保元丙年　　小河原平兵衛㊞
　申　九月　　平岡済右衛門㊞
　　菅原宅右衛門㊞
同　市兵衛㊞　　柄原覚左衛門㊞
名主　加右衛門㊞

（後欠）

●享保七年頃　地先出入訴状（須賀戸田家文書　№８４）

乍恐以書付御訴訟申上候事

今度御訴訟申上候地さき出入之場所、永井宮内知行高不足たるべくと奉存候訳ケ

一元和五年未歳百間領五千石御検地御改有之候、其以後同領蓮谷村と申ハ水野出雲守様御知行・同須賀村源七郎組ハ池田帯刀様御知行・同村拙者組ハ永井宮内知行右御三分江寛永元年子年一同ニ御知行所御割渡被遊候、其節ハ御年貢献上納仕候場所ニ御座候由申伝来リ候事

一大河内金兵衛様御奉行として上郷より悪水落堀笠原沼江御堀込被遊候、其上沼下姫宮堀ニ常堰を築上郷落水を溜置下郷之用水ニ引申候、依之右之田場荒地罷成候ニ付御三分御年貢御割付之表ニ茂永荒地或ハ永不作杯と御書付被遊、毎年御引捨ニ成被下無年貢地ニ罷成候事

一姫宮堀常堰ニ付廿九年以前上郷より御　公儀様迄御訴状ニ申上候共、上郷過水之時ハ払之下郷渇水之時ハ可築之と御裁許之上双方証文被仰付相究リ申候、以来沼水打々干かた相見得申候ニ付右永荒地何とそ開発仕候様ニと御地頭より被仰付別高開発仕候処ニ、御帳面ニ壱町九反八畝廿七歩御座候処ニ漸壱町壱反余立帰リ之分御座候、年々相応之御年貢指上ケ来候

（後欠）

●享保七年　粂原村年貢割付状（東粂原岡安家文書　№７０７）

（前欠）

残三町三反七畝三歩　反三斗八合取
　此取米九石七斗六升六合七夕
取米合弐拾六石八斗五升三合弐才
　外
一弐町七反歩　見取場
　此取米壱石六斗弐升　反六升取
是ハ元禄三庚午九月笠原沼流田跡々ハ本高之内ニ候得共水深之場ニ付高外見取場ニ被仰付候
　上畑弐町弐反四歩　反九拾五文三分取
　此取永弐貫九拾八文
中畑三町弐反九畝拾壱歩　反八拾五文三分取
　此取永弐貫八百九文
下畑五町弐石七畝廿七歩　反七拾五文取
　此取永より貫九百五拾九文
下々畑四反六畝廿四歩　反六拾五文取
　此取永三百四文
林畑五拾三歩　反五壱拾文取
　此取永廿六文
屋鋪六反三畝七歩　反百廿文取
　此取永七百五拾九文
取永合□貫九百□拾□文
　外□永三百拾八文六分

［　　］
一壱町壱反四歩　家屋鋪薮
　此取永五拾五文七歩　反五文取
一壱［　］畝弐歩　芝野銭
　此取永五拾八文五歩　反五文取
　小以百拾四文弐歩

此永三文六分五厘
米五拾八石四斗七升三合弐夕
納合　此俵八拾壱俵六斗四升八夕弐才
但四斗入
永拾貫三百九拾六文五分
口米
但　共
口永
右之通相定上者、大小之百姓並出作等迄立合高下無之様ニ致内割、来ル十一月十五日前無遅滞急度可皆済者也
享保七年寅十月　須藤幸右衛門
粂原村
名主
組頭
惣百姓
（裏書）
「　表書之通不有相違者也
細六郎兵㊞　」

●年未詳　逆井・下ノ谷御新田開発願（蓮谷加藤家文書　№1）

乍恐以口上書ヲ奉願候御事

一武州埼玉郡百間村之内逆井・下ノ谷弐ケ所之野先規有来候、百間村・寺村・蓮谷村・同国道佛村入会ニ而馬草苅来申候処ニ、六拾年以前道佛村より我尽ニ新開発仕付右之村々より御訴訟申上候得者新開発仕間敷由被仰付、依之右之馬草地ニ仕候様ニと被為仰付御証文四ケ村江被下置候、則御証文百間村源太左衛門方江御預ケ被遊候、古来之通今以入会ニ而馬草苅来申候然処ニ此度百間村・寺村・道佛村三ケ村之者共両所之原地御新田開発之御願差上ケ候由承候、蓮谷村江ハ何之沙汰茂不仕候ニ付、乍恐拙者共御願ニ罷出候三ヶ村江御新田開発被為仰付、蓮谷村江茂三ケ村並ニ一圓高ニ応シ被為仰付被下候ハヽ有難奉存候、御年貢之儀ハ何分ニ茂御上納可仕候間、以慈非右願之通リ被仰付被下候ハヽ難有奉存候

名主　利兵衛
組頭　六左衛門
同　弥右衛門

●享保十三年　笠原新田割境絵図（須賀戸田家文書　№１４３）

（絵図上部欠）



笠原新田反別四拾七町壱反五畝歩　弐分拾間
外弐町三反弐歩

右之反別拙者懸合相談之上、絵面割合割境之朱引印形仕候通、相違無御座候
以上
享保拾三年申三月
武州埼玉郡池田喜八郎御代官所
爪田谷村　名主　市右衛門
久米原村
細井六郎兵衛知行所　名主　庄左衛門
米津出羽守知行所　名主　甚左衛門
渥美九郎兵衛知行所　名主　与兵衛
池田喜八郎御代官所　須賀村　名主　庄右衛門
池田辰三郎知行所　名主　政右衛門
永井宮内知行所　名主　源七
森川下総守知行所　百間村　名主　源兵衛
池田辰三郎知行所　中島村　名主　次郎左衛門
米津出羽守知行所　蓮谷村　名主　利兵衛
永井宮内知行所　東村　名主　伝六
池田辰三郎知行所　西村　名主　新右衛門
池田喜八郎御代官所　須賀村　定八
同御代官所　野田村　藤助

上田拾弐歩　壱兵衛
上田弐拾九歩　四郎兵衛
上田弐拾九歩　政右衛門
上田弐拾壱歩　伝兵衛
上田拾九歩　平兵衛
上田拾壱歩　伊左衛門
中田拾歩　平左衛門
下田壱畝八歩　惣右衛門
下田六歩　平兵衛
下田弐拾四歩　御新田道敷　弥五兵衛
下田五歩　平左衛門
下田五歩　喜兵衛
下田六歩　四郎兵衛
下田四歩　伊左衛門
下田五歩　清右衛門
下田三歩　政右衛門
下田四歩　惣右衛門
下田壱畝弐歩　吉左衛門
下田拾壱歩　平兵衛
下田拾壱歩　伝左衛門
喜兵衛　平左衛門
四郎兵衛　喜兵衛
伊左衛門　四郎兵衛
政右衛門　伊左衛門
吉左衛門　清右衛門
惣右衛門　政右衛門
彦兵衛　惣右衛門

下田拾歩　伊左衛門
下田拾壱歩　政右衛門
下田九歩　吉左衛門
下田一畝六歩　惣右衛門

●享保十四年　御普請潰地御改帳（須賀戸田家文書　№６６）

（表紙）
「　御普請潰地御改帳
十一月　」
永井宮内知行
武州埼玉郡須賀新田村

下田九歩　清右衛門
反別合壱反弐畝歩潰地
開田六歩　清右衛門
開畑拾七歩　平左衛門
開畑拾七歩　喜兵衛
開畑拾四歩　四郎兵衛
開畑弐拾四歩　伊左衛門
開畑弐拾弐歩　清右衛門
開畑弐拾弐歩　政右衛門
開畑弐拾歩　吉左衛門
開畑拾壱歩　惣右衛門
反別合五畝三歩
右ハ隼人堀代水笠原沼開発ニ付河原井沼落野牛堀御普請ニ付潰地書面之通り御座候、以上
享保十四年酉十一月
永井宮内知行所
武州埼玉郡須賀新田村
名主　政右衛門
組頭　伊左衛門
伊奈半左衛門様
御役所

●享保十六年　土浮立帰書上帳（須賀戸田家文書　№６３）

（表紙）
「　土浮立帰リ書上ケ帳
須賀新田村　」

下田壱町九反八セ廿七歩　笠原沼之内
内
壱町壱反七セ十八歩　古立帰リ
三反五セ十四歩半　当亥立帰リ
残弐反九セ廿弐歩　新井筋潰地
壱反六セ三歩　砂リ場ニ而不作
田合壱町九反八セ廿七歩
土浮立帰書上
一下田壱畝壱歩　弥五兵衛㊞
一下田拾歩半　伝左衛門㊞
一下田弐畝弐拾弐歩　平兵衛㊞
一下田三畝弐拾壱歩　十五不作有り　喜兵衛㊞
一下田三畝弐拾壱歩　十五不作有り　善左衛門㊞
一下田五畝歩　四セ十歩不作有り　伊左衛門㊞
一下田五畝歩　四セ八歩不作有り　政右衛門
一下田五畝歩　三セ十壱歩不作有り　吉左衛門㊞
一下田弐拾歩　廿八歩不作有り　惣右衛門㊞
一下田拾歩　十四歩不作有り　六左衛門㊞
一下田弐畝歩　弐セ廿九歩不作有り　浅右衛門㊞
一下田五畝歩　平左衛門㊞
〆三反五畝拾四歩半　当亥ノ立帰リ分
右者笠原沼御新田ニ前々より堀付田堀敷之分三反五セ十四歩半之所立帰リ罷成候間、此度控帳印形いたし入置申候、以上
享保十六年亥三月

●享保十六年　笠原沼新田・古田境取極（須賀戸田家文書　№１２５）

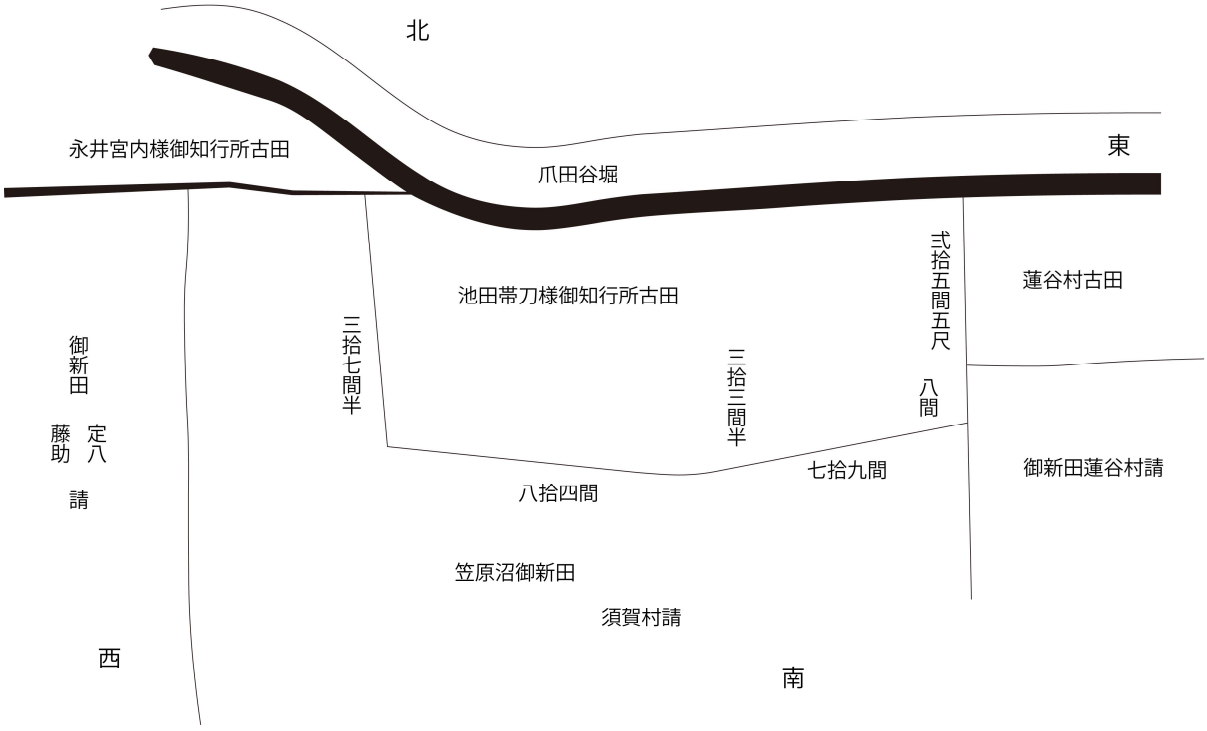
一笠原沼御新田地と池田帯刀様御知行所古田境不埒ニ罷成候ニ付、此度

及諍論御普講御奉行葛葉平七様御吟味被遊候所ニ、古田方御新田方双方相対仕地境相違無之様ニ相改相守可申旨御請仕、則前度御普請御奉行片桐忠蔵様御分見之通ニ境杭相建、表絵図之通方角間数少も相違無御座候、然上ハ右御新田古田境目大切ニ相守可申候、依之如斯双方江取替シ申候上ハ、右境之義ニ付相互ニ申分無御座候、為後日仍て如件、

享保十六年亥五月十二日　須賀村

百姓　孫右衛門㊞
同　与五右衛門㊞
同　利兵衛㊞
同　三左衛門㊞
組頭　太兵衛㊞
同　浅右衛門㊞
名主　義左衛門㊞

同村
名主庄右衛門殿
同　政右衛門殿
源七殿



●年未詳　用悪水伏越・掛樋等普請取極覚（東粂原岡安家文書　№７０９）

覚

武州埼玉郡

一高三百九拾四石弐斗壱合　久米原村
惣田反別合弐拾四町八畝拾八歩
内　皆用水来リ申候
石高百九十九石三升□合八夕弐才
外流田七町壱反八畝弐歩　用水引不申候
石高無御座候
此訳ヶ
一高百三拾壱石四斗三合　細井六郎兵衛知行所
名主　庄左衛門印
組頭　吉左衛門印
田方八町弐畝弐拾六歩　用水引来リ申候
内　石高六十六石三斗壱升四合九夕四才
外流田弐町四反七畝七歩　用水引不申候
石高無御座候
一高百三拾壱石四斗□合　米津出羽守知行所
名主　甚左衛門印
組頭　彦右衛門印
田方八町弐畝弐拾六歩　用水引来リ申候
内　石高六十六石［　］
外流田弐町五反九畝廿八歩　用水引不申候
石高無御座候
一高百三拾壱石四斗三合　渥美九郎兵衛知行所
名主　源兵衛印
組頭　孫兵衛印
田方［　］
内　石高六十六石□斗壱升四合［　］四才
外流田弐町三反廿七歩　用水引不申候
石高無御座候
一□□谷村□悪水□□長弐間横□尺高□□
伏越壱ヶ所
一□□□新［　］繰樋壱ヵ所
一［　］笠原沼代用水長八間横［　］繰樋壱ヵ所
一久米原爪田谷村境□□落シ長六間横［　］伏越壱ヵ所
一笠原沼□□境［　］落シ長五間横□□高壱尺伏越壱ヵ所
一笠原沼御新田用水長七間横壱尺弐寸高九寸掛ヶ樋
下［　］
右者笠原沼御新田ニ付来ル申酉両年ニ用水□□□□□□□伏越繰樋掛ヶ樋等之儀御入用御普請被成下候、御儀書面之趣□□相違無御座候、以上
享保［　］
御奉行所様

●元文三年　笠原沼新田作付地届（須賀戸田家文書　№１９６）

差上ケ申一札之事
一田七町九畝廿四歩
内三町五反四畝廿七歩　掘付田堀敷引
残三町五反四畝廿七歩

此分け　　当作仕付候分
壱町七反七畝廿五歩　　内壱町歩余水かふり用立申間敷様ニ相見江申候
壱町七反七畝弐歩　　砂利場
外ニ四反六歩
右は笠原沼新田当午年作付為御見分と御出被成候ニ付反歩相改書上ケ之通り少も相違無御座候、以上、
埼玉郡百間領須か村
名主　政右衛門
同　庄右衛門
百姓代　吉左衛門
元文三年午五月

●延享元年　笠原沼百間西原組新田年貢割付状（百間西原新井家文書　№１９８０）

子御年貢割付之事
武蔵国埼玉郡
一高拾弐石八斗五舛弐合　笠原沼百間西原組新田
此反別壱町八反拾五歩　田方
此わけ
中田壱反八畝歩　当不作引
六畝歩　当付荒引
内三畝歩　当検見引
弐畝七歩半
残六畝廿弐歩半
此取米三斗四合　反四斗五舛
中下田五反弐畝廿四歩　当不作引
壱反七畝拾八歩　当付荒引
内壱畝七歩　当検見引
七畝歩半
残弐反六畝廿八歩半　反四斗
此取米壱石七舛八合
下田四反弐畝拾八歩　当不作引
壱反四畝六歩　当付荒引
内三畝拾歩　当検見引
三畝七歩
残弐反壱畝廿五歩　反三斗五舛
此取米七斗六舛四合
下下田六反七畝三歩　当不作引
弐反弐畝拾壱歩　当付荒引
内壱反七畝廿歩　当検見引
三畝拾五歩
残弐反三畝拾七歩　反三斗
此取米七斗七合
取合米弐石八斗五舛三合　野銭
外　反五文
一永弐拾壱文　口米
此反別四反壱畝廿四歩　口永
一米八舛弐合　御伝馬宿入用
一永六分　六尺給
一米八合　御蔵前入用
一米弐舛六合
一永三拾弐文壱分
納合　米弐石九斗六舛九合
永五拾三文七分

右之通当御取箇相極之間惣百姓並入作之者共立会無相違致割合来ル極月十日限急度可皆済者也

延享元年子十月　　井弥惣兵衛㊞（井沢弥惣兵衛正房）
右村
名主
組頭
惣百姓

●延享二年　笠原沼新田囲堤普請所見分届（須賀戸田家文書　№１９１）

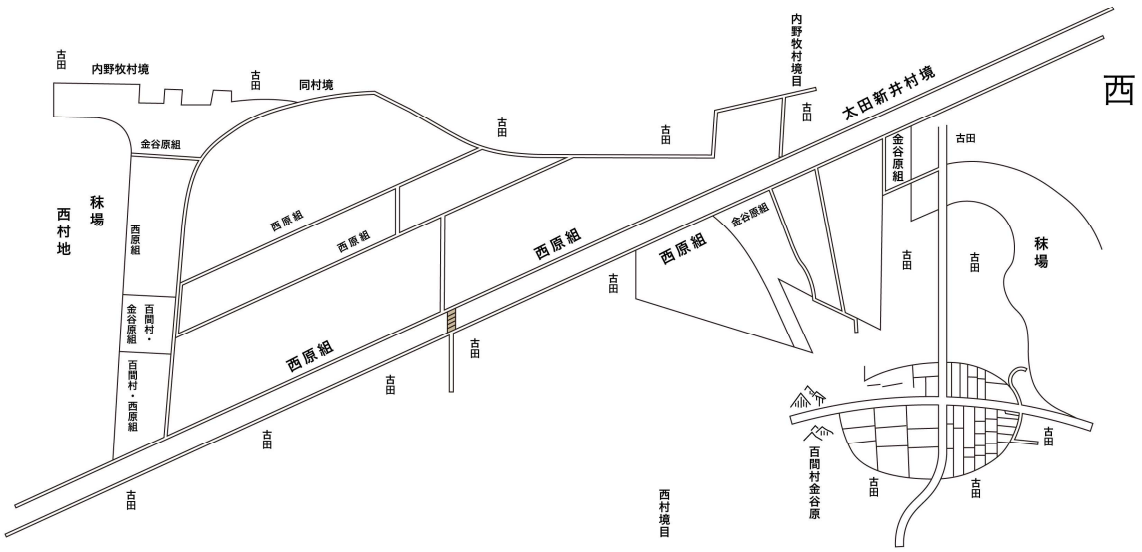
差上ケ申一札之事

一武州埼玉郡笠原沼新田囲堤洩留腹付御普請所新田請村々高割を以自普請被仰付被下候様と先達て御願申上候ニ付、此節御見分御目論見成被下難有奉存候、然ル上ハ被仰付次第人足間違なく差出シ、当春仕付ニ前ニ自普請仕立可申候、尤其節、御奉行様御出御下知可奉願上候、為念証文差上申所仍て如件、

須か村
名主　庄右衛門
組頭　源右衛門
百姓代　平左衛門
名主　政右衛門
組頭　吉左衛門
百姓代　善左衛門
名主　義左衛門
組頭　太兵衛
百姓代
久米原村　与五郎
名主　孫兵衛

延享二年丑二月

●年未詳　百間村西原組金谷原組下ノ谷新田絵図（百間金谷原関根家文書№６０９）



●延享二年　大落堀南筋不用堀一札（百間中島岩崎家文書　№２６５０）

取替申一札之事

一絵図面之通り去ル亥春中御手伝御普請ニ付、本郷村与拙者村中島村、組合七拾六ヶ村川幅□論および　石原半右衛門様吟味罷成候□取扱を以、本川弐拾五間壱筋ニ罷成南壱筋不用相極、則済口証文差上申候、右ニ付拙者共永々江戸詰雑用之替ニ村々より両村江不用堀引渡可仕与申之右割合左ニ印

不用堀長百六拾間　　長八拾間　　川上中嶋村
内　同八拾間　　川下東村
姫宮堀内長百四拾間　　七拾間　　川上中嶋村
内　七拾間　　川下東村

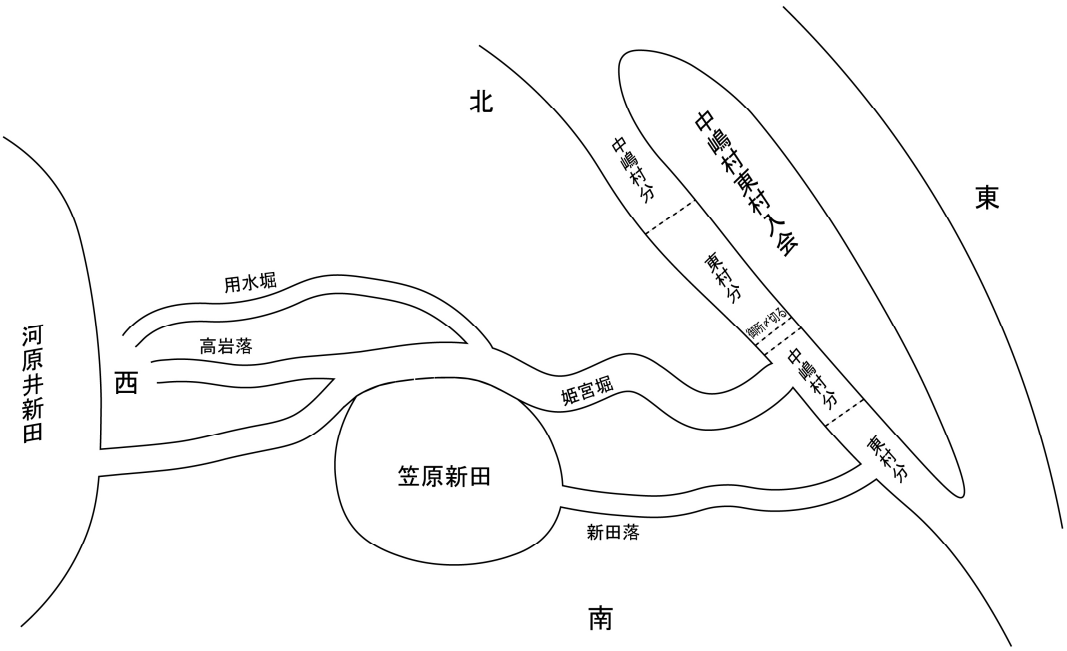
右之通り此度姫宮堀組合悪水落之勝手ニ罷成候□〆切仕候ニ付右捨堀芦真菰地内割合相極ル上者、御新田ニ罷成候共書面之割合を以永々所持可仕候、為□依而如件

延享弐丑年二月

武州埼玉郡百間東村
名主　次左衛門

東粂原村
名主立会
利三郎

中嶋村
名主
新五左衛門殿



●寛延二年　笠原沼須賀村新田村鑑明細帳（須賀戸田家文書　№１５９）

（表紙）
「寛延二年
武蔵国埼玉郡須賀村新田村鑑明細帳
巳十一月　　ひかへ」

小笠原彦九郎様御知行所
本村　池田備中守様御知行所
永井重左衛門様御知行所
遠藤又三郎様

享保十九寅年
八木清五郎様　御検地私領無入合
原田定四郎様

一高四拾五石弐斗九升五合　須賀村新田
此反別七町九畝廿四歩
此訳ケ
上ノ下田壱反七畝九歩　石盛十
中田四反五畝廿弐歩　石盛九ツ
中ノ下田壱町四反三歩　石盛八ツ
下田壱町四反五畝拾八歩　石盛七ツ
下ノ下田壱町弐反四セ拾八歩　石盛六ツ
見付田壱町壱反三セ三歩　石盛五ツ
見付田壱町弐反三セ廿壱歩　石盛四ツ
右ハ当新田之義窪地故御願仕五分通り之掘上田ニ仕候
一見取場　無御座候
一砂利場四反九歩　野銭場
一　御伝馬宿入用
一　六尺給
一　御蔵前入用
東西長三百三拾弐間
一当新田　但シ平均
南北横六拾九間
南北八拾三間
一村附新田故家壱軒茂無御座候
一人別男女牛馬一切無御座候
一僧道心造酒屋無御座候
一御水帳壱冊名主政右衛門所持仕候
一名主給無御座候
一組頭使無御座候
一定使給壱貫五百文
是ハ年々百姓高割ニ而出申候
一御用ニ付名主江戸へ罷出候雑用等小遣之義、七百文ニ相極申候、其外所々江御用ニ而罷越候小遣共ニ惣百姓高割を指出申候
一医師　無御座候
一越石高　無御座候
一升粁　無御座候
一家大工　無御座候
一船大工　無御座候
一桶大工　無御座候
一屋根葺　無御座候
一紺屋　無御座候
一寺　無御座候
一当村渡シ船場　無御座候
一役銀船　無御座候
一御朱印寺社　無御座候
一百姓御年貢地寺　無御座候

一除地寺　無御座候
一除地寺社反別　無御座候
一除地馬捨場　無御座候
一稲千場　無御座候
一御年貢米河岸出し
是ハ前々より当村より権現堂河岸江弐里半附出シ船積仕、江戸浅草御蔵前江積廻し御蔵納仕候、但シ川路廿四里有之御運賃弐分四厘被下候
一当新田通り土橋　長五間　弐ケ所
横壱間
是ハ御新田通土橋享保十三年申年河原井沼新田悪水落堀新堀相当り候ニ付井沢弥惣兵衛様御懸りニ而材木諸色人足共御入用を以御普請被成下候、其以後修復等自普請請ニ仕候
一掛渡井　無御座候
一当村新田
右ハ前々より窪地ニ御座候ニ付掘上ケ田ニ御願申上候而五分通リ之掘上ケ田ニ被仰付依之ニ用水引不申候
一笠原沼囲堤長千四拾間
是ハ河原井沼新田悪水落除堤年々浪欠又ハ押切不出来仕候節ハ御入用を以御普請被成下候尤少破之節ハ新田組合九ヶ村ニ而人足割合自普請ニ付候
一用水堀無御座候
一悪水落堀千五百拾弐間但シ笠原沼新田落口より是ハ笠原沼新田悪水堀
大落堀落口迄
是ハ笠原沼新田悪水落堀床八尺中程より下床九尺之所砂地故連々欠崩只今ニ至リ下床三四尺ニ罷成悪水落兼年々水損仕候
一悪水落堀御新田内中堀長八百三拾間余
是ハ笠原沼御新田組合九ケ村ニ而人足割合仕年々浚藻刈仕候
一質田畑
是ハ當新田之義ハ質物ニ書入候義ハ無御座候併永質物ニ者上中下田共ニ壱反歩ニ付金子壱両位之質物ニ書入金子借用仕り候義も御座候
一御林　無御座候
一溜井沼地　無御座候
一百姓林　無御座候
一荏大豆餅米納　無御座候
一猟船　無御座候
一御預鉄砲　無御座候
一魚鳥猟師　無御座候
一浪人者　無御座候
一切支丹類族　無御座候
一神子山伏　無御座候
一行人　無御座候
右之通當村新田諸色御改ニ付吟味仕書上ケ申候処、少茂相違無御座候、依之名主百姓代連判指上申候、仍而如件、

寛延二年巳十一月　埼玉郡須賀村新田
名主　政右衛門
同　浅右衛門
百姓代　平左衛門
同　友右衛門
同　太兵衛

●寛延二年　笠原沼下野田村新田村鑑明細帳（須賀戸田家文書　No.２５０）

（表紙）
「　寛延二年
笠原沼新田

村鑑明細帳

下野田村新田須賀村持

巳十一月　」

小笠原彦九郎様御知行所
本村　池田備中守様御知行所
古田持添ニて
永井重左衛門様御知行所　本百姓無御座候
遠藤又三郎様

享保十九寅年
八木清五郎様　御検地場私領入合なし
原田定四郎様

一高拾六石五斗壱升　下野田村新田須賀村持
此反別弐町弐反八畝廿七歩
上下田弐反七畝廿四歩　石盛十
中田弐反七畝廿四歩　石盛九
中下田三反四畝廿七歩　石盛八
下田五反拾弐歩　石盛七
下下田五反廿四歩　石盛六
見付田三反七畝六歩　石盛五
砂利場　五反弐畝拾弐歩　野銭場
右ハ当新田之義ハ窪地にて御願仕候分返之掘揚田ニ仕候
一田畑見取場　無御座候
一米壱升　御伝馬宿入用
一米三升三合　六尺給
一永四拾壱文三分　御蔵前入用

一当新田上割　南北九拾四間　但し平均
東西四拾八間

南北八拾三間
一当新田下割　但し平均
東西六拾弐間

一家人別　無御座候
一当新田土地真土砂利赤土ニ御座候　牛馬無御座候
一僧　無御座候
一道心　無御座候
一造酒屋　無御座候
一御水帳壱冊
是ハ当新田須賀村之内江請取所持仕候
一名主給　無御座候
一組頭使　無御座候
一名主御用ニ付江戸江罷出候節ハ、銭七百文ニ相極候て、百姓出銭ニて遣イ申候
一医師　無御座候
一越石　無御座候
一升粁　無御座候
一家大工　無御座候
一船大工　無御座候
一桶大工　無御座候
一屋根葺　無御座候
一小物成運上場　無御座候
一紺屋　無御座候
一寺　無御座候
一当村渡舟場　無御座候
一船　無御座候
一御朱印寺社　無御座候
一御年貢地寺　無御座候
一除地　無御座候

一除地寺社　無御座候
一稲千場　無御座候
一御年貢川岸出し
是ハ前々より当村より権現堂川岸江附出し道法弐里半、権現堂より船積仕江戸浅草御蔵前江積廻し御蔵納仕候、但川路弐拾四里有之御運賃弐分四厘被下候
一板橋土橋石橋　無御座候
一圦樋掛渡井　無御座候
一関枠　無御座候
一当新田地
くぼ地ゆへ用水引不申候
一川原井沼新田悪水落水除堤長千四拾間余
是ハ笠原新田附廻シ囲堤長千四拾間余之処、年々浪欠又ハ押切所出来之節ハ御取分之上御扶持米被下御普請被仰付候、尤少破之節者組合九ケ村ニて自普請ニ仕候
一笠原新田悪水中落堀長八百三拾間余
是ハ組合九ケ村ニて人足割合自普請ニ浚藻刈仕候
一悪水落堀長千五百拾弐間　但笠原新田落口より大落堀口まで
是ハ笠原新田落堀床九尺中程より下床壱丈之所、前々御入用を以御普請被成下候、尤砂地故連々欠崩、只今四五尺ニ罷成悪水落兼難義仕候、
一質入田
是ハ質物書入上中下大概壱反ニ付金弐分位借用仕候、但シ永質地者壱反ニ付金三分より三分弐朱位　無御座候
一御林　無御座候
一溜井沼地　無御座候
一百姓林　無御座候
一荏大豆餅米納　無御座候
一猟船　無御座候
一御預り鉄砲　無御座候
一魚鳥猟師　無御座候
一浪人　無御座候
一切支丹類族　無御座候
一神子山伏行人　無御座候
右之通当新田諸色御改ニ付吟味仕書上候処少も相違無御座候、依之新田請名主印形差上ケ申候、仍て如件、

寛延二年巳十一月　埼玉郡下野田村新田須賀村請
名主代　友右衛門
彦八
平左衛門

高階伝次郎様
御役所

●寛延三年　野牛・高岩堰枠取扱証文覚（百間折原家文書　№４７１８）

申渡覚
笠原沼用水組合之内拾壱ヶ村組合願出候者、野牛村・高岩村用水関枠弐ヶ所之内野牛村関枠之義ハ壱ヶ村取払被　仰付度旨右拾壱ヶ村申之、野牛村関枠取払被仰付候而者、村内耕地高場故用水掛兼迷惑仕候間、只今迄之通被立置被下候処申之、此方御普請役様御見分遂御吟味候処、野牛村・高岩村関枠無之候而者弐ヶ村高場ゆへ用水不行届場所ニ付、依而下郷村々江用水引渡し之節ハ関枠とも不残明払、野牛・高岩両村引候節者不残□建切用水番水いたし、用水有丈ヶハ無甲乙可為行届、若用水不足之節ハ上大崎村江詰御普請役並見廻リ之もの共見分之上、上郷用水御封印下郷用水日割刻割を以為行、之内上郷用水口々為見届番人差置、下郷用水之時ハ御普請役江改之切手ヲ以関枠不残取上ヶ隣村江預置用水為引候事、右番水ニ申付候而も、野牛村耕地畔無之高場ゆへ此義□然用

水掛り候而も用水不給□候事
一去々辰年迄ハ用水組合年番立置候処、去巳年より野牛・高岩年番相除候ニ付、
前々之通弐ヶ村ニ而年番相勤候様仕度旨拾壱ヶ村とも申之、野牛村・高岩村
ハ下郷年番相離去巳年限相勤申候、此度御普請役令吟味候処、用水年番無之
候而者差支も可有之候間、前々之通上郷・下郷より年番相定御用相達候様可
仕事

寛延三午年六月

埼玉郡
西粂原村　名主　半左衛門
東粂原村　同　庄左衛門
須賀村　同　儀左衛門
爪田谷村　同　久左衛門
中嶋村　同　九郎兵衛
百間村　同　源太左衛門
西原村　同　伝兵衛
金谷原村　同　七平
西村　同　新右衛門
東村　同　七蔵
野牛村　同　与市右衛門
高岩村　同　長左衛門

伊奈半左衛門様
役所

●宝暦五年　逆井百間村新田名寄帳（百間折原家文書　№１２６）

（表紙）
「　宝暦五年
逆井新田名寄帳
百間村新田
名主　源之進　」

逆井新田
一下畑七反弐畝廿四歩　善八
清兵衛
一下畑四反八畝廿四歩改　仙助
内　善次郎
八セ歩　同人
此永五十六文　道心
一中ノ下畑四反七畝拾八歩改　同人
一中ノ下畑七反九歩改　同人
一中畑四反三畝九歩改　同人
一中畑弐反四畝九歩改　同人
一中畑弐反七畝壱歩改　同人
一中畑四反三畝九歩改　同人
同人
同人

青林寺
一中ノ下畑壱反九畝歩改　三郎兵衛
同人
一中ノ下畑七畝廿四歩改　三右衛門
源太宿
一中ノ下畑壱反弐畝歩改　四郎兵衛

一中ノ下畑壱反四畝拾五歩改　甚五右衛門
［　］　惣七
一中畑三畝六歩　六郎兵衛名
一中畑三畝九歩　惣七
一中ノ下畑三畝九歩改　藤左衛門
一中ノ下畑壱反三畝六歩改　甚左衛門
申年彦兵衛渡
一中ノ下畑壱反□畝三歩改　甚五左衛門
半蔵渡　辰山重右衛門渡ル
一中ノ下畑弐畝拾八歩改　孫兵衛
一下畑壱反八畝七歩改　利兵衛
源太宿
一下畑七畝三歩改　□右衛門
一下畑三反四畝歩改　儀右衛門
一下畑壱反弐畝廿七歩改　甚五兵衛
源五兵衛
一下畑六畝拾八歩改　与兵衛
一下畑弐反八畝廿四歩改　七兵衛
一下畑三反拾五歩改　九右衛門
清地村
一下畑壱反八畝六歩改　四郎兵衛
一下畑四畝拾五歩改　市郎左衛門
市左衛門渡
清左衛門名
一下畑壱反弐畝歩改　□兵衛
太右衛門渡
一下畑壱反七畝三歩改　庄兵衛
三右衛門渡
一下畑三反三畝歩改　庄兵衛
源太左衛門名
一下ノ下畑壱畝拾五歩同　善八
清兵衛
一下ノ下畑弐畝九歩同　仙助
一下ノ下畑四畝廿壱歩同　喜兵衛
久兵衛
加治兵衛名
一下ノ下畑三畝三歩改　善八
清兵衛
一下畑壱反八畝廿四歩改　仙助
一下畑九畝拾弐歩改　権兵衛
半右衛門
一下畑弐畝拾八歩改　源太左衛門名
善八
勘右衛門
仙助
倉松村
一下畑七畝歩改　金兵衛
六兵衛へ渡ル
一下畑弐畝廿壱歩改　六兵衛
源助名
一下畑壱反五畝廿八歩改　源助
源太左衛門名
一下ノ下畑三反八畝拾八歩改　善八
清兵衛
仙助
市郎左衛門
一下畑壱反九畝六歩　□右衛門渡ル

与頭半左衛門渡
一下畑壱反八畝廿壱歩改　権右衛門
内壱反九畝拾歩半改　又左衛門
一下ノ下畑壱反弐畝拾弐歩改　弥八
一下ノ下畑壱反七畝拾五歩改　弥八
一下畑三畝拾弐歩改　弥兵衛
一下畑五畝拾五歩改　伊左衛門
一下畑弐反九畝拾弐歩　伊左衛門
申年
内改　廿弐歩　庄蔵渡ル
一中ノ下畑八畝七歩改　孫左衛門
一中ノ下畑三畝三歩改　政右衛門
一中ノ下畑壱反壱畝廿壱歩改　市郎左衛門
□四郎より（朱書）
一中ノ下畑壱反九畝歩　孫右衛門
内改　九畝拾五歩七右衛門
渡
九畝拾五歩甚五右衛門
一中ノ下畑九畝拾弐歩改　政右衛門
一中ノ下畑九畝拾五歩改　孫左衛門
一中ノ下畑弐畝拾五歩改　利左衛門
清地村
一中ノ下畑壱反七畝九歩改　四郎兵衛
一中ノ下畑壱反三畝六歩改　四郎左衛門
一中ノ下畑五畝歩改　四郎左衛門
与頭徳左衛門渡
一中ノ下畑弐反五畝拾五歩　□□衛門
源太左衛門名
一下ノ下畑壱畝拾八歩　善八

清兵衛
仙助
与頭　徳左衛門
同人同名　同人
同人　同人
一下畑八畝拾□歩改
与頭　徳左衛門
同人同名　同人
一中ノ下畑五畝廿七歩改
同人　同人
同人
与頭　徳左衛門
一中ノ下畑壱畝廿壱歩改
政右衛門
一中ノ下畑壱畝三歩
孫左衛門
源太左衛門名
一下畑八畝廿壱歩
善八
清兵衛
仙助
与頭　徳左衛門
同人同名　善八
清兵衛
仙助
与頭
一下畑四畝拾五歩

徳左衛門
同人名　清兵衛
善八
仙助
同人名　同人
同人
同人
同人名　同人
同人
同人
同人名　同人
同人
同人
右之寄
六斗代
七斗代
永九文
六斗代
永八文
高弐拾石壱斗壱升弐合
永七文
五斗代
高弐拾六石八斗四升五合
永六文

一下ノ下田壱反弐畝六歩
高弐石五斗五升八合
一下ノ下田壱反壱畝廿壱歩
反別拾町三反八畝三歩
一下ノ下田壱反五畝拾弐歩
高合五拾九石六斗七升五合
一下ノ下田壱反壱畝三歩
（裏表紙）
「一四斗　道心」
下ノ下田五反拾弐歩
高三石弐升四合
中畑壱町壱畝廿四歩
高七石壱斗弐升六合
中ノ下畑三町三反五畝六歩
高弐拾六石八斗四升五合
下畑五町三反六畝廿七歩
高弐拾六石八斗四升五合
下ノ下畑六反四畝六歩
高弐石五斗五升八合
反別拾町三反八畝三歩
高合五拾九石六斗七升五合
（裏表紙）
「一四斗　道心」

●宝暦十二年　用水堀理不尽出入口上書（白岡市岡泉渋谷家文書　№５７）

乍恐以書付奉願上候
池田備中守様知行所
武州埼玉郡須賀村
願人　名主
用水堀理不尽ニ築留同土手数ヶ所切崩笠原御新田江水押込其外繰樋寸法相破候出入
米津越中守様領分
同州　同郡　百間村
相手　名主
松波甚兵衛様御知行所
同村金谷原組
同断　名主
森川下総守様御知行所
同村西原組
同断　名主
一武州埼玉郡百間領笠原御新田請之内書面之村々奉申上候、当五月廿九日より六月廿三日迄大雨降続右御新田江水湛候折節、右廿三日夜水音相聞へ候ニ付水防ニ見廻り候所、相手村御新田所持不仕候ニ付古田囲ニ字名京塚と申処ニて用水堀築留有之、用水土手切崩御新田江悪水押込候様子に相見江、御新田

弥以満水仕立毛水底ニ相成一向用立可申体ニ無御座候ニ付、百間村之内御新田持百姓伝内太郎兵衛と申者相頼人足五六人相雇、右築留取払候上相手村名主方江罷越、重て築留不申候様相断罷帰リ少々水干潟付立毛少々も用立可申哉ニ奉存候所亦候、先月廿八日夜大雨ニ付翌廿九日猶亦見廻リ候所、右京塚橋より拾四五間下ニて亦候築留逆上橋ニて莚堰仕、前書相手之百姓共番仕候ヲ見留申候、其外之者共は面々見留メ不申候得共五六拾人程徒党ニて番仕罷有、御新田江水為湛候ニ付築留並莚堰ともニ取払候様申候得共承引不仕、強て頓着仕候ハヽ、凶事出来可仕儀眼前と奉存候ニ付、相手村名主方江罷越右取払之儀相断候得共我侭申取払不申候、殊ニ三寸四方ニ相極メ候繰樋壱尺四方程之籠樋ニ仕旁以我侭仕、御新田は勿論之儀古田迄之指障ニ相成候ニ付無是悲此度奉願上候、去ル巳六月中も京塚橋切崩陸築ニ仕及出入、伊奈半左衛門様御役人臼倉喜六様、米津越中守様より笠原三郎兵衛様、松波甚兵衛様より岩城政右衛門様右三御役人右場所江御越御立会之上御吟味有之候所、森川下総守様御知行所同村西原組名主伝兵衛義相手一同罷出彼是取含候所は、聊築留メ候場所取払以来築留不申筈ニ熟談仕双方連印を以済口証文差上右出入一件相済候所、御吟味御威光ニ不奉恐内済証文相破御新田江水湛候義一向不相厭亦候、当年も理不尽ニ築留御新田江差障打続損毛ニ逢候上亦々及出入、右御願入用等も相掛御新田所持之百姓弥増困窮難儀ニ候上、後年之儀猶更安堵難仕難儀至極奉存候間、右相手並徒党番仕候者共迄被召出御吟味之上右築留候場所取払、且亦繰樋之儀も相極之寸法ニ伏せ直し、当立毛之所相手村江弁米被仰付被下置候様奉願上候、此以後年々右理不尽被致候ては御新田相続難成、差上地之御願ニても仕候より外ニ致方無御座候、難儀千万ニ奉存候間御慈悲ヲ以右理不尽之段幾重にも御吟味被成下、御新田末々相続相成候様被為　仰付被下置候ハヽ難有奉存候、委細御吟味之節乍恐猶又口上ニ可申上候、以上、

武州埼玉郡百間領
爪田谷村
宝暦十弐年　名主
午七月
訴訟人　佐右衛門
久米原村　名主
同　庄左衛門
須賀村　名主
同　浅右衛門
御奉行所様

●宝暦十二年　京塚橋小沼掛樋出入済口証文（須賀戸田家文書№９５・７９・８０）

（前欠）
名主年寄百姓代出訴仕候者、当六月十三日より相続大雨ニ而笠原新田満水仕候間、囲堤洩留□置木仕水防致候所、忍領下中條村より星川江用水引取菖蒲領戸ヶ崎の地内中嶋圦より笠原黒沼代水ニ領々用水引取申候ば所ニ、此度右中嶋圦押破悪水夥敷落候所、右新田組合御私領同郡百間領百間村並金谷原組之者とも古田相囲イ字京塚橋と申所ニ而右用水堀築留、土手数ヶ所切崩シ笠原新田へ悪水切込、其上右新田悪水落堀之内逆丈橋と申所ニ而莚堰仕悪水湛させ候而、同土手取繕右築留取拂候所再往築留メ土手切込候、御新田不残水底ニ罷成候間見分御吟味之上重而右躰之理ふ尽不仕様被仰付之義奉願候旨申上候、依之御役人中被指出双方立会被仰付場所御見分被成下候処、相手方百間村地内字京塚と申上候幅七尺之用水堀ニ掛置候土橋取毀土流者、陸築ニ仕右土手之内長三尺より八九尺迄之切レ所三ヶ所、其外洗流之場所並切レ所補理候所茂相見へ候、一躰□□瀉附候得共右京塚橋より三拾間程上之九尺程之切レ所より笠原新田へ逆水仕候、依之双方御尋被成候所、相手百間村茂金谷原組呑上候者、右用水井筋之義ハ上郷中嶋圦より之用水路ニ而悪水落ニハ無之候、両村之義悪水落無之右用水堀より悪水請候而ハ歴前水損所ニ罷成候ニ付悪水之節ハ前々より築留候場所、殊ニ此度之義ハ久米原村・須賀村地内神明前耕地之内三ヶ所切所有之笠原新田悪水右用水堀へ落込両村水腐いたし候間築留申候、土手道の内京塚橋際より小沼耕地へ用水掛樋之所九尺程ハ切崩右悪水為吐込候得共其外切崩候未曽而無之候、全躰用水堀右之通築留候間悪水湛越水洗切罷成新田江逆水仕候義無相違候得共、右築留之場取拂候而ハ両村不残水腐仕候間以来共ニ築留相止

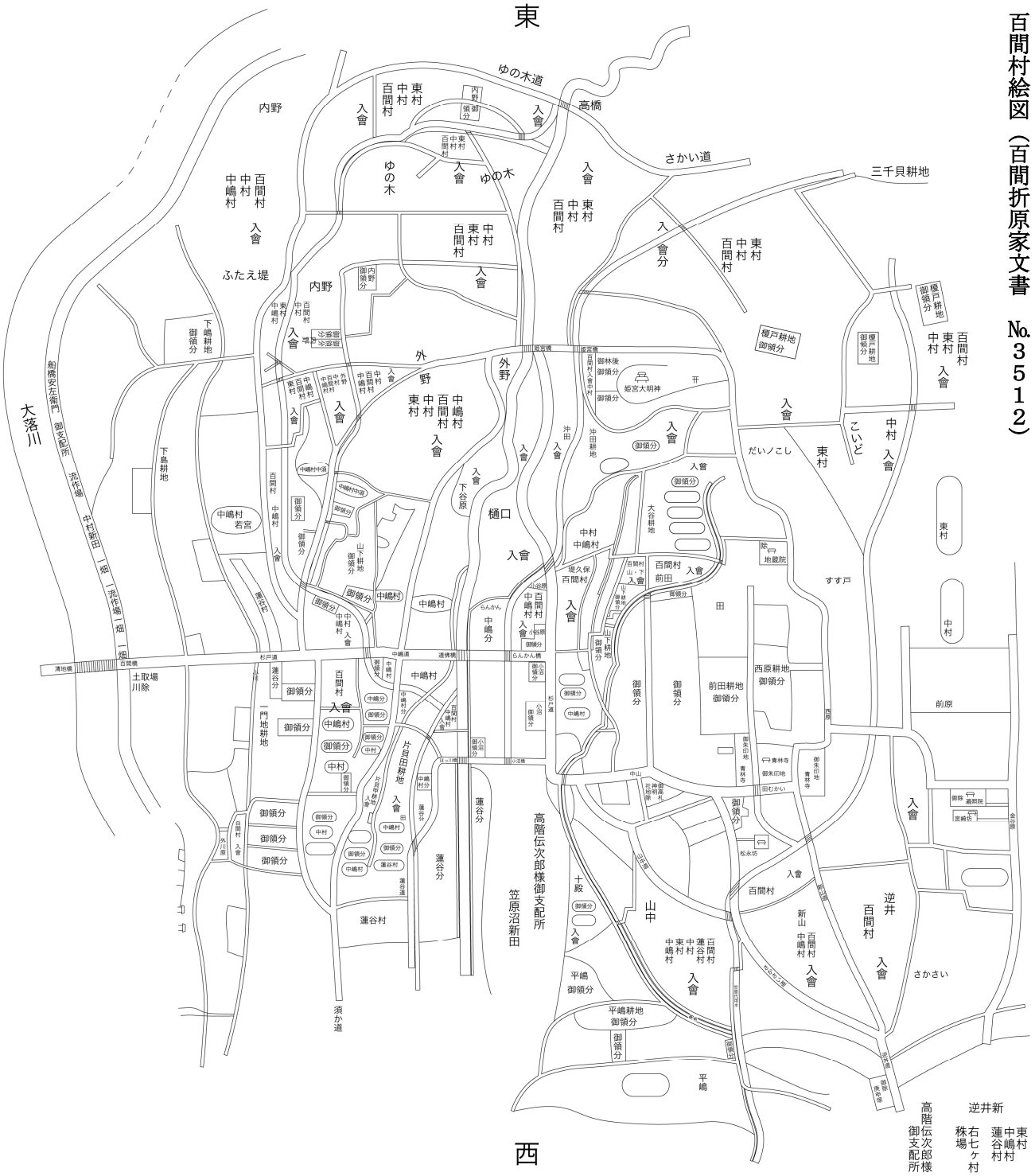
候儀難仕旨申之願方五ヶ村之者共儀者、久米原村・須賀村地内神明前耕地切割
候儀無之候、尤洗切三ヶ所有之候得共早速築立悪水百間村用水堀江落候儀無之
旨申之候、依而被仰聞候者逆丈橋迮樋之儀並神明前耕地切割悪水落候と申儀共
ニ双方申争候得共無証拠之義御取用難被成相手方両村之儀悪水落無之所上郷
より之悪水請候儀難儀之旨申立候得共、百間村耕地之内沖田耕地より笠原落堀
江悪水落候へハ悪水落無之とハ被謂間敷義諸用水堀江笠原新田悪水落候儀ハ
無之両村用水路水上より之悪水京塚橋ニ而築留候而者少々之際溜リニ而も数
千間之落水湛溢水笠原新田江逆水候者□□面ニ候、縦用悪井筋無之候迚も出水
之節上郷より之悪水下郷ニ而可請儀ハ夥然候、然處右之通用水井筋も有之其上
耕地之内悪水吐茂有之上ハ前々仕来ニ候共無証拠之儀、此度築留掛樋之所土手
切崩候儀共心得違候旨相手方江再往利害仰聞候趣逸々承知納得仕候、然上者京
塚橋築留取拂向後決而築留申間敷候笠原新田囲堤繕候儀不仕頃ニ掛樋伏同村
小沼耕地用水懸引仕右土手切崩候義者勿論右樋法寸広ヶ候儀曽而仕間鋪旨相
手両村申之願方五ヶ村之儀も相手方右之通り申上分水願上候筋無之候、尤笠原
新田悪水百間村用水堀江切落候儀者無之候得共以来理不尽悪水落候□成儀聊
仕間鋪旨申之双方共ニ右之通、儀定熟談仕偏御威光於以和融内済仕難有奉存候、
然上ハ右出入一件ニ付重而双方申分預り間敷儀、決而無御座候依之為後証連印
済口証文差上申所如件

年号

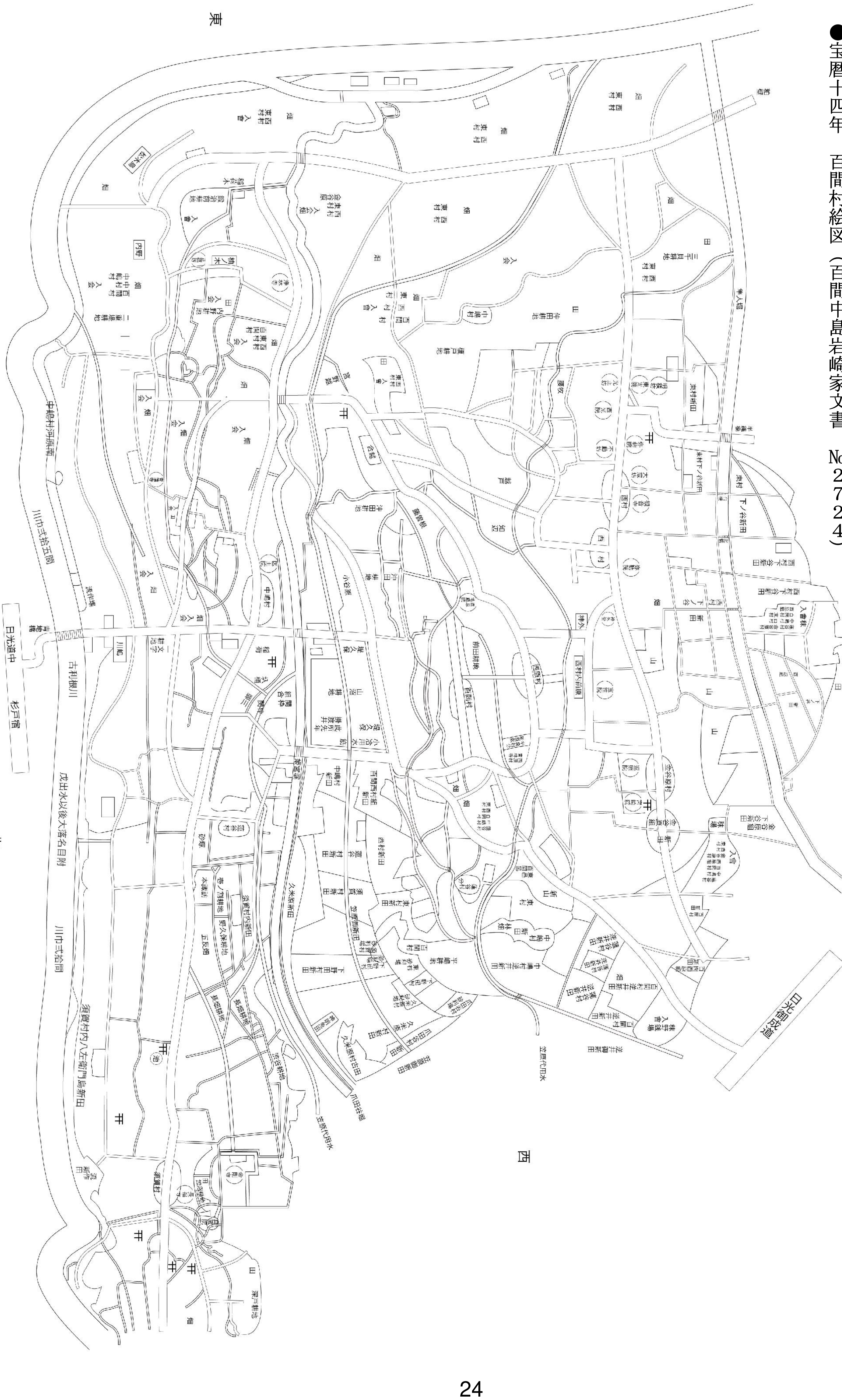
佐右衛門　勝右衛門　与五右衛門
茂右衛門　源六　兵左衛門
新右衛門　平右衛門
庄左衛門　伝右衛門
金六　直右衛門
彦左衛門
太郎左衛門
与五右衛門
甚左衛門
友右衛門

源太
七兵衛
三郎左衛門
徳左衛門
七郎右衛門
源七
源右衛門

●寛延二～宝暦三年　百間村絵図（百間折原家文書　№３５１２）



●宝暦十四年　百間村絵図（百間中島岩崎家文書　No.２７２４）



（清地橋上流古利根川）
川幅弐拾間　古利根川　戌出水以後大落名目附

（清地橋下流古利根川）
川幅弐拾五間

（部分）
橋長十三間
清地橋長五間半
　幸手領組合
中央弐間
　百間村
川嶋橋長五間半
　橋組合　百間村
　　西原村
　　金谷原村
　　中嶋村
　　西村
　　東村

橋長古来拾壱間幸手領百間領五間半宛引請修覆致来候所、弐間欠落出来及遺論申、細田丹波守様御巡検先江願書奉差上御取上之所、御普請方保田太左衛門様・上條幸十郎様御吟味ニ而弐間之所百間村引請ニ而相済、則済口証文辻源五郎様御役所双方被召出、印形差上ル、則百間村弐間引請之書付中嶋村江取置候

宝暦十四年申三月　　中島村
　　名主　九郎兵衛

●明和四年　逆井境道並橋間出入取替証文写（逆井木村家文書　№1）

（表紙）

「　明和四年亥五月
　中島村金谷原村爪田谷村下野田村蓮谷村逆井関係
　為取替証文　謄本　」

為取替証文之事

一此度、下野田村・爪田谷村ヨリ中島村逆井新田・金谷原村、右両村相手ニ境道上置並橋間之儀出入相掛ケ及出訴候ニ付、双方御役人様方御立会為御異分御出段々可及御尋とモ候所、杉戸町名主小左衛門・名主清兵衛・蔦田権太郎右三人取扱内済為致度段御願申上候ニ付、右出入御下ケ被下依之双方エ異見有之相互ヒ熟談得心之趣左之通

一逆井道橋間水行弐尺四寸五分尤橋掛候事前後道ニ順シ致申筈

一小土手築立ノ所書面とハ申合ヲ以上置削落内済調候上者、其侭ニ差置定杭所々ニ打以来修覆仕候節、右定杭相用申筈

一秣場ノ儀ハ、別紙書付両村ヨリ右七ヶ村ニ一札入置申筈

一爪田谷村・下野田村両村古田悪水落ヨリ、此節迚モ熟談ノ上中島村・金谷原村田耕地エ用水行取候ニ付両村両村田境ニ相当リ候井筋之儀ハ、下野田村・爪田谷村ニテモ重ニ悪水と相用金谷原村・中島村ニテモ田耕地馬場モ有之候ニ付用水と相用候得者菰堤致候得者、下野田村・爪田谷村田床低時候ニヨリ上郷逆水難義ニ御座候節ハ地元金谷原村エ申達取払此上双方難義ニ不相成様勘弁致筈

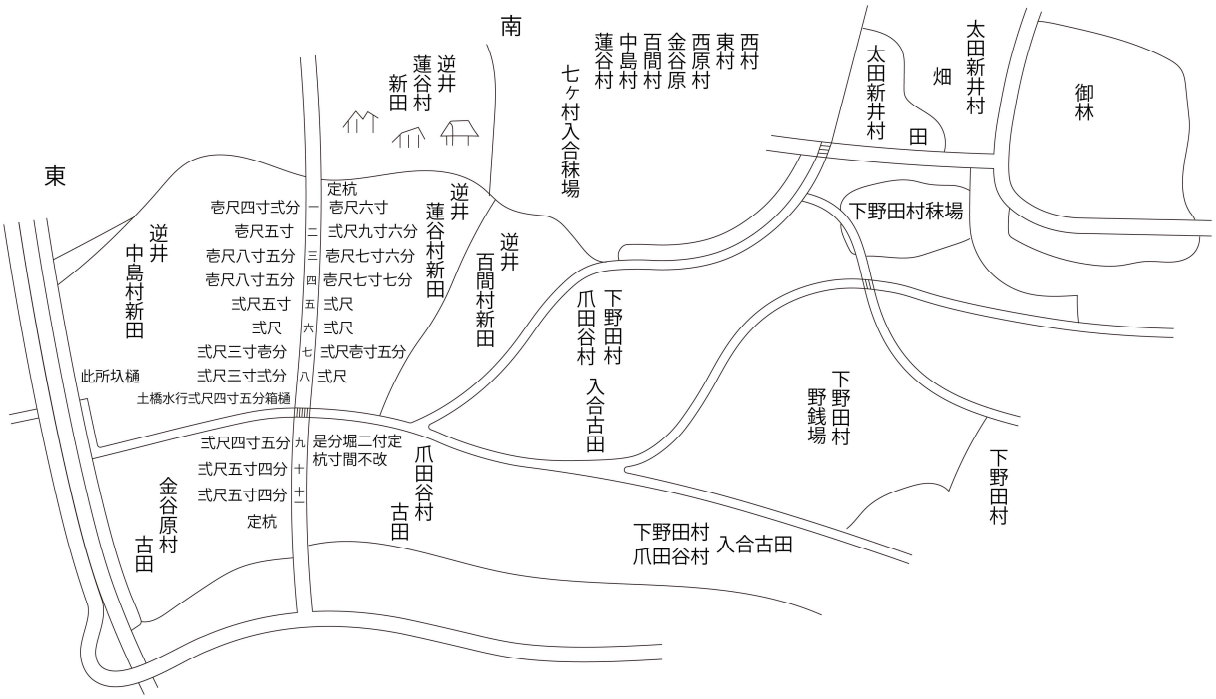
一下野田村爪田谷村古来悪水堀有之近来用水路ニ相用右井筋ノ儀年々浚場土鑿ノ儀、爪田谷村エ七分金谷原村エ土ノ儀為修覆之三分場候筈

一金谷原村・中島村境ニ相当リ候上郷悪水路落堀ノ儀、橋間弐尺四寸五分相用不申当時有形ヲ以年々浚等可仕候、尤此上金谷原村・中島村耕地水湛難儀有之候テ、水除等不致候テハ不叶義モ御座候得者上郷悪水落差障リニ不相成様相談ノ上双方申合勘弁可仕筈

右書面之通取扱ヲ以双方熟談内済仕候上者、伺後相互ニ右一件違変申間敷候、
為後日取扱人加判為取替証文仕候所、仍而如件

中島村
名主　九郎兵衛
組頭　源七
百姓代　徳兵衛
金谷原村
名主　七郎右衛門
組頭　勝右衛門
百姓代　浅右衛門
杉戸町取扱人
名主　小左衛門
名主　清兵衛
蔦屋　権太郎
爪田谷村
名主　佐右衛門殿
組頭　浅右衛門殿

●明和四年　逆井境道並橋間出入取替証文絵図写（逆井木村家文書　No.2）



右者先達而爪田谷村下野田村両村ヨリ及出訴候三ヶ條出儀此度御銘々右
場所為御見分被成御越一通御尋之上内済可仕旨利害被仰聞尤取扱人
ヨリモ精々異見差加へ双方熟談之上内済仕候ニ付絵図面ニ委ク託差上申候通
リ少々相違無御座候右一件ニ付来双方差支候儀無御座此上御願ケ間敷
申上間敷候依之連印奉差上候以上

野田弥市右衛門御代官所
武州埼玉郡爪田谷村
名主　佐右衛門
組頭　文七
百姓代　兵右衛門

一橋御領知
同国同郡下野田村
名主　与右衛門
組頭　惣兵衛
訴訟方百姓代　恒右衛門

野田弥市右衛門御代官所
同国同郡中島村逆井新田
名主　九郎兵衛
組頭　沖右衛門
百姓代　徳兵衛

右同断
同国同郡蓮谷村逆井新田
名主　平右衛門
組頭　弥右衛門
相手方百姓代　弥市

松波甚兵衛知行所
同国同郡金谷原村
名主　七郎右衛門
組頭　幸右衛門
百姓代　浅右衛門

伊奈備前守御支配所
同国葛飾郡杉戸宿
名主　小左衛門
同　清兵衛
扱人当住　権太郎

●明和八年　第六天分水扱証文（百間折原家文書　№４７１５）

（端裏書）
「明和八年丑十月　大六天引分ケ扱証文」

為取替申扱証文之事

一武州埼玉郡百間領西村・東村より、笠原代用水路字第六天下分水北方ニ建置候押掛関之儀、御用水引取之差障相成候意味ヲ以、同領百間村・西原村・金谷原村右三組江相掛候松平対馬守様江及出訴候処、五給御地頭様御役人中様方右場所為御見分被成御越双方一同立会之被　仰付、御見分之上双方へ一通御尋之上御理解被　仰付候処、同領中島村名主九郎兵衛・蓮谷村名主平右衛門・爪田谷村名主佐右衛門取扱内済為致候段、御願申上双方江情々異見差加へ候処、得心之上熟談内済左ニ取究候

一第六天下用水引方之儀、向後番水之筈相済百間三ケ村耕地之儀者、用水多分順水之場所西村・東村耕地之儀者一躰高場用水不順致候ニ付、南北両方へ此度水門補理置、南方江引取候節ハ北方江戸前相建、北方江引取節者、南方江戸前相建候筈、尤用水日割之儀者南北江用水引取候田反別左之通

南用水田反別
一田反別　弐拾弐町七畝弐拾弐歩　東村
一同　三町歩　西光院地領
一同　六町九反九畝弐歩　西村

一同　壱町五反六畝□歩　百間村
一同　弐町弐反六畝拾三歩　西原村
一同　拾七歩　中島村
一同　七反七畝七歩　金谷原
田反別合三拾六町九反七畝歩
外拾五町　背者高場ニ付□分
合五拾壱町九反七畝歩
北方用水田反別
一田反別　六町弐反三畝拾七歩　百間村
一同　拾町五反四畝三歩　西原村
一同　弐町壱反拾三歩　金谷原村
一同　三反八畝二拾五歩　東村
一同　弐町八反弐拾九歩　西村
一同　四反歩　中島村
一同　壱町八反六畝七歩　蓮谷村
笠原新田
一同　三町九反八畝壱歩　西村
笠原新田
一同　壱町弐反拾歩　西原村
田反別弐拾九町五反三畝拾五歩
惣反別合八拾壱町四反九畝弐拾五歩
前書之反別ヲ以番水仕候筈、万一右ニ付用水不引渡難儀之筋も双方ニ有之候ハヽ、猶又来辰巳両年之内双方村役人並取扱人之内立会ニ而勘弁いたし、用水引分無甲乙引渡候様仕候筈、左候ハヽ其方限ヲ以相定出来、日割料割番水無滞仕候筈、縦番水日限之内たりとも相応ニ用水引渡候ハヽ、後番之方江差通候筈、尤用水前後引方之儀者、其時候ニ随有者先願主方第一ニ引候筈
一旱水之節何れ之村々ニ而も用水願致候ハヽ、願ニ不罷出候村方者不差障、願之村々江直ニ差通候筈
一双方対談之上番水ニ用水引取候節者、双方村役人立会耕地見廻相互ニ勘弁之上、引渡様致候筈
前書之通此度取扱ヲ以熟談之上内済致候上者、少も違変致間敷候、為後証扱人加判之上一札双方為取替置候、処仍如件

明和八卯年十月

埼玉郡百間領西村
名主　新右衛門
与頭　与四右衛門
百姓代　田之助

同郡同領同東村
名主　嘉左衛門
与頭　嘉右衛門
百姓代　三郎右衛門

同郡同領同西原村
名主　伝治郎
与頭　清兵衛
百姓代　文六

同郡同領百間村
名主　小源治
与頭　弥源二

百姓代
九右衛門
同郡同領金谷原村
名主
七郎右衛門
与頭
源七
百姓代
権八
蓮谷村
取扱人
平右衛門
爪田谷村
同　佐右衛門
中島村
同　九郎兵衛

百間村
西原村
金谷原村

●天明六年　黒沼笠原沼用水路御普請願（百間中島岩崎家文書　№１２７１）

乍恐書付奉願上候

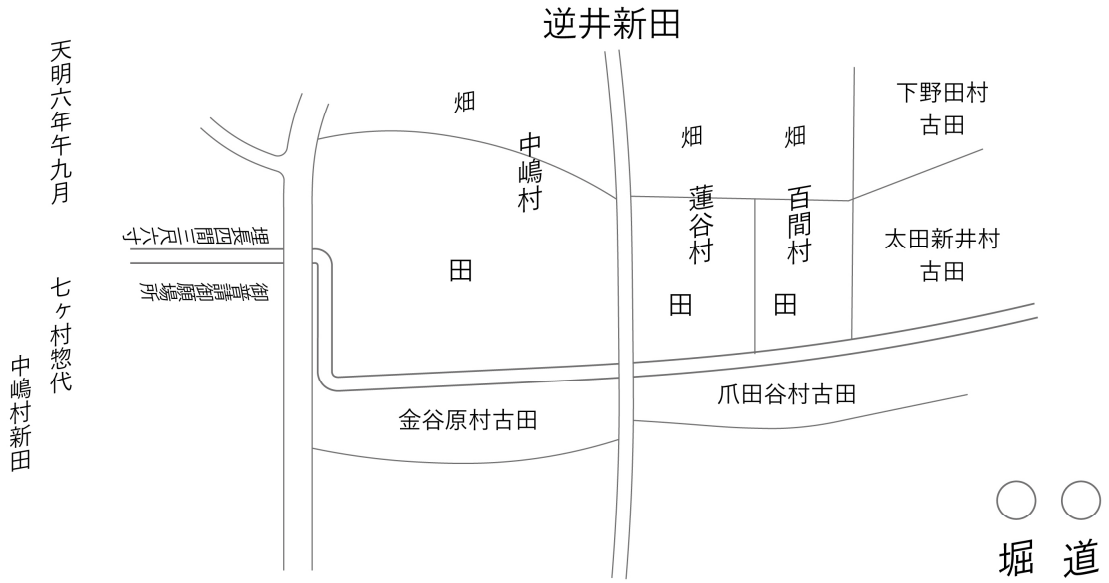
一武州埼玉郡黒沼笠原代用水路組合左之四拾五ヶ村惣代千駄野村名主丈右衛門・九人組新田名主伝右衛門・中嶋村名主代太左衛門奉申上候、此度出水川々満水仕利根川堤数ヵ所切所出来、村々江一面ニ押開、田畑諸作者不及申、百姓家居軒より屋根まで水湛屋根切抜出入仕候間、四拾五ヶ年已前戌年出水之儀者聞伝茂無之大水之由、□□当出水之儀者、右戌年より木丈四尺余茂高押上ヶ、殊ニ急水故助命第一懸ヶ周章仕、少々宛貯置候夫食水中ニ相成、此節壁押破り右家其外木部屋等押潰し流失仕、家材諸道具并百姓農具等扶食まで不残流失仕、水中ニ而、夫食少々繋置候者有之、村中融通仕、是迄漸ク助命仕候得共給尽、当時より及飢ニ候始末ニ御座候間、然ル処用水堀筋圦樋、伏樋越、掛ヶ渡井、関枠、堀筋左右土手堤切大崩、杭柵羽口上置腹付等不残大破仕、中ニ流失も有之、右堀筋去ル卯年砂降以来押埋り水道不宜、百姓自普請仕来候場所たりとも、苗代之湛水故当時より及飢大勢百姓助命難斗歎数奉存候、時節柄御座候得者、中々以百姓難及自分難義至極仕罷在候間、依之御普請所者勿論百姓自普請所迄ヶ所附別紙別帳仕立差上候間、此節急扶食御救と被存於御勘弁書上帳面之通御見分被成下、何卒格別之御慈悲ニ皆御入用ヲ以、近々御助御普請被成下候様仕度奉願上候、左之村々累年凶作打続、御定免之場も度々御検見入ニ相成り候程ニ而秘至と困窮仕、少々宛者有之衣類等是迄質入ニ仕給尽、当時之艱難言語筆紙難尽御座候間、右願之通り被下置候ハヽ、大勢之百姓共広大之御慈悲と偏難有仕合ニ奉存候、猶又御尋之義ハ乍恐口上ニ而も可奉申上候以上

天明午六年八月

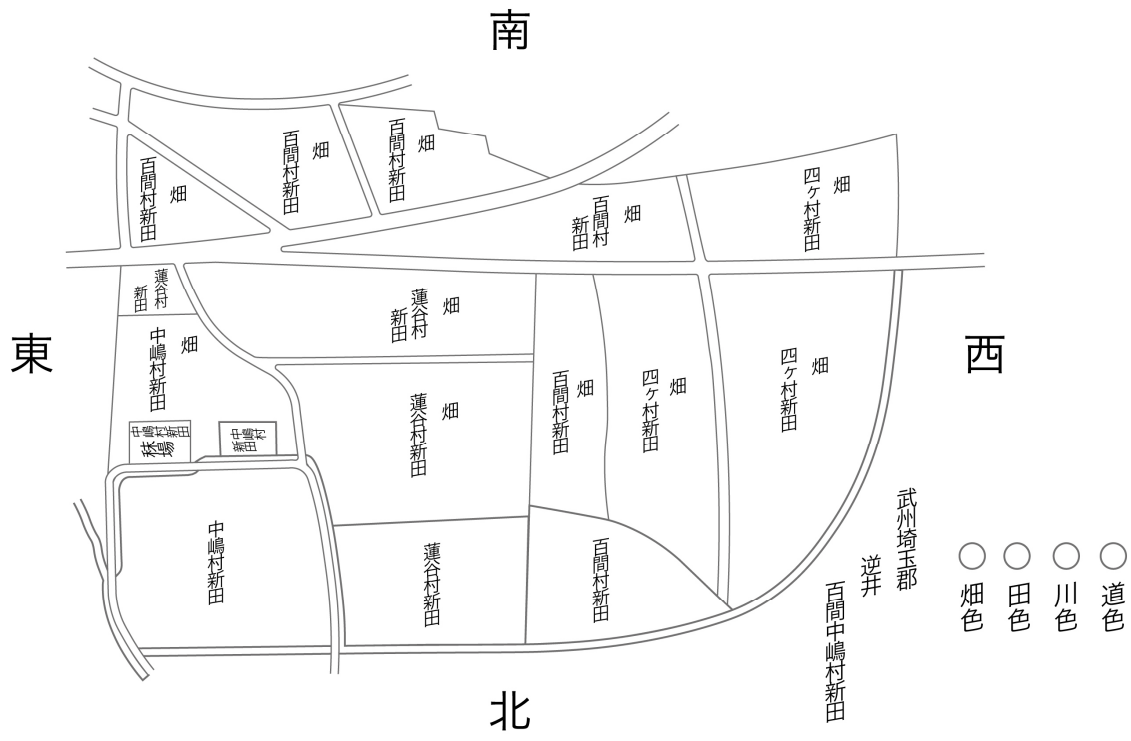
埼玉郡四十五ヶ村惣代
千駄野村
丈右衛門
九人組新田
伝右衛門
中嶋村
太左衛門

布施弥市郎様　御役所

●天明六年　逆井新田落第六天埋樋御普請願絵図（百間中島岩崎家文書　No.１９８６）



●年未詳　逆井百間中島村新田絵図（百間中島岩崎家文書　No.１９４２）



●寛政二年　西粂原分水取替一札（東粂原岡安家文書　№７２０）

（端裏書）
「寛政二年笠原用水西久米原地内分水取替写し
差上申一札之事」

一武州埼玉郡笠原沼代用水路組合下郷南側附百間村・西村・東村・爪田谷村、北側附中嶋村・東村之内字柚木・松ノ木嶋・東久米原村、右村々名主組頭百姓代並扱人爪田谷村作右衛門・須賀村伝右衛門・百間村浅右衛門奉申上候、南側北側御用水之儀者、西久米原村地内より南北与相分リ南側之儀者堀敷七尺北側堀敷壱間ニ而双方御用水引来候、然ル所ニ北側之儀者笠原井筋堀敷弐間之場所より堀敷直ニ相当昧ニ低場之儀ニ付順水ニ御座候、南側之儀堀横ニ而引入候故少々不順水ニ御座候ニ付、先年取扱を以北堀敷引分ケ口少シ下リ高弐尺横弐尺之箱樋伏込双方無甲乙御用水引来候、然ル処ニ去酉年旱魃之節双方末水之村方故御用水引届キ兼彼是及論所ニ候ニ付爪田谷村作右衛門・百間村浅右衛門・須賀村伝右衛門より取扱を以、右箱樋堀出シ番水ニ仕双方御田地相続仕、其後右扱人共取扱ニ而南北熟談之上、横弐寸増高弐尺横弐尺弐寸之箱樋ニ仕当春伏込候、積リ和談仕尤分水口左右欠崩等之場所取繕、前々之通リ南側堀敷七尺北側堀敷壱間之積リ双方無甲乙御用水引入御田地相続可仕段及熟談南北共ニ村役人並重立候、小前之者扱人一同立会之上右場所及相談ニ取究杭木打立双方納得仕、当戌二月三日より自普請ニ取掛リ可申候旨扱人より相唱候所、中嶋村・柚木・松ノ木嶋小前之者共我意を申立、右双方得心之上取極候杭木引抜及破談ニ可申段申之候ニ付、左候得者当御用水苗代時節ニ差掛リ御差支相成、組合一同難義仕候義御座候ニ付無拠百間村・西村・東村より御訴申上御見分奉願候所、早速右場所御見分之上南北村役人扱人内牧村御旅宿被　召出御糺之上段々御利害被仰聞候ニ付双方難有納得仕、尚又熟談之上自普請早々相仕立、当御用水御差支無之様可仕候段被　仰渡承知奉畏、其夜組合村々人足諸色申触明六ツ時取掛リ御差図奉請自普請半出来仕候節中嶋村・柚木・松ノ木嶋小前之者共拾弐人御場所江罷出彼是難渋を申上、尚又及破談被　仰渡之趣相背候ニ付被　仰立候ニも可被遊所ニ、中嶋村名主清次郎並組頭百姓代達而御詫申上候ニ付早速御聞済被成下相残リ候普請早速相仕立候様被　仰付、南北共ニ大小之百姓並扱人当年番ニ至迄一同難有仕合奉存候、尤此節之御取斗何ニ而も聊御非分成儀無御座候、若御非分与申出候もの御座候ハ、私共何方迄も罷出急度申開キ可仕候、然ル上者右引分口之儀ニ付已来双方共出入ケ間敷儀曽而無御座候、万一此上難渋申出候もの御座候共私共引請御上様江決而御苦労掛ケ申間敷候、依之双方熟談連印並組合村々扱人当年番連印一札為後日差上申所仍如件

池田左門知行所
武州埼玉郡中嶋村
名主　幾五郎印
名主代
寛政二戌年二月
組頭　清次郎印
百姓代　徳兵衛印

永井十左衛門知行所
同州同郡東村之内
柚木・松ノ木嶋
村役人出府ニ付
百姓代　杢兵衛印
同　仁兵衛印

堀田相模守領分
同州同郡百間村
名主　源太左衛門印
組頭　弥惣右衛門印
百姓代　九右衛門印

永井十左衛門知行所
同州同郡東村
名主　治郎右衛門印
与頭　作兵衛印

百姓代　源右衛門印
池田左門知行所
同州同郡西村
名主　新右衛門印
与頭　与四右衛門印
百姓代　源四郎印
松波八百之丞知行所
同州同郡百間村
扱人
組頭　浅右衛門印
松平大和守領分
同州同郡爪田ケ谷村
扱人
名主　作右衛門印
永井十左衛門知行所
同州同郡須賀村
扱人
名主　伝右衛門印
永井十左衛門知行所
同州同郡東村
笠原用水
年番　新　六
細井宗左衛門知行所
同州同郡東粂原村
同断
名主　幸右衛門印
新井源八知行所
同州同郡野牛村
同断
名主　庄　蔵印
一ツ橋御領分
同州同郡西粂原村
地元立会人
名主　治左衛門印
堀田相模守領分
同州同郡蓮谷村
名主　平右衛門印
組頭　弥右衛門印
百姓代　久右衛門印
御普請御役
高岩和田八様

●年未詳　西粂原分水出入訴状（須賀戸田家文書　№８７）

一騎西領河原井沼百間領笠原沼御新田ニ付代用水御引渡被下候、依之ニ西久米原村ニて南方北方用水ニ分水被成下候処ニ、此ば所くぼ地ニて御座候故南用水届キ兼申候処ニ、北方用水両久米原村・国納村・和戸村・須か村五ヶ村之末壱耕地ニて都合廿町余之処植付之節より段々過水仕難儀至極仕候、其意葛葉平七郎様へ度々奉願上候得ハ北方御分水御留メ可被下候由ニ申上候得共、尤□□北方用水引留メ被為遊候得ハ西久米原村之義ハ田畑共ニ水押開難儀仕候、其上東久米原村和戸国納須か村田耕地平均ニ押開申之故無是悲北方用水御留メ被成候所ニ御取払被遊候、右之耕地及水損ニ患恐仕候も高岩村ニて御分水被成下候様ニ願書指上ヶ申候、殊ニ先此斉藤所右衛門様用水堀筋御見分之節拙者共方より委細申上候
一此度御見分之上高岩村地内高場ニて、御分水被成下水門被立被下候得ハ、前後古堀も御座候少々百間余も新堀之ば所御座候、左様御普請被為遊被下候ハヽ南水水も取水可仕候様ニ奉存、是又野牛村高岩村田耕地之ためニも能被

成

（後欠）

●享和二年　午年高改町歩三組覚帳並内郷用水路普請所間数割付（百間金谷原関根家文書　No.１２６）

（表紙）

「　午ノ年高改並ニ町歩三組覚帳

並ニ

内郷代用水路普請所割付間数共

享和二戌ノ出水ニ付改」

高九拾九石三升三夕四才　古高　　蓮谷村
同拾九石六斗壱合　　逆井新田
同拾壱石九斗八升五合　　笠原新田
三口合
　高百三拾石六斗壱升六合三夕四才　　蓮谷分
高百拾壱石七斗五升壱合　古高　　爪田谷村
高三百九拾四石九升弐合五夕　古高　　東粂原村
高八百三拾三石九斗四升壱合　古高　　須賀村
高三百拾六石弐斗九升六合　古高　　中嶋村
同四拾石四斗三升八合　　逆井新田
同弐拾弐石四斗六升三合　　笠原新田
三口合高三百七拾九石壱斗九升七合　　中嶌村分
高三百拾四石四斗壱合八夕　　百間村
同五拾九石六斗七升五合　　御新田
二口合高
　三百七拾四石七升六合八夕
高三百七拾壱石四斗九升九合弐夕　　西原村
同四拾六石弐斗三升八合　　下ノ谷御新田
同拾弐石八斗五升弐合　　笠原御新田
三口合高四百三拾石五斗九升五合弐夕
高百七拾三石六斗八升八合七夕　　金谷原村
同三拾石七斗六升六合　　御新田
二口合
　高弐百四石四斗五升四合七夕
高三百八拾石八斗五升八合　　西村
同弐拾石八斗五升五合　　下ノ谷御新田
同拾壱石三斗九升九合　　笠原御新田
三口合
　高四百拾三石壱斗壱升弐合
高七百石　　東村
同五拾三石三斗七升弐合　　下ノ谷御新田
同弐拾九石壱斗八升　　笠原御新田
三口合
　七百八拾弐石五斗五升弐合
　五ヶ村之内
古田高
新田高　合弐千弐百四石七斗九升七合也

差上申植付証文之事　　武州埼玉郡

一高弐百八石三斗七升五合七夕弐才　　百間村
此反別四拾三町八反七畝九歩半
内
高拾弐石八斗五升弐合　　野口辰之助御代官所
此反別壱町八反拾五歩

高七拾五石八斗三升三合五夕九才　堀田大蔵太輔領分
　此反別拾六町壱反六畝廿歩半
高八拾七石九斗四升六合八夕六才　森川織部知行所
　此反別拾八町九反三畝拾弐歩
高三拾壱石七斗四升三合弐夕七才　松波八百之丞知行所
　此反別六町九反六畝廿弐歩

覚

一反別四拾三町八反七畝九歩半　百間村
一畑方反別百六拾九町弐反五畝九歩半
内
　壱町八反拾五歩　田方　野口辰之助御代官所
　拾六町壱反六畝廿歩半　田方　堀田大蔵太輔領分
　五拾六町四反弐畝拾三歩畑方
　拾八町九反三畝十六歩　田方　森川織部知行所
　六拾九町弐反壱畝廿歩　畑方
　六町九反六畝廿弐歩　田方　松波八百之丞知行所
　四拾三町六反壱畝六歩半畑方

覚

百間村用水路
大六天より京塚橋迄之内字拾殿橋より上
一土手洗流長拾五間　高弐尺　横五尺
同断
一土手洗流長六間　高弐尺五寸　横五尺
同断京塚
一土手洗流長拾弐間　高弐尺五寸　横六尺
京塚小石橋より姫宮橋迄
一土手上置長百六拾間　高弐尺　横九尺
京塚用水石橋より煤戸雷電下土橋迄
一土手長四百六拾弐間　上置高壱尺　馬踏三尺　厚壱尺
一同所脇腹付右同間　平均　高四尺
右用水井筋煤戸雷電下土橋より姫落口迄
一土手長六百弐間　高四尺　馬踏三尺
右同断脇腹付　右同断
杉戸御伝馬道
百間地内京塚より川嶋橋迄道上置
一土手洗流七百九拾四間　高四尺　但平均　横九尺
百間村地内字川嶋
笠原囲
一土手洗流長九拾六間　高弐尺　但平均　横壱間
宮越よりらんかん迄囲堤
一土手洗流長五百四拾間　上置弐尺五寸　平均　横七尺
　内六間押切壱ヶ所

●享和二年　午高入百間西原村新田年貢割付（百間西原新井家文書　№５６２３）

「　武州埼玉郡　午高入百間西原村　」

戌御年貢可納割附之事

当申より巳迄拾ヶ年定免之内当戌破免　武州埼玉郡

一高七石三斗七升九合　午高入百間西原村

此反別壱町七反八畝廿壱歩　田方

高壱石五斗八升八合

三反三畝六歩

内　当戌水腐皆無引　畑方

高五石七斗九升壱合

壱町四反五畝拾五歩

此訳

下々田弐反六畝歩　五

当戌水腐皆無引

見付田七畝六歩　四

当戌水腐皆無引

下畑三反五畝拾五歩　五

下之下畑五反三畝歩　四

見付畑五反三畝廿七歩　三

屋敷三畝三歩　九

米なし

取

永五百六拾七文

外

一真菰地六畝九歩　五ヶ所

掛高五石七斗九升壱合

外高壱石五斗五升八合　田方皆損毛ニ付当戌壱ヶ年免除

（端裏書）

平嶋水門引分ヶ町歩改

南方用水反別

一田反別弐拾弐町七畝廿弐歩　東村

一同三町歩　西光院寺領

一同六町九反九畝弐歩　西村

一同壱町五反六畝拾三歩　百間村

一弐町弐反六セ九歩　西原村

一同三反七畝歩　中嶋村

一同七反七畝七歩　金谷原

〆三拾六町九反七畝歩

北方用水田反別

一田反別六町弐反三畝十三歩　百間村

一同拾町五反四畝三歩　西原村

一同三反八畝弐拾五歩　東村

一同弐町八反弐拾九歩　西村

一同四反歩　中嶋村

一同壱町八反六畝七歩　蓮谷村

一同弐町壱反拾三歩　金谷原村

笠原新田

一同三町九反八畝壱歩　西東両村

笠原新田

一同壱町弐反拾歩　西原村

（裏表紙）

「〆弐拾九町五反弐畝弐拾五歩

二口〆六拾六町四反九畝弐拾五歩」

一米三合　　御伝宿入用
掛高　　六尺給米
　五月改
外高
一米壱升弐合
掛高
　六月改
外高
一永拾四文五分　　御蔵前入用
　米壱升五合
　納合
　永五百八拾壱文五分
右者、申より巳迄拾ヶ年定免之内当戌御取箇書面之通相決条、村中大小之百姓入作之者迄不残立会無高下割合之、来ル極月十日限、急度可皆済者也
　享和二戌年十月　野口辰之助㊞
右村
名主
組頭
惣百姓

●享和二年　笠原沼百間西原組新田年貢割付（百間西原新井家文書　№５６２６）

（端裏書）
「　武州埼玉郡　笠原沼百間西原組新田　」

戌御年貢可納割附之事

武州埼玉郡　　笠原沼
百間西原組新田
寅より亥迄拾ヶ年定免之所当戌破免
一高拾弐石八斗五升弐合　皆田
　此反別壱町八反拾五歩
　　当戌水腐皆無引
　　此訳
　中田壱反八畝歩　九
　中之下田五反弐畝廿四歩　八
　下田四反弐畝拾弐歩　七
　下々田六反七畝三歩　六
　　取米なし
　　外
一永弐拾壱文　野銭
　此反別四反壱畝廿四歩
御伝馬宿入用
一六尺給米　当戌田方皆損毛ニ付当戌壱ヶ年免除
御蔵前入用
　米なし
　納合
　永弐拾壱文
右者、寅より亥迄拾ヶ年定免之内当戌破免皆損ニ付小物成書面之通候之条極月十日限急度可皆済者也
　享和二戌年十月　野口辰之助㊞
右村
名主
組頭
惣百姓

●文化元年　下ノ谷百間西原組新田年貢割付（百間西原新井家文書№２００２）

（端裏書）
「　文化元甲子　　武州埼玉郡
　　下ノ谷百間西原組新田　」

子御年貢可納割附之事

武州埼玉郡
当子より酉迄拾ヶ年定免　下ノ谷
一高四拾六石弐斗三升八合　皆畑　百間西原組新田
　此反別拾壱町四畝拾弐歩
　　此わけ
　下畑弐町六畝六歩　五
　下々畑八町九反八畝六歩　四
　　取永五貫七百弐拾八文
　　外
一永弐拾五文壱分　秣野銭
一米弐升八合　御伝馬宿入用
一米九升弐合　六尺給米
一永四拾五文六分　御蔵米入用
　　米壱斗弐升
　　納合
　永五貫八百六拾八文七分

右者、当子より酉迄拾ヶ年定免御取箇書面之通相極条、村中大小之百姓入作之もの迄不残立会無高下割合之、尤年季中御取箇入程候無之候ハゝ、書面之通相心得、年々極月十日限、急度可皆済もの也

　文化元子年十月　野口辰之助㊞

右村
名主
組頭

●文化六年　用水不用証文（東粂原岡安家文書　№２３９）

　差上申一札之事

一見沼代用水掛リ黒沼笠原沼中島組合私共村方当巳夏田方用水之儀苗代時節より御差配被成下謂訳仕、大少之百姓一同難有仕合奉存候、最早弐百十日茂程近ニ相成此節番水丈夫ニ引入用水仕置候ニ付、定例之通来廿三日頃下中条元圦御建脇御場所引払被成候而も聊差支之儀無御座候、勿論用水中御取斗方御非分与奉存候義毛頭無御座候、然上者用水之儀ニ付後日御預ヶ間敷義曽無御座候、依之用水不用証文差上申所如件

文化巳六年　武州埼玉郡久米原村
　七月日　細井金之丞知行所
　　名主　幸右衛門㊞
　　与頭　清右衛門㊞
　　百姓代　利八㊞
用水御掛リ
　御役人中様

●文化六年　用水出入一件書物（百間大高家文書　№２）

（表紙）
「　文政九戌年八月吉日
　用水出入一件書物

差上申済口証文之事

武州埼玉郡粂原村組頭金右衛門・同伝蔵より同州同郡須賀村名主浅右衛門・同州同郡寺塚邑齋藤善次・同州葛飾郡堤根村名主五右衛門ヲ相手取用水出入当九月中御奉行所様江御訴訟奉申上候所、同九月弐拾五日　御評定所様江被召出場所熟談被為仰付御領知並御給々御役人中御出会御見分之上双方御利解被仰聞候上、扱人立入訴答江異見差加江熟談内済儀諚仕候趣意ハ左ニ奉申上候

一右出入扱人立入双方江掛合候所、先扱人共申候者、当七月中済口証文差上帰村仕候所、用水最中故南側北側地元相談仕相立候様申談ニ候得共、北側組合ニ而者定御掛リ井筋之儀御座候間用水掛リ御役人中様江御伴之上相仕立可申旨申之御普請役様江右之段願上候所、御普請御掛リ御役所江可願出旨被仰聞候ニ付、相手方ニ而者御役所江奉願出候内彼是日数延引仕候旨申之一扱人共双方江掛合承糺候所、訴答者早々届ケ之儀申立候得共左候而者難相済旨申聞扱人一同相談仕候所、去ル七月中当　御奉行所様江右一件済口証文奉差上候議定之通リ南北共ニ堀巾敷相定メ元杭打建百間目定杭之場所々ニ而当時之水面より水深ヲ取何ヶ所ニ而も平均ニいたし右者尺寸ニ而水面より堀床敷木ヲ相定メ水行強ク押候場所ハ鋪木平均之埋立いたし堀巾広ケ場所者、此節御見分之上相分欠崩候場所ハ杭筋仕埋立可申筈ニ而訴答共申分無是承知仕候ニ付、先扱人一同立会定杭打建敷木相定メ候上者、以来双方聊申分無之熟談内済仕候、右定杭浚□朽損候節ハ、双方立会議諚之通リ何ヶ度茂打替候筈、尤来春より御定式浚之儀勿論井筋共御掛リ様御差図次第地元村立会可申筈、且分水下組合村々役人共故障申出候得共、是又扱人共掛合候所右済口証文之通至極納得仕候、勿論先取扱人共相手方江馴合候儀曽而無之旨此段相分リ双方申分無之候、尤分水下組合流末ニ候得者行届ケ兼候ハヽ御田地相続之儀者一同之儀ニ候間御掛リ様江御願相互ニ水掛行可仕候、右用水路之儀ハ御定掛リ自普請所ニ御座候得共御普請役様江御伺敷木定杭相定メ申度旨申之、彼是仕候内当　御奉行所様奉再訴候儀ニ而全双方行違ニ御座候、其外申争ひ者訴答共ニ扱人もらい請至極納得之上聊申分無御座熟談内済仕候ニ御威光与難有仕合ニ奉存候、然ル上者右一件ニ付訴答より重而御願置間敷儀毛頭無御座候、仍之連印済口証文奉差上候処如件

一ツ橋御領知
武州埼玉郡粂原村
組頭
訴訟人　金右衛門
同
惣右衛門
百姓代
太左衛門
名主
文右衛門
池田甲斐守様知行所
同州同郡須賀村
名主
相手　浅右衛門
組頭
重兵衛
天野彦兵衛知行所
同州同郡寺塚村
野廻り
同　齋藤善次
松平大和守領分
同州葛飾郡堤根村
名主
同　五右衛門

文化六巳年
十月

一ツ橋御領知
同州同郡外国府間村

名主
取扱人　彦右衛門
同御領知
同州埼玉郡上野田村
名主
園右衛門
松平大和守領分
同州同郡古ヶ場村
名主
惣源郎

御奉行所様

前書之通リ御奉行所様江差上済口証文之通リ双方為取替致し然ル上者後年々至ル迄相互ニ違変仕間敷候、仍而如件

粂原村
組頭　金右衛門
同　惣右衛門
百姓代　太左衛門
名主　文右衛門

須賀村
名主　浅右衛門
組頭　十兵衛
百姓代　武右衛門

為取替申一札之事

一今般埼玉郡粂原村用水出入一件水野若狭守様江奉出訴候所訴答並御給々御家来中被　召出場所熟談被仰付場所ニおゐて当人扱人立入夫々掛合之上別紙為取替済口証文之通リ和談及内済ニ双方罷出其段御掛リ　御奉行所様江御届ケ申上我等共出府役ニ而訴答並扱人一同御普請役様御立会之上杭打立ニ相掛リ候所、杭木長短之儀ニ付故障出来難相済其段申立当拾一日迄御日延奉願上再□掛合之上先対談之通リ済口証文奉差上相済候上者用水組合者一同自普請定御掛リ場ニ付御掛リ様相手方ニ而定杭打建御願被成此上御出役被成下候ハヽ一同立合御差支無之様ニ可致候、依之議定一札為取替申所為後日如件

文化六巳年
拾壱月

武州埼玉郡粂原村
村役人惣代
訴訟人　金右衛門
同郡須賀村名主
浅右衛門
葛飾郡堤根村
名主
先扱人　五右衛門
同郡外国府間村
名主
扱人　彦右衛門

乍恐書付ヲ以奉申上候

武州埼玉郡須賀村・蓮谷邑・中嶋村右三ヶ邑惣代笠原沼代用水路南側北側七ヶ村当巳年番右須賀村名主浅右衛門奉申上候、右用水路之義ニ付地元粂原邑之者共より及争論ニ場所熟談被仰付、則於場所且熟談仕堀敷幅打立被成下度先達而奉願上候所、早速御普請役様御出役被成下候所、杭木長短之儀ニ付相済不申候ニ付御日延奉願上御普請役様御場所御引故被遊、然ル処猶又熟談内済仕当弐拾一日御評諚所江済口証文奉差上候処、御掛リ水野若狭守様御聞済被成下候ニ付済口証文並議定写し奉差上候間、何卒以　御慈悲ヲ右之段御聞済被成下御出役之上堀巾鋪定杭水行差支ニ不相成都而差支無之様ニ御打建被下度奉願上候、右願之通リ御聞済被成下候ハヽ難有仕合ニ奉存候、以上

池田甲斐守
永井銈次郎
小笠原彦九郎
武州埼玉郡須賀邑
堀田相模守領分
同州同郡蓮谷村
池田甲斐守知行所
同州同郡中嶌村
右三ヶ邑惣代
右須賀村
名主　浅右衛門

川之定御掛リ
御役所

乍恐書付ヲ以奉願上候

武州埼玉郡須賀村・蓮谷村・中嶋村右三ヶ邑惣代須賀村名主浅右衛門奉申上候、笠原沼代用水路之儀ニ付先達而当御役所様江御願申上候所、今般同郡粂原村より　水野若狭守様江奉出訴場所熟談被　仰付御給々御役人中御出役之上又々熟談相整済口証文可奉差上候ニ付、訴答出府役ニ而御普請役様有坂勝三郎様御出役被成下場所御附添被下扱人並訴答為立合杭打立ニ取掛リ之節杭木長短之儀ニ付、故障出来難相成殊ニ御普請役様方御立合之砌リ地元村ニ而下方村役人並人足共江種々口論申掛ケ候得共右切之場所与奉存差加江罷有候、既ニ当春苗代用水至而不足仕候所地元西粂原村ニ而昼夜用水〆切リ水下江用水一切相通不申候ニ付御掛リ様江右之段書付ヲ以願上候所、御見届ケ等被成下候内苗代用水ハ一時ヲ争ひ候義ニ付、北側組合之者共ニ堀筋手都合悪敷場所者姫宮落堀縁江田所ヲ借水汲上ケ式ハ古利根川ヲ隔幸手領へ最寄苗代地面かり受苗代致シ候もの多分有之、当夏中茂御掛リ様より御触流し御座候間用水見廻リ定式藻刈猶又生茂リ候指柳木人足差出し仕来之通リ苅取用水端江藻其外為取揚候儀不相成旨堀端江附添強而申募、其上右井筋端道有之場所者見廻リ候得共中程之屋敷其外ニ而西縁ニ道無之場所者見廻リ等茂不為致右場所之内ハ所々之儀其外ニ茂莚並戸杭木等ヲ打堰留候故流等村々用水差支相続ニ相抱リ難渋至極仕候儀ニ御座候、此度杭打立之儀も別紙写し之通リ熟談仕候ニ付堀幅敷杭御打立奉願上候得共為御打建御出役被成下候而茂地元村之もの共井筋縁通リニも土揚敷有之候を右躰不法ヲ申前争之通リ我意之もの共ニ候得共御差支相成候者眼前之儀ニ候、左候而者奉恐入候ニ付粂原村役人被召出御割附旧記帳面筆御糺被成下土揚敷明白ニ相分リ藻並土揚敷御定杭打立被下置候様ニ奉願上候、左候得者御出役被成下幅敷杭御打立被下置候御差支ニも不相成且ハ以自普請之砌リニ争論等茂無之用水之儀ハ相互ニ組合一同安穏ニ相続相成候様ニ奉願上候、然ル上ハ流末村々茂相助リ相続相成難有仕合ニ奉存候、以上

文化六巳年十一月

池田甲斐守知行所
永井重之助知行所
小笠原彦九郎知行所
武州埼玉郡須賀村
堀田相模守領分
同州同郡蓮谷村
池田甲斐守知行所
同州同郡中嶌村
右三ヶ村惣代
池田甲斐守知行所
右須賀村名主
浅右衛門

川々定御掛リ
御役所

差上申御請書之事

武州埼玉郡笠原沼代用水路之儀ニ付及出入熟談内済致し候得共浚争再論為

及ため堀巾並両縁土揚潰地定杭打立度旨御普請役中御出役被成下候様ニ奉願上御出役有之候所杭木長短之儀ニ付及再論候ニ付御普請中御引払有之候所、尚又熟談内済致し候間井筋縁通リ土揚場之儀ニ付旧記等も御糺被成堀巾並揚土置場潰地定杭之儀御普請役中御出役之上打立候様ニ仕度之旨奉願上候所、右者御用席御役人中被差遣於場所ニ糺方可　仰付候間、其節定杭之儀も御出役人中江申立御差図請可申旨被仰渡承知奉畏候、仍而御請書差上申所如件

笠原沼代用水路北側組合三ヶ邑惣代
池田甲斐守知行所
武州埼玉郡須賀邑
名主　浅右衛門

川々定御掛リ
御役所

乍恐以書付ヲ奉申上候

武州埼玉郡西条原村一件之者共奉申上候、私共出入先達而場所熟談被仰付銘々地頭所家来中立会之上場所ニおゐて扱人立入熟談内済仕、昨弐拾九日御届ケ申上候所済口証文票御直し等有之今般相認メ可差上与奉存候所、昨夜中相手浅右衛門村方より飛脚ヲ以右一件用水路敷堀巾定杭御普請役様御立合之上訴答村々並取扱人共立会打立ニ相掛リ候所、右杭木水中打立長短之儀ニ付訴答申争ひ出水打立出来不仕銘々御掛リ御普請役様御引払可遊候段申来リ候、尤訴訟方江者今以村方より不申来候得共右躰故障出来候上者今日済口証文差上候儀難相成得与取調双方掛合熟談内済仕候上否奉申上度候間奉差□、尤銘々地頭所より茂右之段被仰立可有御座候得共何卒以　御慈悲ヲ来ル拾一日まで御猶豫被成下度御日延中双方一同帰村被　仰付被下置度奉願上候、以上

一ツ橋御領知
武州埼玉郡条原村
組頭惣右衛門願ニ付代兼
訴訟人　組頭　金右衛門
同州同郡寺塚村
野廻り
齋藤善次
同州葛飾郡堤根村
名主　五右衛門
右両人代兼

池田甲斐守知行所
武州埼玉郡須賀村
名主
相手　浅右衛門

御奉行所様

乍恐以書付ヲ奉申上候

武州埼玉郡須賀村名主浅右衛門奉申上候、同州同郡条原村より相掛リ用水路一件場所ニおゐて御立会之上熟談内済仕、昨弐拾九日御届ケ申上候処私共出府役ニ而堀敷幅杭打立有之候所杭木長短之儀ニ付訴答申争ひ故障出来候所村方より飛脚ヲ以申来リ候間、其段御奉行所様江申立、来ル拾一日御日延奉願上候所御聞済被成下候、依之右之段御届ケ申上候、何卒右之段乍恐当御屋敷様よりも御奉行所様江被仰立被下置度奉願上候、已上

当御領分
武州葛飾郡堤根村
名主　五右衛門代兼

池田甲斐守知行所
同州埼玉郡須賀村
名主　浅右衛門

川越御領主様
池田甲斐守様
天野彦兵衛様

外御地頭所様ニも前書之通リ相認メ奉差上候

乍恐以書付ヲ御窺奉申上候

武州埼玉郡須賀村蓮谷村中嶋村右三ヶ村惣代須賀村名主浅右衛門奉申上候定御掛場笠原沼代用水路之儀唯々御願申上自普請ニ仕来候処粂原村之者共御奉行所様江奉出訴再応之出入熟談之上夫々堀敷巾之儀取極メ一躰粂原村之もの共兎角我意施之者共ニ而用水之儀ニ付都而差支迷惑仕候間御見分之上古来より有来候堀端土揚場御定杭御打立被成下度先達而奉願上候、其後御普請役様御出役之上旧記等御糺被成下、尤已後取扱人立入掛合有之御座候得共相済兼其後掛合も無之候得共、猶又扱人取斗ヲ以熟談相整候ハヽ其節御届ケ可奉申上段右御出役様御引払之節も一札奉差上置、猶又其後扱人より掛合も有之候得者相済不申候、然ル所用水路自普請之儀者年々年内自普請被頼上置早春ニ者取掛リ候義ニ御座候得共土揚場御定杭御打立不被成下候而者粂原村之もの共彼是可差障ばし脇前之儀ハ奉免究尓御差掛リ候而者及差支迷惑至極仕候、乍併御沙汰被成下候迄差控可申儀而奉存候得共、前書奉申上候通リ之始末ニ付恐ヲも不顧此段御窺奉申上候間、何分格別之御勘弁ヲ以差支無之様ニ御慈悲之御沙汰奉願上候、以上

文化七午年十二月

池田甲斐守
永井十之助　知行所
小笠原彦九郎

武州埼玉郡須賀村
堀田相模守領分

武州同郡蓮谷村
池田甲斐守知行所

同州同郡中嶋村
右三ヶ邑惣代

池田甲斐守知行所
右須賀邑

名主　浅右衛門

関東川々定御掛
御役所

前書之通奉願上候所無仰渡候者、去ル巳年中奉願上候ハ用水堀浚方之儀ニ付及出入公事方御奉行所江出訴仕候所扱人立入内済仕候得共及再論候所、尚又扱人有之内済熟談仕候、然ル処右文面之内南北分水口板羽口ニ相仕立堀幅定杭打建候積リ、乍併自普請所与ハ乍申元来御普請役中定掛リ場所有之候間、相対ヲ以打置候而者浚年々至リ及争論ニ候而者難義仕候間御普請役中御出役之義奉願上候ニ付其御出役様も被仰付候所場所ニおゐて差支之義申立仕立方難相成候ニ付御引払御座候義ニ而私共争論之場所御糺方可被　仰付御糺筋ニ無之間、今度相糺方之義も熟談内済定杭打立之節御普請役中御出役奉願候者、格別之筋之御願ニ付御取上ケ可被成筋ニ無之段被　仰渡承知奉畏候、依之継添印形差上申候、以上

武州埼玉郡須賀村
名主　浅右衛門

川々定御掛リ
御奉行所様

乍恐以書付ヲ奉願上候

武州埼玉郡須賀村・蓮谷村・中島村右三ヶ村惣代須賀村名主浅右衛門奉申上候儀者、西粂原村地内用水路定杭並土揚場堀巾等之義御糺御座候所、先達而立入候内済人より再応双方江掛合可申旨申聞候ニ付相備罷至候得共、其後右掛合等之儀此節まで一向沙汰無御座候、此後掛合有之双方熟談仕候ハヽ其届ケ可申上候様ニ此度御引払一札差上申所如件

文化七年
午四月日

中嶋村
蓮谷村
須賀村
右三ヶ村惣代

須賀村名主
浅右衛門

御役人中様

乍恐以書付ヲ奉願上候

当未春笠原沼代用水路定式浚御普請並東粂原村地内新規掛樋御引払方外ニ洩所三ヶ所字渋谷地内伏越樋上田壱ヶ所至而用水差障リ場所ニ付御見分御願、右新規掛樋御取払洩所之場所御普請被成下置候様ニ、当年番江度々相願候得共如何相心得候哉、御願差上呉々不申万人延行ニ相成候而者、下方用水組合一難渋至極ニ仕候、何卒以　御慈悲ヲ御見分之上自普請被仰付被下置候様ニ奉願上候、以上

笠原沼代用水組合
埼玉郡須賀村
名主　浅右衛門
与頭　喜右衛門
百姓代　善次郎
同州同郡蓮谷村
名主　忠右衛門
与頭　幸次郎
百姓代　平次郎
同州同郡中島村
名主　徳右衛門
与頭　沖右衛門
百姓代　徳兵衛

御掛リ
御普請御役人中様

文化八未年
閏二月

当春笠原沼代用水路定式浚自普請所之内西粂原村地内字北側引分口須賀村浚丁場地元村より差障リ浚方難渋仕候間、西粂原村江用水之義者御願私領村ニ御収納抱候ニ付浚方無之而者難相成再三御利解被仰聞候処承知不仕長七百五拾四間西粂原村ニ而浚御残リ候、然し上苗代用水ニ差掛リ差支ハ有之間敷候得共、万一差支候而者難成候間村々囲水いたし差支無之様ニ被仰付候趣承知奉畏候、且用水路江新規樋籠之義者勿論水行差障相成候義ハ、決而不成段小前百姓まで申聞心得違江無之様ニ精々被仰渡候、是又奉畏候、依之村々御請印形差上申所如件

武州埼玉郡東粂原村
名主　孫兵衛
組頭　喜平治
百姓代　又右衛門

外下方三ヶ村印

用水御掛リ
御役人中様

御尋ニ付乍恐以書付ヲ奉申上候

武州埼玉郡粂原村名主組頭百姓代奉申上候、笠原沼代用水之儀ニ付先達而御奉行所様御吟味中再応場所熟談被　仰付訴答双方より御役人中様御出役之上熟談ニ相成御評定江済口証文差上一同帰村被　仰渡候所、此段私共被下於御尋御座候者、右用水ニ付私共先達而奉差上候済口証文之趣不相守用水組合村々江対之不埒之致方ニ茂有之引有躰可申上旨、御吟味之上御座候所右様之心得曽而無御座一躰右用水路之義者、最初組合水下村々之もの共理不尽ニ堀巾切広ケ浚深仕候より事起リ候義ニ而右内済之趣キ意者南北とも堀巾敷元杭打建百間目定杭之場所ニ而当時之水面より水深ヲ取何ヶ所ニ而も平均いたし右寸尺ニ而水面より堀床敷木ヲ定水行強き押堀之場所者敷木ニ見平均し埋立致し堀幅欠崩候場所ハ杭篇仕埋立可申筈ニ而、尤定杭後日ニ朽損候節ハ双方立会打替候筈、去ル午春より定式浚之儀ハ御掛リ様御差図次第地元立会可申筈ニ而済口之趣訴答一同心得之義ニ御座候所、右杭木打立敷木相定メ候義是迄相手方村々ニ而一向等閑之致し方ニ御座候間、村方より茂其節之扱人江茂申談し再応掛合候得共一向取合不申其侭ニ相成候儀ニ而私共

江普請為請負候ハヽ仕立可遣左茂無之候而者普請さし障リ候義曽而無之其外浚土揚場所之儀も前文笠原沼代用水路ニ付邑内ニ堀際より何程之土揚敷と申議定無御座候得ども、前々者用水浚ニ付遠方江土取捨候ニ付無之堀通リ差支之場所候処、相手方ニ而堀巾きり広ケ候より土揚敷無之姿ニ相成既堀際ニ弐三尺通リまで八切株も無御座候所、去ル巳年相手方ニ而右木株掘出し候而者堀広ケ明白證拠ニ御座候得とも是等之儀ハ熟談仕候上ハ、今更私共弥申立候心得者無御座候得者様子不申上候得共事分リ兼候間申上候前書普請仕立之儀、先達而北側組合村々より杭篇之場所堀巾七尺之所七尺五六寸ニ致し候様ニ見平均ヲ以埋立候ハヽ杭篇代与して金三両差出し、猶又用水路敷木除候義承知致し呉候ハヽ別ニ金弐両差出し可申旨、私共ニ掛合有之候得共最初内済議定之通リ相手方ニ而普請いたし候得共、私共江金受取普請引請べし取扱ニ無御座候間、済口議定之通リ普請有之様子ニ挨拶ニ申候前井筋土揚場之儀前書申上候通リ御座候得者堀際迄御年貢地所ニ付土揚為致不申旨私共より掛合ニおよび無御座既ニ先達而私共より右村々江御掛合之節申聞候者、土揚場之義ハ是まで例年之通リ最寄作作付場所揚置ニ而も不法之致し方是なく定例之通リニ候ハヽ地主方被仰付不差支様ニいたし可申井筋両縁新木たれ下リ候場所有之者かり取也可申旨迄ハ掛合候儀ニ御座候、其外何ニ而茂私共済口議定違変仕候筋覚江無御座候間、相手方村々ニ而済口議定之趣相守リ定杭打立堀床敷木ヲ相定メ候儀等閑ニ無之普請取掛リ御座候様ニ仕度儀ニ御座候右御尋ニ付有躰奉申上候、以上

武州埼玉郡粂原村
百姓代　幸右衛門
組頭　金右衛門
名主　治右衛門

文化八未年
二月

御領知
御役所

御手紙拝見仕候、然者此間者御掛合有之候笠原沼代用水路之儀北側水下邑々より一橋御領知粂原村相手方出訴申上候所、右場所熟談議定も有之儀ニ付勘弁取計も可有之哉御相談之趣致し承知粂原村之者も呼出相糺し候所前紙之通リ書付差出し候間御心得懸御目申候、粂原村ニおゐて者内済議定ニ仰別ニ趣意申立候所存無之趣申立候間、今般訴訟方之者共も猶又御勘弁御利解も可被仰聞哉若し得心これなく甚其筋ハ差出し義者御勝手次第御取計被成候様ニ奉為し入御念ヲ御掛合茂有之候儀ニ付、前文之趣得御定申候、右御始末如此ニ御座候以上

五月廿日

福地大次郎

朝比奈仙右衛門様

追而訴状壱通リ致し返却より粂原村差出し書付者、追而御返却可被成候以上

乍恐以書付ヲ奉申上候

武州埼玉郡蓮谷外弐ヶ村並ニ新田右惣代中島村名主周蔵初年ニ付代年番組頭徳右衛門・須賀村名主浅右衛門奉申上候、一橋御領知同州同郡西粂原村名主文左衛門外壱人相手取議定いたし違変土揚場並ニ定式浚ニ差障リ候出入御奉行所様江奉出訴度御差出し之儀奉願上候所、一橋様御役所江御掛合被成下候口相手方より御答書之趣御読聞利解被仰聞候得者、右答之趣ニ者当年用水ニ差掛リ定式浚ニ差障リ候条一向ニ御答不奉申上右答之儀ハ勝手差掛リ差支ニ罷成難義仕候、其外之儀も早被申上候得共全右様之義ニ者無之私共訴状面ニ奉申上候通リ、聊差支是なく候得共外ニ御願之筋無御座若又願書之通リ相分リ不申義ニ而候ハヽ、早速御差出しニ被成下候様ニ奉願上候、右御尋ニ付奉申上候間御聞済奉願上候、以上

未五月廿一日　給々村々惣代
池田甲斐守様　徳右衛門
御役人中様　惣右衛門

乍恐以書付奉願上候

武州埼玉郡笠原沼用水路組合之内中島・蓮谷・須賀右三ヶ村惣代名主代役松

之助奉申上候、当春中格別之御憐愍を以御入用御普請被成下置誠ニ御救与難有仕合ニ奉存候、然ル所右用水路之義者、西条原邑地内ニ而南側北側与相分リ南側之儀ハ爪田谷邑・百間村・西ノ邑・東ノ村右四ヶ邑組合ニ而用水引取北側之義ハ須賀・蓮谷・中島・東・西条原邑右五ヶ村組合ニ而用水引取申候所、南側爪田や邑外三ヶ村之者共如何ケ相心得候哉、当三月中私共三ヶ村ヲ相手取用水堀深浚いたし南側江用水不引届趣ヲ申立水野若狭守様江奉出訴候所御役人中御立会之上場所熟談可仕旨被仰渡、則別紙写之通リ熟談内済仕候、然ル処地元西条原村より組合年番惣代須賀邑名主浅右衛門ヲ相手取用水路六尺堀ニ候処、七尺餘リニ切広ケ其上深浚致し候ニ付西条原村方田方用水難□右切揚土多分田ハた刎上作毛ヲ荒候旨申上　水野若狭守様江奉出訴双方御吟味ニ相成候所、訴訟方ニ而申立候義ハ証拠無之候ニ付難被遊御取用旨被仰聞相手方ニ而者御仕様帳之通リ御普請相仕立出来形も差上置候儀ニ付別紙写之通リ熟談内済仕候、然ル所右済口文面之通リ南北引分口板羽口ニ相仕立申度旨申来リ候、然ル処右場所之義ハ自普請与者乍申元来御普請役様定御掛リ場ニ有之私共手伝ニ堀巾定杭打立候義ハ恐入殊ニ相対ヲ以相法立候而者後年ニ至リ争論ニおよび候而者難義仕候ニ付何卒以御慈悲ヲ右堀巾堀床南北共ニ無甲乙並両縁土揚潰地境定杭打立等御普請役様御出役之砌リ乍恐御附居仕立方被仰付被下置候様ニ奉願上候、別紙済口証文之写し奉差上候ニ付幾重ニも乍恐勘弁之上右願之通リ被仰付被下置候ハヽ此上右場所再論等無之安穏ニ相治リ村々大勢之百姓共相助リ偏ニ御救与難有仕合ニ奉存候、以上

文化六巳年八月

堀田相模守領分
　武州埼玉郡蓮谷村
池田甲斐守
永井重之介　　知行所
小笠原彦九郎
　右村両邑代兼
池田甲斐守知行所

同州同郡中島村
名主代役
松之介

川々定御掛リ
御役所

差上申御請書之事

武州埼玉郡笠原沼代用水路之義ハ西条原地内ニ而南北より弐筋ニ相分リ南側之義ハ爪田や外三ヶ村北側之義ハ外四ヶ邑組合ニ而用水引取候所、南側組合より北側及出訴候得共、其後内済熟談仕候所、猶又地元西条原邑より須賀邑年番惣代名主浅右衛門相手取及再論ニ、是又熟談内済仕候済口証文も差上候所、元来御普請役中定御掛リ場之儀ニ茂有之村方相対ヲ以堀巾定杭等打立置若後年ニ至リ再論出来仕候而者恐入候義ニ御座候間、右堀縁揚土潰地境定杭之義御普請役中御出役之上打立候様仕度奉願上候所願之通リ御聞届ケ被成下追而御用序御役人承知奉畏候、仍而御請書差上申所如件

笠原沼代用水路北側組合之内
三ヶ邑惣代
池田甲斐守知行所
武州埼玉郡中嶋村
松之助

川々定御掛リ
御役所

入置申一札之事

此度済口証文西之内定杭打建候節ハ御普請役様御附居之上打差可申之儀書載候而者御奉行所様御畏相済兼候義難斗候ニ付私共より別紙一札入置御出役様方御引払之上者御普請役様方御附居被遊堀巾定杭打立候節者、右御掛リ様御趣被遊候ハヽ熟談内済通リ、早速双方扱人立会御互ニ場所睦ヶ敷相仕立可申候、右一件相済口上者違変等無之候為後日仍而如件

埼玉郡粂原村
組頭　金右衛門
組頭　惣右衛門
名主　文右衛門
同州同郡須賀村
年番名主　浅右衛門殿

乍恐以書付御訴訟奉申上候
一ツ橋御領知
武州埼玉郡粂原村
名主文右衛門代
訴訟人
組頭金右衛門
同　同　惣右衛門
用水出入
池田甲斐守様知行所
同州同郡須賀村
名主
相手　浅右衛門
天野彦兵衛様知行所
同州同郡寺塚村
同　野廻り
斉藤善次
松平大和守様御領分
同州同郡堤根村
名主
相手　五右衛門

右訴訟人金右衛門惣右衛門奉申上候、笠原沼代用水路之儀私共村内ニ而南北江分水仕候、御普請所当三月中相手浅右衛門年番持場ニ而差図之旨大勢之人足共法外之堀巾切広ケ深浚いたし候ニ付浅右衛門相手取其節当御奉行所様江奉出訴候、御吟味中相手五右衛門・善次両人取扱立入内済仕候、趣意御普請仕立之義ハ御仕様帳之通リ相心得差支無之様ニ堀巾杭打敷百間目ニ定杭打建堀巾切広ケ候場所不残杭箭致し堀床之義も深浚之場所者不残敷木ニ見平均ヲ以埋立可申対談相定メ当七月中熟談内済仕候、御評定所江被召出済口証文奉差上帰村仕候所、南北村々江掛合候処南方之儀者北側取掛リ次第切広ケ場所不残杭箭致し深浚之場所ハ可致段無差支趣書付私共江差出し申依之北方之儀再応浅右衛門方江掛合ニおよび候得共等閑ニいたし置候間如何存寄ニ而対談違変致候哉之段数度及掛合ニ候所浅右衛門相答候ハヽ分水下須賀・蓮谷村・中嶋村・百間村之内村役人共又候故障申之候ニ付普請江相掛リ候段難相成段相答候ニ付扱人五右衛門・善次両人方江掛合候処、彼是申紛同様ニ挨拶而已ニ而数度催促仕候得共一向取散不申全一同馴合済口議定致し候儀今更違変被致其侭捨置候ハ者村方立行がたく畢竟先達而乱妨ニいたし候故、田方之儀ハ高場ニ相成水引届ケ兼其上田畑共ニ欠崩入百姓共一同難義欲ケ敷奉存候間、右之段無拠出訴候何卒御慈悲ヲ以右相手之者共被　召出先達而相手五右衛門・善次両人引請議定仕候通リ御吟味之上自普請仕立田畑欠崩入不申百姓相成候様ニ被　仰付被下置候ハヽ難有仕合ニ奉存候、以上

一ツ橋御領知
武州埼玉郡粂原村
名主文右衛門代
与頭　金右衛門
伝　蔵

文化六巳年
九月

御奉行所様

（裏表紙）

「　　大高兵五郎　」

●文化六年　用水土揚場出入一件写（百間大高家文書　№1）

乍恐以書付御訴訟奉申上候
元堀田相模守領分
武州埼玉郡蓮谷村
吉岡治郎右衛門御代官所
同州同郡同村新田
池田甲斐守知行所
永井銈治郎知行所
小笠原彦九郎知行所
同州同郡須賀村
吉岡治郎右衛門御代官所
同州同郡同村受
笠原下野田新田
池田甲斐守知行所
同州同郡中島村
吉岡治郎右衛門御代官所
同州同郡同村新田
右惣代
池田甲斐守知行所
中嶋村
名主周蔵幼年ニ付代
年番組頭
訴訟人　徳右衛門
永井銈次郎知行所
須賀村
名主
同　惣右衛門

議定違変出入
一橋様御領知
同州同郡西条原村
名主文左衛門事
名主
相手　治左衛門
組頭
同　金右衛門

右訴訟人蓮谷村外弐ヶ村並右三ヶ村新田右惣代中島村名主周蔵幼年ニ付代年番組頭徳右衛門・須賀村惣右衛門奉申上候、笠原沼代用水路之儀者、定御掛リ場ニ而年々定式浚自普請之儀茂御掛リ御役人中様へ奉願上候而御差図を請無甲乙浚立仕、用水時節ニも水配御出役様御差図を請水引入来、相手西条原村地内ニ而北側南側与相分リ、何れ茂堀幅七尺ニ而北側用水私共組合ニ而引入御田地相続仕来候、右ニ付去ル巳年御慈悲を以定式浚自普請所御入用を以御普請被仰付難有御仕用帳通リ皆出来之上御見聞相済候処、西条原村之もの共早々相違之儀申立、用水年番之須賀村浅右衛門相手取　水野若狭守様御勘定御奉行御勤役之砌、奉出訴場所熟談被仰付候得共相済不申、追々御吟味中之処用水引入方之儀者、仕来之通水配リ御出役様御差図を請可申用水路自普請之儀者、御仕様帳通相心得無差支相仕立可申、尤南北共堀巾杭打立右杭ニ敷を定百間目ニ定杭打立可申、尤堀巾欠崩等ニ而広キ場所有之候ハヽ杭笘仕埋立堀床之儀も押堀候場所も有之候ハヽ、敷木見平均埋立以来定式浚自普請之節之地元村江致通達、村役人立会争論無之様浚立候筈、熟談内済仕済口証文奉差上候処、御聞済ニ相成候ニ付兼而定御掛リ場ニ而自分勝手侭ニも相成兼候ニ付、右議定之趣を以定御掛リ様双方より御届ヶ申上議定之通普請仕度候処、西条原村ニ而者右村普請ニ候ハヽ普請可仕左も無之候而者、井筋端土揚場等之儀、悉ク故障申候ニ付等閑ニ者難仕旨懸合候処、定御掛リ様へ茂不相届自分共勝手ニ普請可仕旨申来候得共、前書奉申上候通リ定御掛リ場を右様手侭ニ堀巾敷相定後年ニ至リ争論出来候者相違無之奉恐入難儀仕候ニ付、御普請役様御出役之上私共組合北側井筋

両縁土置場潰地境等明白ニ相分リ右堀巾堀床南北共無甲乙様御仕立方被仰付度奉願上候処、近々御活用序を以御出役可有之旨被仰渡帰村仕候処、西条原村之もの共早々相違之儀申立却而私共議定違扱人迄相手取、猶又水野若狭守様江奉出訴、是又場所熟談被仰付御給々御出役有之御立会御吟味奉請、其節茂熟談内済相整御出役方引払ニ付済口証文為差上双方より惣代之もの出府致候跡江御普請役御出役被成下杭木打立取掛リ可申之処、杭木長短之儀ニ付西条原村之者共故障を申募普請出来不仕候ニ付、其旨出府惣代之者へ申越候処、尚又扱人立入御日延奉願上懸合之上場所議定之通ニ而御聞済之上ハ、杭木打立之儀者相手方より定御掛リ様へ御願申儀御出役被成下候ハゝ双方立会御差支無之様可致筈、別紙議定為取遣候上済口証文奉差上候処、於　御評定所御聞済之上帰村被仰付候ニ付、前書議定之通私共方より定御掛リ様へ御願可奉申上処、西条原之もの共儀兼而議定之通リ杭打立候而者弥不勝手之儀と相見得普請為請負候ハゝ故障無之趣申之候得共、定御掛リ場大切之用水路御出役等茂不相願金子等差出し請負普請等ニ者難仕旨及挨拶候処、相手村方地内用水縁迄皆御年貢地ニ付作者差障リ候而者御取箇ニ茂抱リ候間、土揚等茂容易ニハ難為致旨申之兎角故障而已を申候、且土揚敷無之候而者、先達而之通リ御出役有之候而者故障出来候ハ歴然之儀ニ候得共、可相成者議定之通リ無故障杭打立水下用水差支無之様仕度、去ル十二月中定御掛リ様江右之趣ヲ以御慈悲奉願上候処、右頼之儀□争論之場所御糺方可被仰付願筋ニ無之間、此度願之儀茂熟談相済定杭打立候節御普請役中御出役奉願上候者、格別筋違之頼ニ付御取上可被成筋ニ無之段被仰渡候ニ付然ル上者、西条原村之もの共故障を申済口議定之通不相守候ニ付、私共方より其節奉出訴与奉存候処、尚又扱人立入度々出入等取結候者、奉恐入候ニ付可相成丈内済仕度、追々掛合御座候得共、西条原村役人共方ニ而者、新規之儀等申募内済ニ相成兼、然ルニ年々定式浚之時節ニ付奉願上候処、御普請役様御出役之砌リ相手之もの共故障を申右用水路之内西条原村地内字北側引分ヶ口須賀村浚丁場長七百五拾四間之場所浚方出来不仕、然ル上者用水之儀御領私領御収納ニ茂抱リ候間、再三相手村方之もの共江御利解茂有之候得共、一向不取用依之御出役様者御引払ニ相成苗代用水差支ニ相成可申上処、折節両際溜水を以相仕付候得共、無程植附並引続養水引入候時節尓至リ候者、歴然之儀ニ御座候、前書之始末ニ而先達而御聞済ニ相成済口議定茂今以等閑ニ相成打捨置候而者、奉恐入且ハ北側用水路水下之私共難儀至極仕候、右井筋両縁通者前後何れ之村々□□土揚場敷除地ニ相成地方書物等ニ相分リ有之候処、西条原村ニ而者井筋端迄御年貢地抔と申紛土揚場等ニ茂差障リ見廻リ之節通路不為致渇水之節ハ、右村内ニ而用水〆切等仕水下之私共村々旱魃仕候儀者、是迄年々之儀畢竟用水見廻リ等自由ニ不為致巧ヲ以土揚付而尓申紛打捨置候而者、御料私領御取箇ニ相抱リ水下百姓一同旁難渋至極仕無是非、今般御訴訟奉申上候、何卒以　御慈悲相手之もの共被召出御吟味被成下定式浚之儀者、最早差掛リ御田地相続ニ茂相抱リ候ニ付、早速浚立出来右済口議定之通リ、私共組合北側用水井筋幅定杭並土揚場潰地境定杭、是又御打立被成下以来定式浚者勿論都而用水井筋之儀ニ付、不法等不申募水下迚も一躰ニ無甲乙植付仕御年貢御上納仕無難百姓相続相成候様被仰付被下置度奉願上候、猶委細之儀者、乍恐御尋之節口上ヲ以可奉申上候、以上

右三ヶ村惣代
池田甲斐守知行所
武州埼玉郡中島村
名主周蔵幼年ニ付代
文化八未年五月　年番与頭
訴訟人　徳右衛門
永井銈次朗知行所
同州同郡須賀村
名主
同　惣右衛門

御奉行所様

前書之通用水掛リ村々惣代ヲ以御奉行所様江奉出訴度奉存候間、何卒以　御慈悲ヲ惣代徳右衛門地頭所江御掛合被下置、早速御差出ニ相成候様、偏ニ奉願上候、以上

当御代官所

下野田村新田
右持添　須賀村
名主　伝右衛門
同断　蓮谷村
名主　忠右衛門
同断　中島村
組頭　徳右衛門
吉岡治郎右衛門様
御役所

乍恐以書付奉願上候

一当御知行所武州埼玉郡中島村名主代組頭徳右衛門奉申上候、今般御差出奉願上候出入一件蓮谷村名主忠右衛門より願人惣代徳右衛門御地頭所江御懸合被下置候様仕度段、御領主堀田雄之丞様御役所へ奉願候処、右之願人惣代之ものへ申談願人御地頭所より御懸合有之候様可取斗旨被仰渡候ニ付、右之趣ヲ以御願申上呉候様忠右衛門より申聞候間何卒以　御慈悲右之段聞済被成下堀田雄之丞様江御掛合被下置、早速御差出被成下候様奉願上候、以上

当御知行所
埼玉郡中島村
名主代
組頭　徳右衛門
御屋敷様
御役人中様

乍恐以書付奉申上候

武州埼玉郡蓮谷村外弐ヶ村並新田右惣代中島村名主周蔵幼年ニ付代年番組頭徳右衛門須賀村名主惣右衛門奉申上候、一橋様御領知同郡西粂原村名主文左衛門外壱人江相掛リ議定違変出入御奉行所様江奉出訴度御差出之儀奉願上候処、一橋様御役所江御掛合被成下候ニ付相手方御答書之趣御読聞御利解被仰聞候得共、右御答之趣ニ者当年用水ニ差掛リ定式浚ニ差障リ候、一条一向不奉申上右等之儀ハ眼前差掛リ差支ニ罷成難義仕候其外之儀も品能申上候得共、全□右様之義ニハ無之私共訴状ニ奉申上候通、聊差支無之候得者外御頼筋無御座候若又願書之通相分リ不申儀ニ候ハヽ、早速御差図被成下候様奉願上候、右御たつねニ付奉申上候間御聞済奉願上候、以上

給々村々惣代
未五月廿一日　中島村
組頭　徳右衛門
須賀村
名主　惣右衛門
池田甲斐守様
御役人中様

乍恐以書付御訴奉申上候

武州埼玉郡蓮谷村外弐ヶ村右三ヶ村新田右惣代須賀村名主惣右衛門代兼中島村名主周蔵幼年ニ付代年番組頭徳右衛門奉申上候、一橋様御領知同郡西粂原村名主文左衛門組頭金右衛門相手取議定違変出入御訴訟奉申上、来ル八月二日御差日之御尊判奉頂戴帰村之上、当十六日相手方へ相附候処、相手名主文左衛門義治左衛門より改名仕候与申之名主治左衛門ニ而拝見証文取之、最早奉出訴候已前名前書差出候様、再応懸合候得共、先達而印形差出置候済口証文並議定書付ニも有之別段差出候ニも不及旨申之名前書差出不申候処、右様名前相違仕候方不行届段、奉恐入候ニ付此段御訴奉申上候、何卒以　御慈悲右不調間御免被成下候様奉願上候、以上

池田甲斐守知行所
武州埼玉郡中島村
名主周蔵幼年ニ付代年番
組頭　徳右衛門
御奉行所様

乍恐以書付奉願上候

一御知行所百間中嶋村組頭徳右衛門奉申上候、別紙相手西条原村ニ而定式浚差滞候ニ付三ヶ村一同相談之上ニ而御領私領共御収納ニも相抱リ候義ニ付難差置、私共永井銈次郎様御知行所須賀村名主惣右衛門三ヶ村惣代として無是非、今般御奉行様江御訴訟奉申上候度奉存候段、何卒御慈悲ヲ□最早用水時節ニも御座候間御差出被成下候様奉願上候、右願之通早速御聞済被成下候様難有仕合奉存候、以上

当御知行所
百間中島村
文化八未四月　名主幼年ニ付代年番
組頭　徳右衛門

御地頭所様
御役人中様

乍恐以書付御訴訟奉申上候

武州埼玉郡蓮谷村外弐ヶ村右三ヶ村新田右惣代蓮谷村名主忠右衛門・中島村組頭徳右衛門一同奉申上候、西条原村名主文左衛門事治左衛門外壱人江相掛リ議定違変出入奉出訴候節、蓮谷村領主元堀田相模守領分与相認候得共、其後家督被仰被付堀田雄之丞与相成候ニ付此段御届申上候間御聞済奉願上候、以上

乍恐以書付奉願上候

武州埼玉郡蓮谷村外弐ヶ村右三ヶ村新田右惣代蓮谷村名主忠右衛門・中島村名主周蔵幼年ニ付代年番組頭徳右衛門奉申上候、先達而右徳右衛門・須賀村名主惣右衛門より同郡西条原村名主文左衛門事次左衛門外壱人相手取議定違変出入御訴訟奉申上候、来月二日御差日之御尊判奉頂戴相手方へ相附今般可罷出候処、惣右衛門此節病気差発取外罷在難罷出無拠為惣代引受私共両人参着仕候、尤御吟味筋之義ハ無差支御意可奉申上候間、何卒以御慈悲代引受被仰付被下置候様奉願上候、以上

堀田雄之丞領分
武州埼玉郡蓮谷村
名主　忠右衛門

文化八未年
七月廿八日

池田甲斐守知行所
同州同郡中島村
名主幼年ニ付代年番
組頭　徳右衛門

御奉行所様

乍恐以書付奉願上候

武州蓮谷村一件之もの共一同奉申上候、私共出入御吟味中ニ御座候処、西条原村地内用水土揚敷双方場所江立会相定メ申度奉存候間、何卒以　御慈悲来十六日迄双方立戻リ帰村被　仰付被下置候様奉願上候、以上

堀田雄之丞領分
武州埼玉郡蓮谷村
名主　忠右衛門

池田甲斐守知行所
同州同郡中島村
名主幼年ニ付代
年番組頭　徳右衛門

文化八未年
八月六日

一ツ橋御領知
同州同郡西条原村
名主文左衛門事
名主　治左衛門
組頭　金右衛門

御奉行所様

乍恐以書付奉願上候

武州埼玉郡蓮谷村一件之もの共奉申上候、私共出入御吟味中御座候処、笠原沼代用水路土揚敷双方立会之相定申度、昨日六日迄先帰村奉願上則帰村之上立会相掛合候得共相整不申候、然ル上者土揚敷御法ヲ以被仰付被下置候様仕度、此段書付を以一同奉願上候、以上

堀田雄之丞領分
武州埼玉郡蓮谷村
外弐ヶ村
右惣代
同領分
右蓮谷村
名主　忠右衛門

未八月十七日

池田甲斐守知行所
同州同郡中島村
名主周蔵幼年ニ付代
年番組頭
徳右衛門
同
一橋御領知
同州同郡西粂原村
名主文左衛門事
名主
次左衛門
相手
与頭
金右衛門
同

御奉行所様

覚

笠原沼代用水之内西粂原村地内
一分水迄御仕用帳通、堀幅上口横弐間
但シ土揚敷左右弐尺宛
一分水下南北御仕様帳通、堀幅上口横七尺宛
但シ土揚敷南北片側揚三尺之積リ
右之通、未ノ十一月十三日三河屋掛合之時相手方へ相渡申候

乍恐以書付奉願上候

武州蓮谷村一件之もの共奉申上候、私共出入御吟味中ニ御座候処、論所笠原沼代用水土揚敷、先達而双方立会之上相定申度一先帰村奉願掛合候得共、行届□□奉恐入候、何卒以　御慈悲ヲ右堀土揚敷境杭相定以来堀浚共差支ニ不相成堀上口幅杭相定右杭より土揚場相定候様被仰付被下置度奉願上候、且堀床之儀も去ル午未両年浚後ニ相成候方仕来ル通上弐間堀より見積之上日繕相附堀床相定候様被　仰付被下置度奉願上候、其外之儀者、前々議定之通リ双方相守リ可申間、右願之通御聞済被成下置候様、一同奉願上、以上

堀田雄之丞領分
武州埼玉郡蓮谷村
外弐ヶ村
右三ヶ村新田
右惣代
同領分
右蓮谷村
訴訟人　名主　忠右衛門

文化八未年
九月十日

池田甲斐守知行所
同州同郡中嶌村
名主幼年ニ付代年番

与頭　徳右衛門
同　一橋御領知
同州同郡西条原村
名主　治左衛門
相手　組頭　金右衛門
同　御奉行所様

差上申御請状之事

私共出入御吟味中ニ御座候処、此度御普請役様為御見分差遣候趣被　仰渡一先帰村被　仰付承知奉畏候、尤御見分相済候ハヽ早速罷出御届可申上旨是又被仰渡承知奉畏候、依之御請書差上申処如件

堀田雄之丞領分
武州埼玉郡蓮谷村
名主　忠右衛門
池田甲斐守知行所
同州同郡中島村
組頭　徳右衛門
一橋御領知
同州同郡西条原村
名主　治左衛門
与頭　金右衛門
御奉行所様

差上申御請状之事

一武州笠原沼代用水路之内同郡西条原村地内堀浚之儀ニ付同村及異変候処、於江戸表御吟味之上浚方之儀ハ先出入済口議定通ニ而差支無之候得共、土揚敷無之其上堀口之幅差定無之差支候段申上候処、今般各々様右論所之場所為御見分御糺被成候趣、前後村々土揚場潰反別御見競西条原村地内之儀茂、右ニ准シ土揚場御極メ被　仰立、其外堀口幅之義も是又前後村々当時有形堀口幅見競深浅ニ応し御定法之割合を以、堀上口御極メ被成並論所掛リ合有之御定式浚手入不仕　押埋候段申上候場所之儀者、御水盛之上同配御改水行差障リ之有無夫々被仰立候ニ付御見分之節正路ニ御案内可仕旨、尤不宣之人足等不差出其時々被仰付候人形差出可申候旨被　仰渡候事

一御見分之節御遣方ニ相成候、杭竹並人足等其時々正路ニ割合訴答双方申合差出可申旨、且又水盛台之儀者新規可被仰付儀ニ茂候処、上筋御遣方ニ相成候水盛台有之候ニ付、右水盛台御用ひ被成候間□等可有之儀ニ付、御差図之通リ手入致シ候様被仰渡候事

一御見分御糺中御旅宿之儀、私共村々御旅宿不被仰付候ニ付、最寄村方之趣相頼ミ双方村々より村役人壱人ツヽ日々詰番之もの御旅宿へ相詰メ諸入用向右詰番之者江被仰付候ニ付得其意可申旨被仰渡候事

一御糺等之節者双方一同御呼出シ之上御糺被成正路ニ御答可申旨、尤差掛リ御糺被成候儀者、前書詰番之もの為御立会御糺被成候儀、可有之候ニ付、其段兼而相心得可申旨被仰渡候事

一蓮谷村・須賀村・中島村之儀者土揚場潰反別書付正路ニ相認差上可申旨被仰渡候事

一御止宿中所相屋を以木銭米代御定之通御払被成候ニ付、有合之野菜を以一汁一菜ニ御賄仕、縦令有合之品うり共決而御馳走ヶ間敷義不仕都而諸失脚不相掛様可致旨、且又御買之品者其時々代銭御払被成候ニ付、詰番之もの請取書差上可申旨被仰渡候之事

一御呼出之外決而御旅宿江罷出申間敷候、尤御用向相済候ハヽ早速帰村仕御旅宿勝手等ニ長居仕間敷候旨被仰渡候事

一御召仕中兼々被仰付置候得共、万一不法之儀等有之候ハヽ有体可申上旨被仰渡候、事前書之通被　仰渡候、逸々承知奉畏候依之御請連印差上申処如件

吉岡次郎右衛門御代官所
堀田雄之丞領分

武州埼玉郡蓮谷村
同　新田
名主　忠右衛門
組頭　利右衛門
百姓代　平次郎

文化八未年十月三日

吉岡治郎右衛門御代官所
同州同郡下野田村新田
名主　伝右衛門
組頭　伊右衛門
百姓代　清兵衛
吉岡治郎右衛門御代官所
池田甲斐守知行所
同州同郡中嶌村
同新田
名主周蔵幼年ニ付
名主代年番組頭
徳右衛門
百姓代　清次郎
同知行所
同州同郡須賀村
名主　浅右衛門
組頭　喜左衛門
百姓代　善次郎
民部卿殿御領知
同州同郡西粂原村
名主　治左右衛門
組頭　金右衛門
百姓代　幸右衛門

御普請御役
宮本治郎左衛門様
大塚杢助様

覚

間数合百四間五尺
同　弐拾間
上田　四町三反九歩
内五畝廿七歩
中田　弐町弐反壱畝拾三歩
内四畝拾歩
下田　五町三反弐畝拾四歩
内三反拾七歩
上田　七町三反五畝拾壱歩
内三畝廿三歩
中田　七町七反七畝廿六歩
内五畝廿三歩
下田　三拾壱町三反八畝九歩
内壱反六畝廿歩
野田　三町五反六畝六歩
内弐畝廿九歩

北縁
南縁
上畑成道敷ニ引
古来より上畑成享保十三新田堀敷
畑潰地引
古来より上畑成享保十四用水落口
同荒地同十三新田堀敷畑潰地ニ引
井堀ニ引
井堀ニ引
井堀ニ引
井堀ニ引
享保十三新田堀敷
井堀ニ引

右之通リ、上中下田畑野畑之内潰地引歩等有之候得共、今般御尋之井筋縁潰地之儀、聢与相分リ兼候ニ付、御水帳並割付勘定帳面差上候ニ付、御見届之上御聞済被成下候様奉願上候、以上

池田甲斐守知行所
武州埼玉郡中島村
名主代
組頭　徳右衛門

文化八未年十月　　百姓代　清次郎

御普請御掛リ
御役人中様

乍恐以書付奉申上候
武州蓮谷村一件之もの訴答一同奉申上候、今般私共出入一件ニ付為御見分被為遊御趣御見分中御旅宿村方相定可申上旨、先達而被仰渡候ニ付高岩村名主伝左衛門方江今日相掛合候処、御廻村御座候ハヽ其節無差支御旅宿可仕旨承知仕候ニ付、追而御廻村之節者、右名主伝左衛門方へ御旅宿被遊可被下候様奉願上候、右之通御聞済被下置候ハヽ訴答一同難有仕合ニ奉存候、以上

民部卿殿御領知
武州埼玉郡西粂原村
名主　治左衛門
堀田雄之丞領分
同州同郡蓮谷村
名主　忠右衛門
池田甲斐守知行所
同州同郡須賀村
名主　浅右衛門
同知行所
同州同郡中島村
名主代
組頭　徳右衛門

御普請役
宮本治郎左衛門様
大塚杢助様

差上申一札之事

武州笠原沼代用水路之内論所之場所、此節御見分被成下訴答一同難有仕合奉存候、右見分御取掛リ之節御水縄御改方被仰付御案内仕候処、堀筋両縁間数被成御改凡百間目位ニ而堀上口深等御改被成、其外押埋候段申上候場所洩水盛可被成候処、此節井筋少々流行有之候ニ付、引分前々分高岩境南側用水路之内上野田村境北側用水路之分ハ山王前ニ而右二ヶ所〆切致シ溜水ニ而深浅御改被成場所御案内仕候処、御見分御改方等御非分と奉存候義、聊無御座候、明俵縄人足等御替方、是又御非分之儀無御座候、御家来中御悲分之御取斗分無御座候、依之連印一札差上申処如件

吉岡治郎右衛門御代官所
堀田雄之丞領分
武州埼玉郡蓮谷村
同新田
名主　忠右衛門
組頭　利右衛門
百姓代　平次郎
吉岡治郎右衛門御代官所
池田甲斐守知行処
同州同郡中島村
同新田
名主周蔵幼年ニ付
代年番組頭　徳右衛門
百姓代　清次郎

文政（化の誤り）八未年
十月廿八日

吉岡治郎右衛門代官所
同州同郡下野田村
名主　伝右衛門
組頭　政五郎
百姓代　徳兵衛

池田甲斐守知行所

同州同郡須賀村　　御下御壱人拾七文
名主　浅右衛門
同　丈助
組頭　重兵衛
惣右衛門
善五郎
民部卿殿御領知
同州同郡西条原村
名主　治左衛門
与頭　金右衛門
百姓代　藤右衛門
御普請御役
宮本治郎左衛門様
大塚杢助様
差上申一札之事
武州埼玉郡笠原沼代用水路之内西条原村地内論所之場所御見分御糺ニ付、高岩村名主伝左衛門方へ相頼被成御止宿、尤訴答村々より水夫人足等差出シ詰番之もの両人日々相詰諸御用向右詰番之もの被仰付候、且又御止宿中御賄方之儀初発被仰渡候通、野菜有合ヲ以一汁一菜ニ御賄仕候ニ付外入用聊も相掛リ不申候、米銭相場御糺ニ付書付ヲ以申上候処、右相場ヲ以米代木銭左之通リ
未十月廿五日夕より同廿九日昼迄四泊リ　御上両人分
一白米壱斗弐升　同下両人分
代銭壱貫分
御飯米
但シ壱升ニ付
八十文
御壱泊リニ付
一木銭四百三拾弐文
御上御壱人三拾五文
一御茶代弐百文
前書之通、御払被成下奉請取候、尤御止宿中ニ者御買上之品御家来中ニ至迄一切無御座候、何ニ而茂御非分と奉存候儀御家来中迄聊無御座候、依之一札差上申処如件
吉岡治郎右衛門御代官所
武州埼玉郡蓮谷村
同新田
名主　忠右衛門
組頭　利右衛門
百姓代　平次郎
吉岡治郎右衛門御代官所
池田甲斐守知行所
同州同郡中島村
同新田
組頭　徳右衛門
池田甲斐守知行所
同州同郡須賀村
名主　浅右衛門
組頭　重兵衛
百姓代　善次郎
民部卿殿御領知
同州同郡西条原村
名主　治左衛門
組頭　金右衛門
百姓代　捨五郎
小笠原彦九郎知行所
同州同郡高岩村
名主
御宿　伝左衛門

御普請御役
宮本治郎左衛門様
大塚杢助様

乍恐以書付奉申上候

一武州蓮谷村一件之もの共奉申上候、私共出入当九月御吟味中論所其外堀筋御普請役様方御見分被成下候迄一先帰村奉願上帰村仕罷在候処、御普請役様方御出役被遊御見分相済、当十三日頃迄ニ双方罷出当御奉行所様江着御届可申上旨被仰渡候ニ付、一同着御届ケ奉申上候、以上

堀田雄之丞領分
武州埼玉郡蓮谷村
名主
訴訟人　忠右衛門
池田甲斐守知行所
同州同郡中島村
名主幼年ニ付代年番
組頭
同　徳右衛門
一橋御領所（知の誤り）
同州同郡西粂原村
名主
相手　治左衛門
組頭
金右衛門

御奉行所様

差上申済口証文之事

武州埼玉郡蓮谷村外弐ヶ村右三ヶ村新田右惣代同郡中島村名主周蔵幼年ニ付年番組頭徳右衛門外壱人より同州同郡西粂原村名主文左衛門事名主治左衛門外壱人相手取議定違変出入之旨申立、当五月中　松平兵庫頭様江御訴訟奉申上、同八月二日　御評定所江罷出旨御裏御尊判奉頂戴相手方江相附候処、当日相手方より茂夫々返答書を以御答奉申上候、追々御吟味中ニ御座候処、可相成者内済仕度懸合候得共、相済兼依之定御掛リ場用水路之儀ニ而差支有之候而者相互ニ迷惑之筋ニ付、右用水堀土揚場敷境杭打立以来堀浚共差支ニ不相成堀上口幅杭打立右杭より土揚相定候様被仰付度、堀床之義も去午未両年浚後ニ相成候儀仕来通上弐間堀より見積之上同俵相附堀床相定候様、其外之儀者前之議定之通相守リ申度訴答連印ヲ以奉願上候処、則御役人中様御越被遊場所御見分被成下候上、猶又御吟味中ニ御座候処懸合之上熟談内済仕候、趣意左ニ奉申上候

一右出入懸合候処、私共組合笠原沼代用水路之儀者、定御掛リ場ニ而年々定式浚自普請之義も御掛リ御役人中様江奉願上候而、御差図を受無甲乙浚立仕用水時節ニも水配リ御役人中様御差図を請用水引入来、尤西粂原村地内ニ而北側南側与相分リ北側用水ハ私共組合ニ而引入口田地相続仕来候者相違無之、然ニ是迄種々差支義有之組合村々之内別而難義仕候村々有之右組合者一躰之儀ニ付、今般右用水路堀敷之義来ル申春定式浚之時節三筋より無甲乙御掛御役人中様御差図ニ而浚立仕候上ニ而是迄議定ニも有之候通、堀巾敷ニ而七尺定上口之議者深浅ニ随ひ九尺又ハ壱丈之積ヲ以本文用水堀上口幅之儀深三尺迄ハ三口巾九尺と定三尺時より壱丈と相定メ定杭打立候筈、三拾間目ニ而三口幅寸尺を定め定杭打立上口左右土揚場敷片側五尺宛々ニ定、尤堀幅端ニ作場道式有之場所ハ右道式外三尺五寸ニ定、是又定杭打立且右井筋定式浚午未弐ヶ年相手方差障リ浚出来兼候故、訴訟方村々及難儀付、向後定御掛リ御役人中様御差図次第、聊故障等不仕御差支無之様可仕候筈、其外儀者去ル巳年議定証文之通相心得万事差支無之候而無申分熟談内済仕偏ニ　御威光与難有仕合ニ奉存候、然上者右一件ニ付重而双方より御願筋毛頭無御座候、依之為後証連印之済口証文差支（上の誤り）候如件

堀田相模守領分
武州埼玉郡蓮谷村
吉岡治郎右衛門御代官所

同州同郡同村新田
池田甲斐守知行所
永井銈次郎知行所
小笠原彦九郎知行所
同州同郡須賀村
吉岡治郎右衛門御代官所
同州同郡村請
笠原下野田村新田
池田甲斐守知行所
同州同郡中島村
吉岡治郎右衛門御代官所
同州同郡同村新田
右惣代
堀田相模守領分
右　蓮谷村
名主
訴訟人　忠右衛門
池田甲斐守知行所
右　中島村
組頭
同　徳右衛門
一ツ橋御領知
同州同郡西粂原村
名主文左衛門事
名主
相手　治左衛門
組頭
同　金右衛門
御評定所

文化九申年二月

前書之通議定仕候上者猶又一先帰村奉願上定杭打立候上ニ而済口証文奉差上候筈之事

訴訟方惣代
蓮谷村
名主　忠右衛門
中島村
組頭　徳右衛門
相手方惣代
西粂原村
名主　治左衛門
組頭　金右衛門

乍恐以書付奉願上候
武州蓮谷村一件之もの共奉申上候、私共出入之儀別紙済口証文之通熟内済相調候得共、右済口趣意之通用水堀敷巾上口共一先帰村之上定杭打立候上済口証文差上候筈、対談議定仕候得共右用水之儀者定御掛リ場之儀ニ御座候間、右杭打之議定御掛リ様御立会之上御差図を請、右議定之通杭打立候様仕度奉存候間、何卒以　御慈悲此段御聞済被成下御掛リ様へ御達シ被成下御出役之上定杭打立相済候与一同一先帰村被仰付被下置度奉願上候、以上

堀田相模守領分
武州埼玉郡蓮谷村
名主
訴訟方　忠右衛門
池田甲斐守知行所
同州同郡中島村
組頭
同　徳右衛門

申二月二日

一ツ橋御領知

同州同郡西条原村
名主　治左衛門
相手方
組頭　金右衛門

御奉行所様

差上申御請書之事

武州蓮谷村一件之もの共奉申上候、私共出入御吟味中ニ御座候処、熟談内済相整候得共、度々再論ニおよび候ニ付内済議定之通定杭打立候上済口証文奉差上度、尤右場所定御掛リ場之義ニ付御役人中様御立会之儀奉願上候処、願之通リ近々御普請役様被差遣候間、御差図を請杭打立可仕旨、被仰渡難有承知奉畏候、依之御請書奉差上候処如件

武州埼玉郡蓮谷村
外弐ヶ村
右三ヶ村新田
右惣代
堀田相模守領分
右蓮谷村
名主
訴訟方　忠右衛門
池田甲斐守知行所
同郡中島村
組頭
同　徳右衛門

文化九申年
二月九日　一橋御領知
同州同郡西条原村
名主

相手方　治左衛門
与頭
金右衛門

御奉行所様

差上申一札之事

一笠原沼代用水路西条原村地内引分字北側用水之儀、堀巾並左右土置場之儀是迄掟与取究無之候故、双方より奉出訴追々御吟味中ニ御座候処、訴答より熟談仕度旨奉申上、右済口証文之趣を以堀巾土揚場共此度取究候ニ付、堀上口之儀者、深浅ニ応し九尺より壱丈迄、土揚場之儀右堀縁リ通リ上口杭より幅五尺宛々並ニ堀端ニ道有之候場所ハ有来候道巾之外ニ尺五寸ツヽ土揚場ニ相定メ、堀床之儀ハ幅七尺其外之義ハ先規定之通之趣ヲ以前後堀敷江見平均百間目ニ敷木ヲ入候筈之処、地元西条原村並南側北側用水組合村々一同熟談相整、右敷木者入不申様取究済口ニ相成候ニ付、今般各様被成御越右定杭打立御見届有之候ニ付、訴答村々役人一同罷出御案内仕右堀両縁土揚敷引分口始より堀長三拾間目亦者村境目等へ巨細ニ上口杭土置場杭打立堀敷之儀前事之通、後日ニ争論無之様相成候上ハ、訴答村々ニおひて少茂申分無御座候御奉行所様ニ而申立候通済口証文ニ相洩候儀、決而無御座双方熟談相整ひ定杭打立其外先規定之通無残所相済候儀ニ付、一同難有仕合奉存候、右ニ付済口証文早速御奉行所様江可奉差上儀ニ御座候、然ル上ハ右筋之儀ニ付、後日ニ御願筋毛頭無御座候、尤定杭打立其外御場所ニおゐて何ニ而茂御非分成義少茂無御座候（無御座候）、依之印形書付奉差上候処如件

吉岡治郎右衛門御代官所
堀田相模守領分
武州埼玉郡
蓮谷村
同村新田
名主　忠右衛門
組頭　幸次郎

百姓代　九郎次

文政（化の誤り）九年申三月

吉岡治郎右衛門御代官所
池田甲斐守知行所
同州同郡中島村
同村新田
名主周蔵幼年ニ付
組頭　徳右衛門
百姓代　重右衛門

吉岡治郎右衛門御代官所
池田甲斐守
永井銈次郎　知行所
小笠原彦九郎
須賀村
名主　惣右衛門
組頭次右衛門代
政五郎
百姓代　友右衛門

一ツ橋御領知
同州同郡西条原村
名主　次左衛門
組頭　金右衛門
百姓代　彦右衛門

御普請御役
宮本治郎左衛門様
有坂勝三郎様

右西条原村地内北側引分口より下須賀村外弐ヶ村用水路一件済口之趣ヲ以、私共年番之儀一同罷出承知仕、依之奥印仕候、以上

松並喜太郎知行所

同州同郡百間村
名主
用水年番　七郎右衛門

小笠原彦九郎知行所
同州同郡高岩村
組頭
勘右衛門

差上申一札之事

一笠原沼代用水路私共村地内之儀ハ、西条原村地内ニ入会有之並西条原村・東条原村境ニ堀筋相当リ候場所も有之、前々より堀筋定式浚並藻刈之節共浚土揚場之儀ニ付何ニ而茂差支之筋無之候処、先達而西条原村地内土揚場之儀ニ付出訴仕リ、追々御吟味之上今般双方熟談相整候趣ヲ以右堀巾上口相定リ候ニ付、私共村地先之儀者、浚土揚場之儀ニ付是迄仕来之通ニ而少茂故障之儀無之、尤地先之儀ニ付可立会旨被　仰付候間、村役人罷出御案内仕堀巾上口杭打立之場所及見候処、少茂御非分之儀無御座候、向後右堀幅之儀ニ付御願筋毛頭無御座候、依之印形書付差上申処如件

堀田相模守領分
細井金之丞　知行
渥美九郎兵衛

文政（化の誤り）九年申三月

武州埼玉郡
東条原村
名主　幸右衛門
組頭　左源太
百姓代　利八

宮本治郎左衛門様
有坂勝三郎様

乍恐以書付奉申上候

武州蓮谷村一件之もの共奉申上候、私共出入御吟味中熟談内済相整右者用水堀定御掛リ場之儀ニ付、西条原村地内用水堀巾上口並土置場定杭打立之儀御役人中様御立会御差図被成下度奉願上候処、願之通御聞済被成下則御普請役宮本治郎左衛門様・有坂勝三郎様御出役之上、済口議定之通定杭打立相済難有仕合ニ奉存候間、何卒以　御慈悲先達而奉差上置候済口証文御聞済被成下置度、此段以書付奉申上候、以上

武州埼玉郡蓮谷村
外弐ヶ村
右三ヶ村新田

文化九申年三月　右惣代
池田甲斐守知行所
同州同郡中島村
組頭　徳右衛門

一ツ橋御領知
同州同郡西条原村
名主文左衛門代兼
金右衛門

御奉行所様

乍恐以返答書奉申上候

一ツ橋御領知武州埼玉郡西条原名主文左衛門事治左衛門・組頭金右衛門奉申上候、今般同州同郡蓮谷村外弐ヶ村惣代同郡中島村名主周蔵幼年ニ付代年番組頭徳右衛門・須賀村名主惣右衛門より相掛ケ議定違変出入之旨、先達而松平兵庫頭様江奉出訴今二日御評定所江可罷出旨御尊判頂戴被相附、乍恐始末左ニ奉申上候

一右訴訟人申立候ハ、私共議定違変仕用水井筋普請仕立形々差障リ候旨、其外早々訴上候、此段甚相違之儀ニ御座候、右笠原沼代用水路之儀者、当村地内ニ而南北与分水仕訴訟方其外村々江用水引入候、依之右村々より当村江立入年々普請仕立来候、御普請御仕様帳ニハ堀巾七尺与有之候得共、先年者五尺ニ而、其後寛政二戌年及争論候節六尺ニ議定内済仕、既ニ去ル辰年迄堀巾六尺ニ仕来ニ御座候、然ル処去ル巳年御普請ニ付議定相破リ堀巾切広ケ深浚仕、悉ク麦作踏荒シ土下いたし深堀之上作場道江刎揚農業通路難相成、其外分水上日光御成道石橋際より左右拾五間程ツゝ古杭箭御座候処抜捨候ニ付、堀縁欠崩久喜町並作場往来差支ニ罷成、其上南井筋凡三百間程是又深堀切広宇嶋耕地石橋際迄堀立候間、石橋崩落往来難相成右躰法外成致方ニ付人足共差押候得共、其節年番須賀村名主浅右衛門差図之旨ニ而大勢手荒シ人足共何分聞入不申達而差押ひ候ハゝ怪我等も可仕躰ニ付無致方差拓へ罷在候所、甚法外之浚方致候ニ付同人ヲ相手取去々巳年三月中　水野若狭守様御勘定御奉行御勤役之砌リ奉出訴候処、同四月二日御評定所江被召出双方無差支様場所熟談可仕旨被仰付御領知並御給々様御役人中御出役被成、右場所一同御見分之上双方江御理解被仰聞其上扱人立入再応及懸合候処、内済相調不申候ニ付其節乍恐破談之儀御届奉申上候処、同五月廿五日御差日御尊判頂戴相附候処、浅右衛門より返答書ヲ以御答奉申上候、御吟味中之処又候扱人立入熟談内済仕於御評定所ニ済口証文御聞届被遊候旨被仰渡候、然ル処訴訟方村々之もの共如何相心得候哉、議定違変いたし右堀広深浚之場所一向ニ手入不仕等閑ニ捨置候ニ付、村々並扱人共江数度及催促候得共、彼是扱遣之挨拶而已仕向取敢不申候ニ付、同年九月中相手浅右衛門並右扱人共ヲ相手取猶更　水野若狭守様江奉出訴候処、同月廿五日御評定所江被召出場所熟談被仰付候、依之御領知並御給々御役人中御立会場所御見分之上双方へ御理解被仰聞候上、猶又扱人立入熟談内済仕候ニ付御評定所江済口証文奉差上御聞済之上一同帰村被仰付候、右用水路之儀者、最初此度訴訟方村々之者共全先年議定之儀当村名主拾五年以前巳年焼失仕候節、当名主治左衛門親次左衛門焼死仕候程之儀故、御水帳始メ諸書物何ニ而茂不焼失仕候ニ付、右議定書付等無之ヲ見込地元村ヲ見掠メ去々巳年御入用御普請被成下候ニ付、格別出情浚立候様御掛リ様より被仰付候与申ニ幸ひ北側下郷村ニ馴合理不尽ニ切広ケ深浚仕候より事起リ候儀ニ事右内得之趣意共南北共ハ堀巾鋪相定、元杭打立百間目江定杭之場所ニ而、当時水面より水源ヲ取何ケ筋ニ而茂平均ニ致し右寸尺ニ而堀床

敷木を相定メ水行強ク押堀候場所ハ敷木ニ見平均シ堀立致し堀巾広キ場所ハ杭筋仕埋立可申筈、尤定杭後日尓朽損し候節者、双方立会打替候筈、去ル午春より定式浚之儀者御掛リ様御差図次第地元村立会可申筈ニ而済口之趣双方一同得心之儀ニ御座候間、村々よりも議定書付為取替熟談内済仕候、然ル処右村々之もの共両度迄ニ議定書忘却致一向普請之取掛リ無之候ニ付、不得止事去午春九月中此段御訴訟仕度領知役所へ願出候処、両度迄も議定為取替熟談仕候事故取扱人共江掛合之上可願出旨被仰聞候間、早速帰村仕扱人共掛合候得者、彼是申粉等閑ニ捨置候内、却而右之者共より私共ヲ相手取奉出訴候、且右杭木打立敷木相定候儀是迄相手村江数度催促仕候得共一向等閑ニ致置候間、其節之扱人へも再応及掛合候得共、是又一向取敢不申其侭ニ相成居候儀ニ御座候、然ル処今般右村々より私共を相手取早触取拵申立候得共甚相違之儀ニ御座候、右両度迄之儀定之通相写リ早々普請ニ取懸リ呉候得共私共村方ニ而ハ故障可申唱無之所再応之議定致シ候儀ヲ等閑ニ打捨置、却而私共村方ニ而普請為請負候ハヽ仕立可替左茂無之候ハヽ差障リ候儀曽而無御座候、且又私共村方ニ而請負普請ニ致呉候様掛合も有之候得共、右者定御掛リ場所其筋江御願も不仕容易ニ普請請負ケ間敷義仕候而者、浚難恐入候儀ニ付其旨及挨拶候儀ニ御座候、其外浚土揚場敷之儀前文笠原沼代用水路ニ付村内ニ堀際より何程ハ土揚敷と申議定無之候得共、前々之用水路浚ニ付遠方へ土取捨置候ニも無之堀近差支無之場所へ土取揚候所、右村々より堀巾切広ケ候より土揚敷無之姿ニ相成候、既ニ堀際ニ弐三尺廻リより五六尺廻シ之大木之代株も御座候処、去々巳年右之代株掘出シ候ハ堀広候明白之証拠ニ御座候、且又普請仕立之儀右村々より杭筋之場所堀巾七尺之処七尺五六寸ニも致候御見平均を以埋立候ハヽ杭筋代与して金三両差出シ可申、猶又用水路敷木相除候儀承知致呉候ハヽ別ニ金弐両差出シ可申段私共江掛合候得共内済議定之通最初相手方ニ而普請致候ハヽ私共江金子受取普請可引請取存無之ニ付済口議定之通普請有之候様及挨拶申候井筋土揚場之儀者、前文申上候通ニ御座候得共堀際迄御年貢地所ニ付土揚為致不申旨私共より及掛合候義無御座候、尤先達而私共より村々江懸合候節申聞候者土揚場之儀者是迄例年之通所々より作所候場所江揚置候而も不法之致方無之定例之通ニ候ハヽ地主方ニ而相片付不差支様致可申井筋両縁雑木置下リ候場所有之ハ為伐取可申旨迄ニも掛合候義ニ御座候、其外何ニ茂済口議定新規之儀申掛ケ候義曽而無御座候済口議定違変仕候筋覚無御座候、却日早々相違之儀申立私共ヲ相手取奉出訴候者村々之もの共議定之通普請仕立候而者勝手不宣儀ニ相見へ地元村之難義も不顧兎角難題申掛困窮之村方四人□難義至極仕候間、何卒　御慈悲を以此段御質察被成下置前書之通リ始末逸々御吟味被成下置再応議定取究メ候通早々普請ニ取掛リ右躰用水路水行理不尽ニ堀揚地元村田方高場ニ相成候間、此上宣敷被成地元村者勿論下郷村々水難之憂無之様無難ニ百姓相続相成候様被仰付被下置候ハヽ難有仕合奉存候、猶又御尋之儀ハ乍恐口上ニ而可申上候、以上

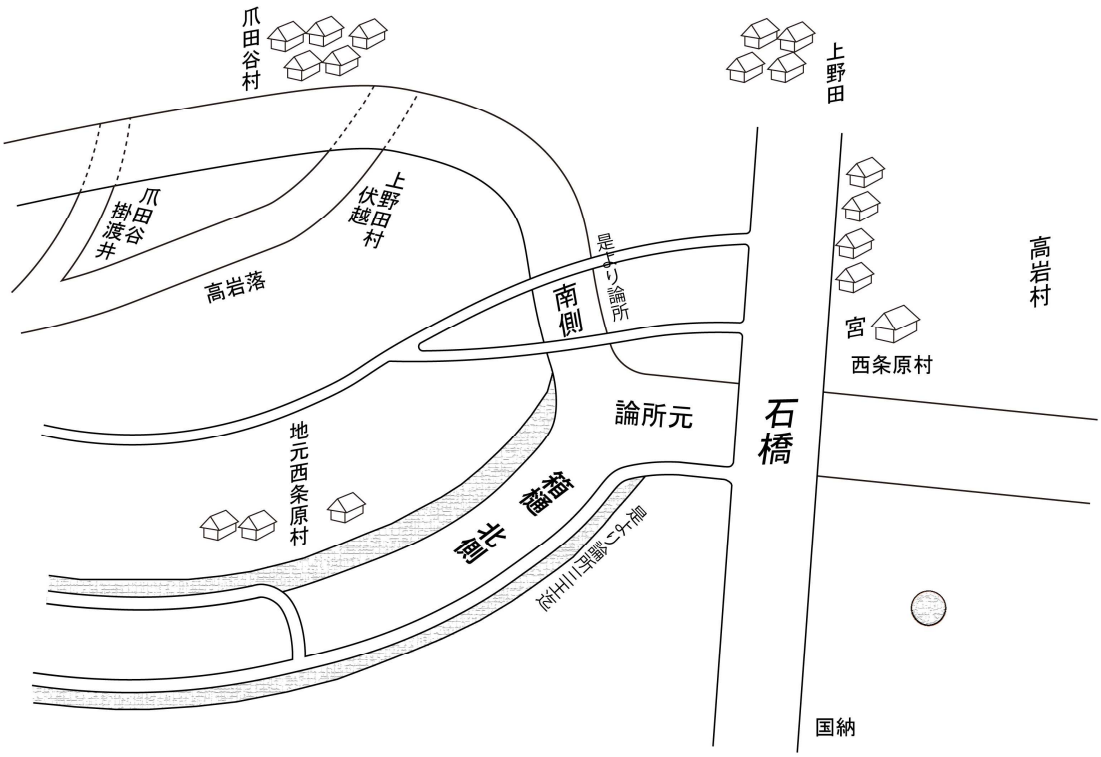
一ツ橋御領知
武州埼玉郡粂原村
名主文左衛門事
名主　治左衛門印
文化八未年八月二日
組頭　金右衛門印
御評定所

尓時、文政九年戌八月吉日中島村岩崎氏ニかりたり、是を写し畢りぬ

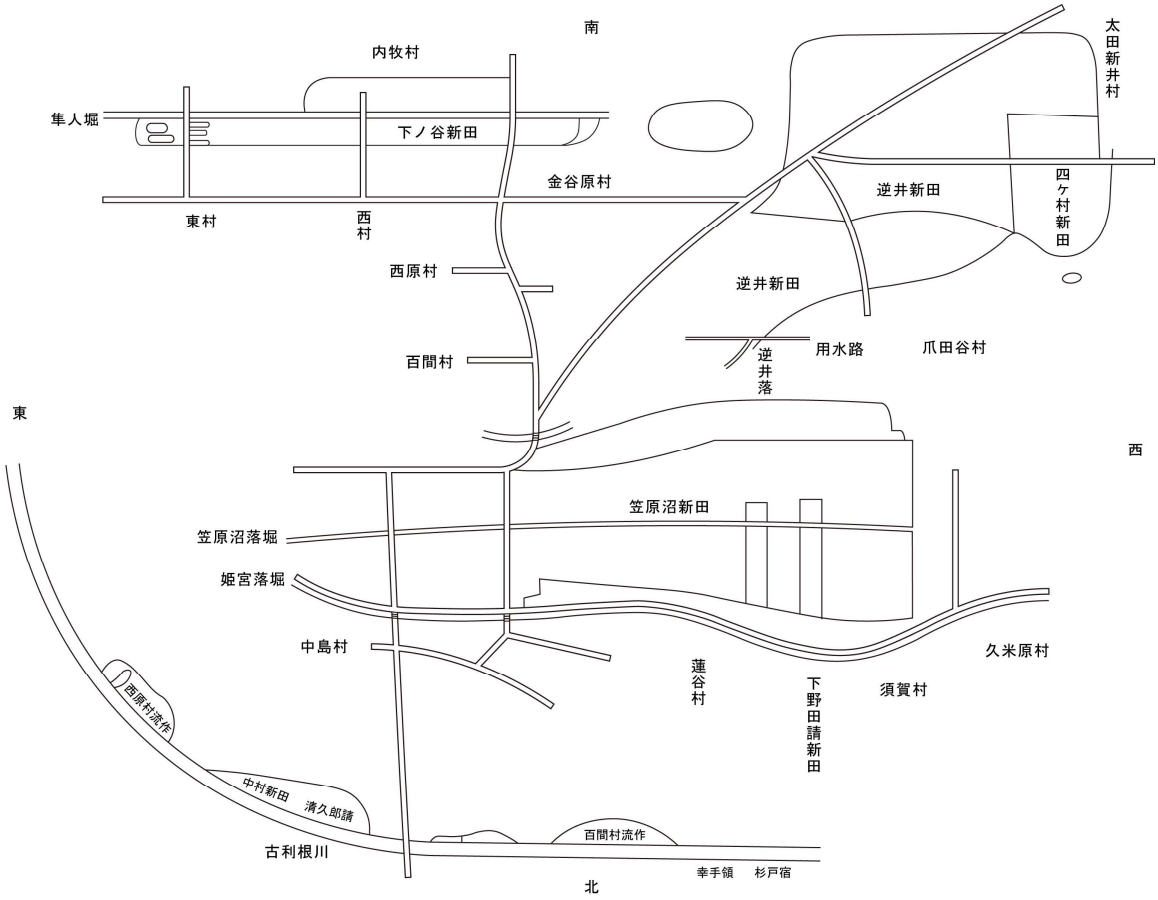
百間村川島
大高氏

（裏表紙）
「　大高兵五郎　」

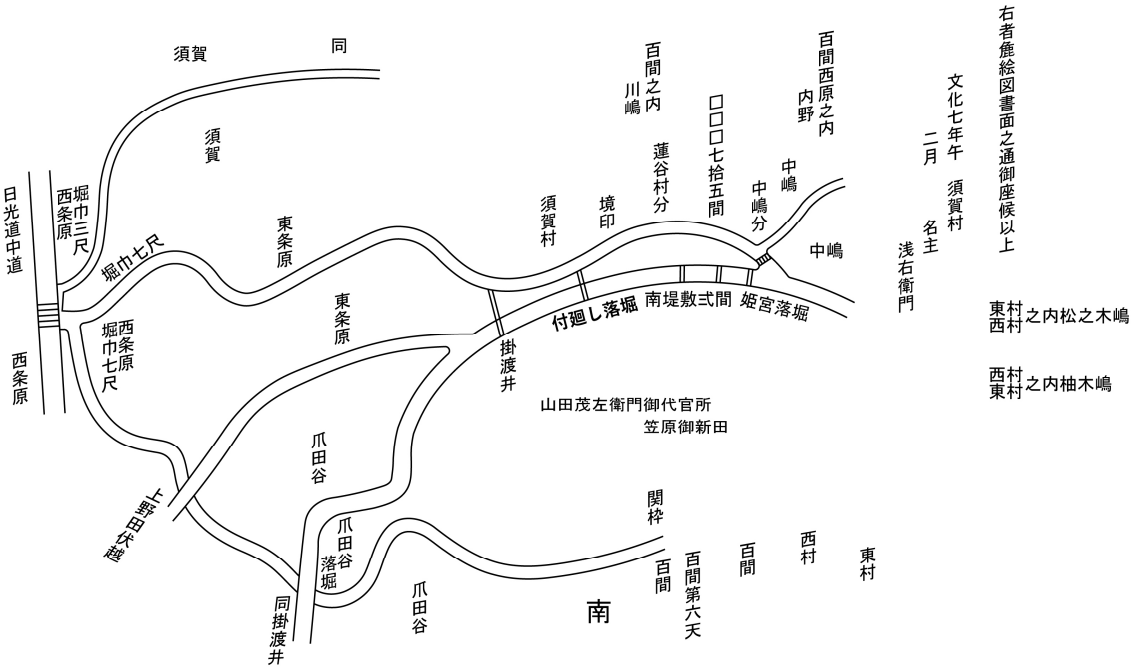
●年未詳　西条原分水争論絵図（百間中島岩崎家文書　No.２７２９）



●文化元年　笠原・逆井・下ノ谷・午高入新田絵図（百間中島岩崎家文書　No.３４８７）



●文化七年　用悪水絵図（百間中島岩崎家文書　No.２７２６）



●文化八年　黒沼笠原沼代用水路定式浚自普請出来帳（百間金谷原関根家文書　No.３２２）

（表紙）
「　文化八年
黒沼
代用水路定式浚自普請出来形帳
笠原沼
未閏二月　」

黒沼
代用水路四拾六ヶ村組合
笠原沼
星川口より除堀関枠迄
一用水堀浚長弐千五百五拾壱間　横弐間半
平均　深五寸
此坪五百三拾壱坪四合
除堀関枠より西条原村引分迄
一同浚長三千四百三拾弐間　横弐間
平均　深五寸
此坪五百七拾弐坪
西条原村引分より百間第六天迄
一同浚長弐千六百拾四間　横七尺
平均　深五寸
此坪弐百五拾四坪壱合
東条原村より中嶋村迄
一同浚長千七百六拾六間　横七尺
平均　深五寸
此坪百七拾壱坪七合

西条原村より須賀村地内迄
一同浚長千五百弐拾七間　横三尺
平均　深五寸
此坪六拾三坪六合
五口坪千五百九拾坪八合
人足三千百八拾六人　但浚壱坪弐人

黒沼用水路
除堀関枠より鹿室村迄
一用水浚長五千三拾四間　横七尺
平均　深五寸
此坪四百八拾九坪四合
鹿室引分より内牧村地内迄
一同浚長千三百五拾七間　横七尺
平均　深五寸
此坪百三拾壱坪九合
鹿室引分より内牧原迄
一同浚長千三百五拾四間　横四尺
平均　深五寸
此坪七拾五坪弐合
三口坪六百九拾六坪五合
人足千三百九拾三人　但シ浚壱坪弐人

原村地内
庄兵衛伏越樋
一洩所堀割長四間　横三間
平均　深八尺
此堀埋坪三拾弐坪
人足九拾六人　但堀埋築堅メ足土共
壱坪三人

庄兵衛堀三間ツヽ埋所
伏越樋前後弐間ツヽ弐ヶ所
一仮〆切長延拾間　横壱間
平均　四ヶ所
此坪五坪　高三尺
右入用
明俵三百六拾俵　長延拾間高三尺之処
但　間ニ六俵再三重裏表分
但土俵三俵ニ壱房宛
縄百弐拾房
人足
拾八人　土俵壱人弐拾俵拵
弐拾人　〆切仕立取払共壱坪四人
六拾四人　水替桶弐丁手代共屋□
拾六人ツヽ四日分
明俵三百六拾俵
小以
縄百弐拾房
人足四千七百七拾七人
是旨組合村々百姓役

右者、当未春黒沼笠原沼代用水路定式自普請所、二月下旬より取掛り、此節迄ニ御積り帳面之通丈夫ニ浚方皆出来仕大小之百姓迄一同難有奉存候、且人足御継方之儀ハ不及申ニ御召仕申至迄御非分成義無御座候、右自普請之義ニ付、後日ニ御預ヶ間敷義毛頭無御座候、依之出来形御請印形差上申処仍而如件

黒沼　用水路年番惣代
笠原沼
文化八未年閏二月　河原井村

長左衛門
千駄野村　小源治
中曽根村　源吉
高岩村　甚右衛門
西粂原村　金右衛門
百間村　七郎右衛門

御普請御掛
御役人中様

●文化八年　黒沼笠原代用水六ヶ村組合規定連印帳（百間金谷原関根家文書№３２３）

（表紙）
「　文化八年
黒沼
代用水四拾六ヶ村組合規定連印帳
笠原
未七月　」

取替申規定一札之事
黒沼笠原沼代用水之儀、末水村々江行届兼候ニ付、以来格別ニ入念藻刈並橋之掛藻刈等取揚ヶ方之儀、組合一統相談之上、左之通取極メ申候

一藻苅之度毎藻草者不及申、両縁草木都而水行差障り□者不残苅拂可申候、尤是迄者藻留不致苅流し候村々茂有之候得共以来者丁場境江弐尺間ニ茂杭建置幾重ニも縄張致下丁場江聊流し不申丁場限不残取揚ヶ候筈取極申候事
一橋之縣り藻刈之儀藻苅当日丁場限藻苅人足ニ而□際より不残取揚ヶ可申候、且用水中平日之儀者、是迄大小村並橋数不拘地元村ニ而揚はつし仕来候処右様ニ而者組合内ニ而、地先無之村方茂有之□□合外ニ而井筋地先相当り橋有之候村方も有之、勿論大村小村橋之多少之訳も御座候得者、置而甲乙有之候得共是迄者通□ニ致し置候事故右之通り仕来候処、今般従　御掛様御厳重「　」以来者橋杭ニ縣り有之候分者勿論、何所ニ而も橋下るニ差支候ものハ堀敷より不残取揚ヶ候儀ニ付是迄与者格別ニ人足遣ひ方多分相掛り候間比上之儀者橋々之儀組合一統ニ人足差出シ可申所左候而者□□他村迄罷越相働キ候筋ニ候得者、平日之事故差支之儀も出来柄多不弁理ニ付井筋一躰相調へ賃□積之組合一統ニ割合地先無之村々並大村橋少之村々より小村橋多□村々江助郷無甲乙様改地先村限りニ而橋々掛り藻芥等不残取揚ヶ候筈取極メ申候事

右者今般従　御掛様被　仰渡組合村々会合相談之上前書之通取極メ候上者、向後急度異変致間敷候、依之規定連印致置候処如件

黒沼
用水路四拾六ヶ村組合
笠原沼
武州埼玉郡
三箇村
文化八未年七月　名主　由右衛門
与頭　長兵衛
百姓代　長左衛門

●文化八年　古利根川御定杭御打渡一札（百間中島岩崎家文書　№２８６２）

差上申一札之事

此度古利根川通り葛西井筋用水川巾御定杭御打渡被成候ニ付、騎西領持粕壁橋より百間下地境立会御案内仕候通り相違無御座候、尤川巾之儀も御見ためし御座候趣ニ御取極被成候旨承知仕、何ニ而茂後日御願ヶ間敷筋御座なく候、依而為後証一札差上申所如件

騎西領大落惣代
池田甲斐守知行所
武州埼玉郡須賀村
名主　浅右衛門

文化八年未十一月

同知行所
同州同郡中島村
松之助

葛西井筋御掛リ
御役人中衆

控福永喜弥太様
小池為之助様
柳田余五郎様

差添人
百間村
名主
源太左衛門

●文化九年　笠原沼用水組合高地頭姓名高書（東粂原岡安家文書　№２５６）

（端裏書）
「高書地所性名取調写　三給高田畑反別
用水不用証文之写　内訳ヶ写
田方植付証文之写　」

差上申高書之事

一高四百弐拾八石五斗六升四合五才
此内訳ヶ　笠原用水組合高
一高三拾四石七升弐合　宮村次郎左衛門支配所
一高百三拾九斗三升九合六夕五才　堀田鴻之丞領分
一高百三拾壱石七斗七升七夕　渥美九郎兵衛知行所
一高百三拾壱石七斗八升壱合七夕　細井金之丞知行所

右者、笠原用水組合高並ニ地頭性名、書面之通差上申処相違無御座候以上

武州埼玉郡百間領
東久米原村
名主　幸右衛門
組頭　佐源太
百姓代　利八

文化九年
申正月四日
内山七兵衛様御組
野廻り
嶋村義五郎様

●文化十五年　備前堀普請願（百間中島岩崎家文書　№２６８７）

乍恐以書付奉願上候

青柳村地内北縁
一切場長弐拾八間　平均　横高三尺三尺
太田袋村地内北縁り
一同　五間　平均　横高右同断

西条原村地内北縁り
一同　百間　平均　横高右同断
和戸村地内北縁り
一同　拾弐間　平均　横高右同断
同所下北縁り
一同　拾間　平均　横高右同断
同所下北縁り
一同　拾間　平均　横高右同断
同所南縁
一同　弐拾壱間　平均　横高右同断
合七ヶ所
右者騎西領悪水落字備前堀三拾弐ヶ村組合惣代下早見村名主代要蔵油井ヶ嶋村乙右衛門奉申上候右堀ニハ早崩附淵出来候ヶ所百姓役ニ而切場支度奉存候間前書ノヶ所御目論見被成下置当寅春自普請ニ被　仰付被下置候様奉願上候以上

武州埼玉郡油井ヶ嶋村
惣代名主　音右衛門㊞
同州同郡下早見村
名主代　要蔵㊞

文化十五年
寅正月

当領
御掛り
御役人中様

●文政四年　田方植付証文（東粂原岡安家文書　No.２５９）

差上申田方植付証文之事
一田高弐百三拾弐石五斗八合四夕弐才
武州埼玉郡東久米原村
此田反別弐拾八町三反七畝五歩
此内訳
御代官
一田高三拾四石七升弐合　吉岡治郎右衛門支配所
此田反別四町三反七畝歩
一田高六拾五石九斗八升六合九夕五才
堀田相模守領分
此田反別七町九反八畝拾四歩
一田高六拾六石弐斗弐合五夕七才
渥美九郎兵衛地行所
此田反別八町拾四歩
一田高六拾六石弐斗四升六合九夕
細井金之丞知行所
此田反別八町壱畝七歩
右者当巳夏私共村方田方植付之儀者、五月弐拾三日より取掛リ六月五日迄ニ壱畝壱歩も不残植付相済、大小之百姓一同難有仕合ニ奉存候、依之植付証文差上申処、仍而如件

文政四巳歳
六月拾八日

東久米原村
名主　幸右衛門
組頭　八郎兵衛
百姓代　利八

用水御掛リ
御役人中様

●文政十年　除堀分水模様替不用願（百間中島岩崎家文書　No.２８６８）

差上申一札之事
一見沼代用水笠原組合私共村方之義ハ除堀村地内ニ而黒沼組合与分水仕是迄用水引来リ申候、然ル処黒沼下拾六ヶ村ニ而右引入口模様替奉願上候ニ付、

私とも村々用水差支此段奉願上候
一除堀村地内関枠私共組合井筋下原村地内ニ而伏越壱ヶ所
一原村地内伏越下早見村地内伏越壱ヶ所
一野牛村地内押掛戸壱ヶ所番水ニ相立申候
一高岩村地内水門壱ヶ所右同断番水相立申候
一西久米原地内より須賀村江分水壱ヶ所
一同村地内より南北与分水壱ヶ所
一上野田村地内伏越壱ヶ所
一爪田谷村地内掛渡井壱ヶ所
一百間村地内南北与分水関枠壱ヶ所番水ニ相立申候
一同村地内押掛戸壱ヶ所番水ニ相立申候
右之通り所々ニ而伏越其外番水等多分有之候故、組合村々申合、御用中井筋昼夜見廻候而も引入方難義仕無余義用水御掛様江奉願上、上郷村々用水引入口御封印被成下置候而も、下組合村々行届兼候、渇水之節者黒沼笠原相談之上除堀村地内分水ニ而番水ニ仕、漸御田地相続仕来り候然ル処、今般黒沼下組拾六ヶ村ニ而右除堀村圦樋処模様替奉願上候処、御聞済之上場所御見分ニ相成候由被仰聞奉驚入候、模様替普請被仰付候而者私共組合之義ハ甚難渋仕候、是迄之通り有之候而茂前書奉願上候通リ不順水之場所故難義至極仕候間、何卒以御慈悲を是迄之通リ有形ニ御普請仕立被　仰付被下置度、以惣代此段奉願上候、猶又御尋之義ハ口上ニ而可奉申上候、已上

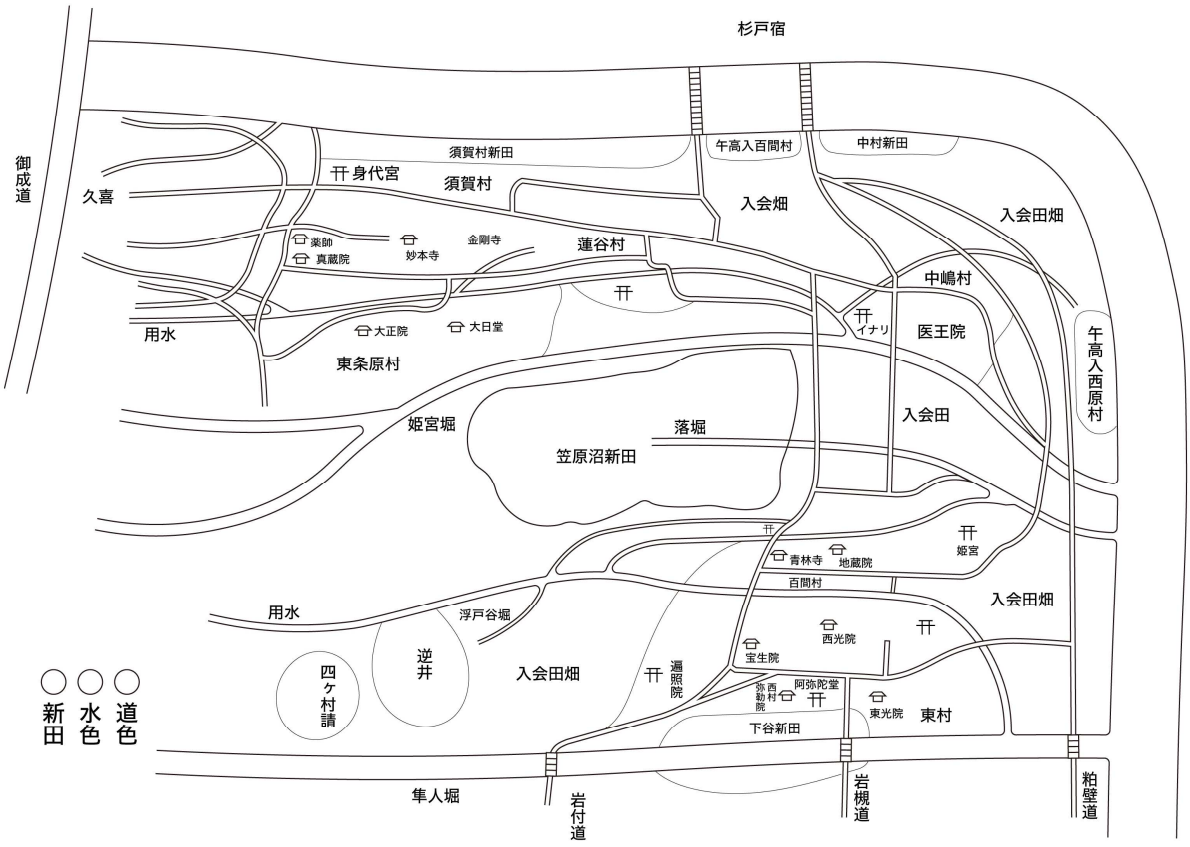
文政十年亥正月

武州埼玉郡

中島、百間、蓮谷、須賀
爪田谷、西村、東村
右村々惣代東村
名主　吉五郎

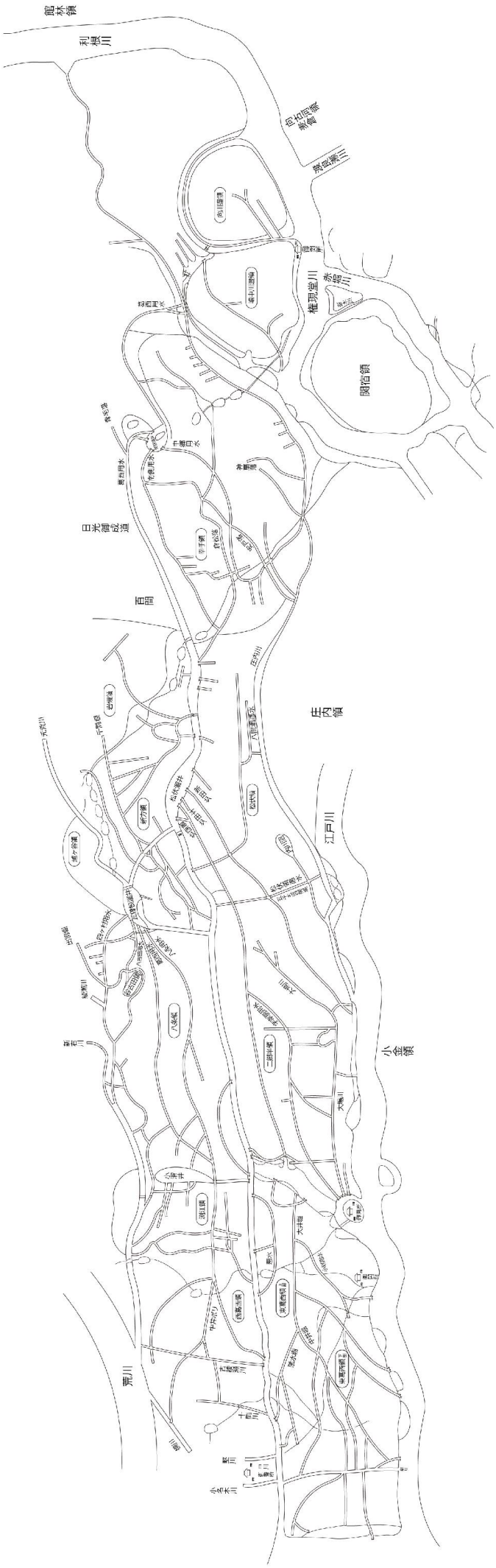
御役人中様

●年未詳　新田絵図（百間中島岩崎家文書　No.２７２７）



●文政十年　葛西拾箇領用悪水路絵図（清地深井家文書　No.3）

（表紙）
「文政十亥夏月
葛西拾箇領用悪水路絵図」



●文政十二年　第六天筵堰争論済口証文（須賀戸田家文書　№３１）

差上申済口証文之事

永井鉄弥知行所武州埼玉郡須賀村持添山田茂左衛門御代官所同州同郡下野田村新田、堀田相模守領分同州同郡粂原村持添山田茂左衛門当分御預所同州同郡粂原村新田、堀田相模守領分同州同郡蓮谷村持添山田茂左衛門当分御預所同州同郡蓮谷村新田、池田甲斐守知行所同州同郡須賀村持添山田茂左衛門当分御預所（同州同郡須賀村新田）、同州同郡中島村持添山田茂左衛門当分御預所同州同郡中島村新田、右五ヶ村惣代永井鉄弥知行所同州同郡須賀村名主兵助より、堀田相模守領分同州同郡百間村名主源左衛門・組頭斧七、森川伊豆守知行所同州同郡百間西原村名主佐次右衛門・組頭七平・金蔵・四郎左衛門、松波貞太郎知行所同州同郡百間金谷原村名主武左衛門・組頭佐之吉、右三ヶ村八人相手取用悪水出入当四月中　曽我豊後守様江奉出訴候所、於場所熟談可仕旨、当九月十八日於　御評定所被仰渡候ニ付、御支配並御給々御役人中御参会場所御見分之上御利解申、扱人遣人懸合熟談内済仕候趣意左ニ奉申上候、

一右出入双方及掛合扱人与後ニ内実承糺候所、第六天下筵堰之義訴訟方申立候者、勝手侭ニ堰いたし候義不相成仕来ニ候所、相手之者共より再応申断候得共□□申なく堰掛置、其上小前之者共不承知之趣を以難取払旨及杭竪堰留置候ハヽ溢水笠原耕地江押入、新田水冠ニ相成候趣申立て候得共、右新田之義は一体地窪ニ而少雨ニも水湛候場所ニ候所、八月中之義者高場迚も深入ニ相成候程之低場者勿論之事ニ有之候得者、第六天脇より溢入水冠ニ相成候与斗見極候義ニも無之、右地窪ニ候得者自然と増水いたし候義与相手方申候、今般ニ相成候而者水開不開之義者相分り兼、旦堰之義相手方ニ而者最初第六天脇より板堰掛可申ニ付、訴訟方兵助より対談之上、右板西村東村より借受シ置候所貸呉不申候ニ付、板堰之義者相止候得共、右対談致置候得者、堀筋者何方より掛候而も子細無事を以御訴訟方より一応之掛合も不及、壱丁余下り方之補理候義与相手方申候、訴訟方ニ而者、右板堰掛合之節兼而板懸候、年々用水引入ニ掛候堰板四枚之内壱弐枚掛候而も堰上之水溢不溢哉立会之上見ためし、溢候ハヽ即時取払可申事ニ而当組合より可談哉、相手方勝手侭ニ堰掛候義不相成旨及□□場所筵堰之対談いたし候義勿論無之旨申立、双方共無証拠ニ候得共、何れ堰掛候筋ニ無之殊更大水相湛片時を厭候時節迄者たとい一応致対談候共故障申断候ハヽ早速可取払所、堰掛置候段御出役様方御利解奉承知候而者□□入、旦堰取払之義度々申越候を□□兵助より致対談置候得も場所者、致相直候共可宣様心得□候も有之、出水防混乱中□□行違ニ相成候より事起り場所ニ相成候段、心得違之旨双方相弁□□□□橋下モ百姓半蔵脇土俵筋之義今般御出役様方奉□御見分候所〆切土俵一向不相見、右其砌外水防場所より相用候ニ地元ニて□□□右半蔵脇堀端より積置候所訴訟方へニても同所〆切候土俵と見請土俵而〆切候段申立候得共、掛合之上〆切候ニ無之外水防場ニ而相用候ニ横置候段相分り旦相手方古田者有高場故先般之防方ニ而水難相遁レ笠原沼耕地之義者致水腐候得共、右場所者百間領まで低場故少雨ニ而も内水相湛、当秋者稀成大雨ニ付相手方ニ而筵堰不及候とも水損可遁様無御座、併堰留いたし候故堀筋水嵩も相増堰溢上候様成行候間、以来之義右堀筋悪水之義ニ付而者於々仕来り通り相守り堰掛候義決て不仕、旦小前よりも不洩様申聞、違失心得違等為仕間敷候、尤以来大雨出水之砌者双方申合何れニも御田地相続ニ相成候様対談いたし都而手侭之取計致間敷候筈、其外再談□行□合引返義者扱人貴請双方年中分内済仕、偏　御威光より難有仕合奉存候、然上者右一件ニ付双方より重而御願ヶ間敷義毛頭無御座、為後日済口証文奉差上候所仍而如件、

文政十二丑年九月

前書之趣を以一件内済いたし候ニ付、違変無之ため仮議定いたし置候尤御出役様方より入御扱見字様不揃候所御加筆御座候共双方共違論申間敷候、為其仮議定書之通認訴□□壱通り□為所替扱人壱通所持いたし候、以上、

丑九月廿七日

訴訟人
須賀村
兵助㊞

立会人
中嶋村
文次郎㊞

相手方
百間村源太左衛門外四人代兼
百間村
斧七㊞
百間西原村
七平㊞
百間金谷原村
佐吉㊞
扱人
杉戸宿小左衛門代兼
百間東村
源七㊞

●天保五年　田方植付証文（百間中島岩崎家文書　№２８７４）

差上申田方植付證文
見沼用水路組合
高百三拾弐石五斗壱舛九合　武州埼玉郡
此反別拾六町壱反三畝廿一歩　中嶋村
内
高弐拾弐石四斗六舛三合　山田茂左衛門
反別弐町六反七畝歩　御代官所
高百拾石五舛六合　池田甲斐守
反別拾三町四反六畝廿一歩　知行所
右者私共村方田方植付之儀当月七日より植初〆同月廿日迄書面之反別不残植付相済一同難有仕合奉存候依之植付證文差上申所如件
池田甲斐守知行所
天保五午五月　中嶋村
名主　文次郎
組頭　清次郎
百姓代　吉左衛門

●天保六年　中島関枠諸色入用受取覚（百間中島岩崎家文書　№２８６５）

用水御掛
御役人中様

覚
一永四貫弐百三拾壱文八分　百間村
一永三貫六百拾五文壱分　蓮谷村
右者当村地内関枠伏替ニ付諸色入用書面之通、慥ニ受取申候以上
天保六未年　池田甲斐守知行所
四月　武州埼玉郡
中嶋村
名主文次郎

堀田備中守様御領分
同州同郡
百間村
蓮谷村
右両村
御名主中

●天保九年　除堀分水模様替不用願（東粂原岡安家文書　№７１３）

（端裏書）
「黒沼御模様替御普請役様より被仰渡候ニ付
組合一同難渋ニ付奉行所江歎願書写」

（表紙）
「　　如此認メ差上候処、笠原与逆井ヲ分ヶ弐冊ニ相認候上ハ何如様被
　　仰付尚又認等別帳差上候
　　明細帳控

埼玉郡
　笠原
　逆井
　中島村新田　」

一高弐拾弐石四斗六升三合　武蔵国埼玉郡
　笠原
　　中島村新田
　　皆田
此反別弐町六反七畝歩
　此訳
高六石三斗壱升　　上下田六反三畝三歩　　十
高七石三斗壱升七合　　中田八反壱畝九歩　　九
高三石五斗七升六合　　中下田四反四畝廿七歩　　八
高四石壱斗弐合　　下田五反八畝廿八歩　　七
高壱石壱斗五升八合　　下々田壱反九畝九歩　　六
取米拾壱石六斗壱升壱合　　定免切替
　内米五合　　去申増
外

武州埼玉郡笠原沼代用水路組合之内拾六ヶ村惣代池田加賀守知行所同郡須賀村名主浅右衛門奉申上候、私共組合用水路之儀者星川口戸ヶ崎村地内字中嶋圦ニ而、御用水路笠原沼用水路組合共拾六ヶ村持高弐万石余「　」場所関保之儀、御用水井筋御定式御掛リ場ニ而流末迄凡道法五里余之由御用水引来リ相続罷在候処、当戌拾月中御普請御掛リ様御目論見御廻村之節村々役人共へ被仰渡□□、戌春御改□御役人様方右井筋同郡除堀村地内□□黒沼笠原沼江分水相成之場所黒沼圦樋之□横巾四尺高三尺五寸之圦樋ヲ以御用水引来リ候、笠原沼御用水之義者横巾二間之関枠ニて引来リ申候、黒沼笠原沼用水共右笠原井筋ニ居置之関枠ニ而従来□□御差配リ□□□又去ル拾弐ヶ年以前文政拾亥年中黒沼圦樋関枠江御模様替被　仰出候ニ付、其節御普請御掛リ様江難渋之始末御歎願奉申上候処願之通リ御居置被成、下組合村々難有仕合ニ奉存相続仕□□処、尚又今般黒沼圦樋御模様替御座候段被仰渡奉驚入候間、是迄之通御居置被成下度段笠原沼組合一同御歎願申上候得共、御取用ニ難相成段被仰渡寔ニ以難義至極仕候間、組合村々役人共御普請御掛リ様御普請御猶豫奉願上、銘々村方江引取下置候処□様得与□□候得共悲歎ニ罷在ニ役人共より□□も何共難儀至極仕候、一躰笠原沼井筋之義数ケ所圦樋・掛渡井・伏越樋・関枠・水門都合四ヶ所有之候故、年々流末村々江御用水行届キ不申田方苗代より仕付ニ至リ候、「　」用迄ニハ丸七日も照続候節度々村役人共人足ヲ遣昼夜見廻リ、其上御普請様御掛リ様江御用水御差配リ願出候義者数ケ所有之、第一田方植付並麦作「　」之節人足等多分相掛、不問昼夜一同出精致「　」勝ニて麦作等多分有之候義ニも先達而黒沼圦樋模様替相成候而者用水不足ニ相成候義者、歴然御田地相続難相成何共難儀至極仕候間不得止事出府御歎願奉申上候、何卒格別之以御慈悲「　」黒沼圦樋之儀従来之通リ御居置被成下置度奉願上候、右願上之通御聞済被成下候ハヽ一同□□難有仕合ニ奉存候、以上

天保九戌年

●天保十年　笠原沼百間中島村新田・逆井百間中島村新田明細帳（百間中島岩

一永　九文　　野銭
　此払　壱反八畝拾五歩
　米拾壱石六斗壱升壱合
納合
　永九文
右ハ明細帳御尋ニ付奉書上候処相違無御座候
　池田加賀守知行所
天保十亥年四月　武蔵国埼玉郡
　中嶋村
　名主兼帯
山田茂左衛門様　文次郎
　元御役所　清二郎
　又右衛門

武蔵国埼玉郡
　逆井中嶋村新田
一高四拾石四斗三升八合
　此反別五町弐反壱畝拾歩
　此訳
田高三拾四石八斗五升弐合
　此反別三町九反三畝廿四歩
畑高五石五斗八升六合
　此反別壱町弐反七畝廿四歩
　内訳ケ
高三拾石壱斗三升弐合
　中田三町三反四畝廿四歩　九
高四石七斗弐升
　中下田五反九畝歩　八
高五石五升
　中畑壱町壱畝歩
高五斗三升六合
　林畑弐反六畝廿四歩
　米拾四石五斗弐升四合　定免切替
取　内八合　申増
　永七百七拾六文三分
　内弐拾五文三分　去丑年
　免直増
一御廻米津出　矢畑河岸迄村方より
　道法三里
一江戸日本橋迄　村方より
　道法拾里
一江戸之方　村方より
　辰巳ニ当
一笠原沼囲堤　御年切
　御普請所
一笠原代用水組合　御用
　御普請所
一無民家
右者明細帳御尋ニ付奉書上候処、相違無御座候以上
　池田加賀守知行所
天保十亥年四月　武州埼玉郡中嶋村新田
　名主兼帯
　文次郎
　組頭
　清次郎
　百姓代
　又右衛門
山田茂左衛門様
　元御役所　是ハ□□連印

三役人中無し

（裏表紙）

御年まし八井
逆井［　　］
弐斗五升壱合八夕

●天保十年　笠原沼百間西原組新田明細帳（百間西原新井家文書　№３５６７―１）

（表紙）
「　明細帳
武州埼玉郡
笠原沼
百間西原組新田　」

覚

未年より当亥迄五ヶ年定免　武州埼玉郡
笠原沼
百間西原組新田
一高拾弐石弐斗五升弐合　皆田
此反別壱町八反拾五歩　不作引
同　四反九セ三分
此訳
高壱石六斗弐升
中田壱反八セ歩
内四セ廿七歩　不作引
残　壱反三セ三歩
高四石弐斗弐升四合
中之下田五反弐セ弐拾四歩　八
内壱反四セ拾三歩　不作引
残三反八セ拾壱歩
高弐石九斗八升弐合
下田四反弐セ拾八歩
内壱反壱セ拾八歩　不作引
残三反壱セ歩
高四石弐升六合
下々田六反七セ三歩
内壱反八セ五歩　不作引
残四反八セ廿八歩
反別合壱町八反拾五歩
但反ニ五斗取
取米六石五斗八升八合
内米三合　定免切新田
外　未年ニ増
一永弐拾壱文　秣野銭
此反別四反壱セ廿四歩
米六石五斗八升八合
納合
永弐拾壱文
一御廻米津出シ　矢畑久右衛門河岸迄
一江戸日本橋迄　村方より道法三里
一江戸方　村方より道法拾里
一笠原沼囲堤　村方より辰巳ニ当
一笠原沼落堀組合　御年切御普請所
一笠原沼代用水組合　御入用御普請所
一社地

無御座候

除地

一無民家

右者明細帳御尋ニ付書上候通、相違無御座候以上

森川下総守知行所

武州埼玉郡

百間村

名主兼帯

清兵衛㊞

組頭

四郎左衛門㊞

百姓代

勘次郎㊞

山田茂左衛門様

元御役所

天保拾亥年

四月

●天保十年　下ノ谷百間西原組新田明細帳（百間西原新井家文書　№３５６７―２）

（表紙）

「　明細帳

武州埼玉郡

下ノ谷

百間西原組新田　」

覚

未より当亥迄五ヶ年定免

武州埼玉郡

下之谷

百間西原組新田

一高四拾六石弐斗三升八合

此反別拾壱町四セ拾弐歩

此訳

田高四斗三升三合

此反別一反十八歩

畑高四拾五石八斗□合

此反別拾町九反三セ廿四歩

此訳

高五升弐合

下畑田成壱セ壱歩　五

高□八斗八升

下々畑田成九セ拾□□□　四

高拾石弐斗五升五合

下畑弐町五セ三□□□　五

高□拾五石□斗四升八合

下々畑八町八反八セ廿一歩　四

畑合拾町九反七セ廿四歩

反ニ六拾文

田合壱反拾八歩

反ニ五斗五升取

取　米五斗□升七合

内米壱合　定免切替未年□

永六貫五百九拾五文四分

一永弐拾五文壱分　秣野銭

此反別　四反五セ廿九歩

米五斗九升七合

納合

永六貫六百弐拾文五分

一御廻米津打出シ　矢畑久右衛門河岸迄

一江戸日本橋迄　　村方より道法三里
一江戸方　　村方より辰巳ニ当
　　御年切
十笠原沼囲地　　御普請所
　　御入用
十笠原落堀組合　　御普請所
十笠原沼代用水組合
一社地　無御座候
　除地
一無民家

右者明細帳御尋ニ付書上候通相違、無御座候以上

森川下総守知行所
武州埼玉郡
百間村
名主兼帯
清兵衛㊞
組頭
七　平㊞
百姓代
喜左衛門㊞

天保拾亥年
四月

山田茂左衛門様
元御役所

●天保十三年　羽生領葛西用水模様替御普請願（東粂原岡安家文書　№７１２）

乍恐以書付奉願上候

武州埼玉郡羽生領定式御普請組合七拾弐ヶ村之内、中下郷三拾三ヶ村同州同郡向川辺領拾三ヶ村合四拾六ヶ村惣代ヲ以奉申上候、右村々之儀者極々低場水難勝之村方故、年々水腐いたし追々葭真菰斗而已離散退転ニおよび次第ニ其所ニ罷成無是非□□□候、拾九ヶ年已前、天保四巳年権現堂川逆水除門樋幸手領八甫村江凡千間余リ水下江相操下ケ被下置候へとも、水難難相遁天保十一子年悪水大落堀権現堂川落江瀬割御普請迄被成下候へ共、天明度浅間山焼□来追々□□川床□二相成悪水□兼、猶亦拾一ヶ年已前、天保十二丑年右二ヶ領之悪水葛西領拾ヶ領之用水江加水騎西領川口村地内江新規関枠御伏込御模様替被下置候処、存外悪水引落追々水難相遁れ大小之百姓相続罷在候処、右関枠二而者相保兼致二流失「　」方開閉も差支候間一「　　」長八間横拾二間高四尺□寸之圦樋御模様替後開閉別而行届キ水難相遁れ□無難ニ相続致迄ニも、川口村地内葛西新古両圦樋戸閉切り在之候者以前之姿ニ相戻候、旦夏秋葛西下領々ニ而者用水不足之年柄ニも川口村地内新古両圦下ヲ井筋附村々之儀者手近より用水取入候ニ□洩水過水等ニ而差支無之哉、「　」圦樋戸閉切候儀間ニ有之葛西領ニ用水不足之年柄も、川口村地内圦樋下より琵琶溜井迄之村々地先差支十分用水取込兼一同難ケ敷奉存、然ル処騎西領悪水落字六郷天王両落之儀右井筋□□被成下□□□下置候ハヽ地先差障ニも無之悪水□方宜敷可申与奉存候、川口村地内字古圦樋進退方等当村組合差縺れ罷在趣ニ承知仕右圦樋之儀私共村々ニ而進退可仕候間、何卒地頭御見分被成下双方弁理御田地相続仕御模様替被成下置候ハヽ弐ヶ領「　」落葛西領用水之□合蓋ニ罷成、両金之御主法与奉存候間右御模様替奉願上候、然ル上者樋類並新堀潰地等一式自普請ヲ以相仕立、御入用等之儀者不奉願上候間、右願之通御聞済被成下御模様替被仰付候ハヽ低場水難相遁れ大小之村々御田地相続仕莫大之御救助与難有仕合奉存候、以上

羽生領之内
中下郷三拾三ヶ村惣代
松平下総守領分
武州埼玉郡
樋遣川村
名主　重兵衛

酒井進三郎知行所
同州同郡
喜右衛門新田□
名主　喜右衛門
内藤鉢之丞知行所
同州同郡
中大越村
名主　宇之助
中根定之丞知行所
同州同郡
道木沼村
名主　〔　〕次
向川辺領拾三ヶ村惣代
竹垣三右衛門御代官所
同州同郡
中新井村
名主　幾右衛門
国井主斗知行所
同州同郡
平野村
名主　半蔵

御奉行所様

表紙
天保十四年
須賀村
渋谷埋圦樋普請仕様帳
粂原村

卯十一月　請負人
東粂原村
権次郎
高壱尺八寸
横弐尺

一悪水圦埋樋内法
長六間
此坪六坪
内両側三坪六歩
同早萱板弐坪四歩
男杭長五尺五寸　四本
笠木長三尺五寸　弐丁
外搦五ヶ所長三尺
内三尺三寸
同板五本
内搦五ヶ所長弐尺弐寸
拾本
杭木長壱丈　八本
同　長五尺廿七本

巾九寸
厚壱寸五分
巾壱尺
厚壱寸五分
四寸角
巾五寸
厚三寸
四寸角
五本
三尺
内三寸
巾四寸
末口四寸
同　三寸

梁木長九尺　同　四寸
内弐本　八尺
同　壱丈
早萱板拾弐間　□□割物
鳥根木長六尺　拾本末口四寸
内樋尻分　六本
同樋表　四本
一金五両弐朱也　普請出来金分
内
金壱両也　内金弐分　須賀村
金弐分　粂原村
手附金御渡申候
両村役人共立会迄
右仕様帳
但松地木　生物
悪材木とも場所迄引取駄賃まて見込之積、大工手間飯料書面之通両村役人とも立会之上相定申候

●弘化二年　笠原沼代用水通水ニ付廻状（百間折原家文書　No.６１６）

（包紙）
「　用水路年番
急廻状　百間村
清次郎
西原組始メ　」

以廻章得御意候、大暑之砌益各様方御平安被遊御勤役与賀□候、然者用水之義去ル十四日より引入之義、御掛様江御封印高岩村迄分水口相願ヲ以□通水ニ相成、右ニ付諸入用も相懸り御相談之上割合申度、六月廿日五ツ時詰中嶋村稲荷坊江向無御不参御出張奉願上候、尤入用高百石ニ付鐚四百文前後御持参ニ而御出金会奉願上候、此状剋附ヲ以早々御順達留り御村方江御返却可被下候、以上

百間村
清次郎

已六月十九日

辰之上刻出ス　西原組　辰下刻披見継立申候
金谷原組　同日拝見
西村　御達シ置□被下候
東村
中嶋村　［　］
蓮谷村
須賀村
爪田ヶ谷村
右御村々御名主中

●弘化三年　用水掛渡井関枠等御普請取替一札（東粂原岡安家文書　No.２１９）

為取替申合之事

一当村方之儀掛渡井・土橋・関枠等普請之儀、四拾四ヶ年以前享和三亥年出水之翌年銘々箇所訳ニ而、堀田様ニ而ハ字馬頭観音脇関枠壱ヶ所、細井様ニ而者字神明大橋与唱候土橋壱ヶ所、渥美様ニ而者字五丁掛渡井角前土橋弐ヶ所右之通御地所様方江御普請奉願上願之通り御普請被成下置候処、少破之内銘々持合ニ而年々修覆繕等仕来り候処、最早年来相立木品等朽腐及大破候処、当夏中稀成大出水ニ而一同流出仕此侭捨置候而者用悪水差支殊ニ人馬通路も相成兼難義至極罷有候、然ル処田畑皆損極難渋之年柄ニ而自分ニ難及候ニ付無□儀、今般給々一同相談之上前々之通御地頭所様方江御普請奉願上候間

願之通り被仰付候節ハ、諸入用並人足等ハ勿論其外御目論見出来栄御見分御出役様方御賄入用御目論見御下金ニ而御普請仕立不申候節ハ、足し金共是迄百姓役ニ而修覆繕等仕来り之振合ヲ以三給ニ而差出し可申候、勿論御年延又ハ御断被　仰付候御地頭所様□之候とも是又三給ニ而修覆繕等無油断可致、且又御普請被仰付候共以来少破之内修覆等又者掛渡井・関枠抜番人足等其外共是迄之通り都而三給ニ而可仕候、尤及大破候節ハ先般並ニ此節之振合ヲ以右ヶ所御地頭所様方へ情々御願立可仕候筈右御普請一条ニ付互ニ故障等一切無御座候、依之情々世話仕末々迄御田地永続ニ相成候様心掛ヶ可申候、仍而給々役人一同連印申合一札如件

弘化三丙午年　　渥美組
十月　　名主　丹蔵㊞
　　組頭　忠左衛門㊞
　　同　園吉㊞
　　百姓代　儀右衛門㊞
　　同　権次郎㊞
細井組
名主　幸十郎㊞
組頭　喜平太㊞
同　又五郎㊞
百姓代
与兵衛㊞
同　幸蔵㊞
佐倉組
名主　吉右衛門㊞
組頭　市右衛門㊞
同　三郎左衛門㊞
百姓代
要右衛門㊞

●弘化三年　逆井百間中島村新田年貢割付（百間中島岩崎家文書№１２８７）

（端裏書）
「　武蔵国埼玉郡
　逆井中島村新田　」

午御年貢可納割附之事
辰より丑迄拾ヶ年定免之内
当手破免　　武蔵国埼玉郡
　　逆井
　　中嶋村新田
一高四拾石四斗三升八合
　此反別五町弐反壱畝拾八歩
　　此訳
　田方三拾四石八斗五升弐合
　　此反別三町九反三畝廿四歩
　　当手皆無引

畑高五石五斗八升六合
此反別壱町弐反七畝廿四歩
内訳
中田三町三反四畝廿四歩　九
当手皆無引
中下田五反九畝歩　八
右同断引
中畑壱町壱畝歩　五
林畑弐反六畝廿四歩　弐
米なし
外米八石四斗三升四合　皆無
去巳成
取　外米拾四石五斗四升四合　定免辻成
永六百弐拾三文四分
外永百五拾弐文九分　水腐
去巳成

外
掛高五石五斗八升六合
外高三拾四石八斗五升弐合　田方五歩以上損毛高免除
一米三合　御伝馬宿入用
掛高
右同断
外高
一米壱升壱合　六尺給米
掛高
右同断
外高
一永拾四文　御蔵前入用
米壱升四合

納合
永六百三拾七文四分
右者当午御取箇書面之通候条村中
大小之百姓入作之もの迄不残立会無甲乙
割合之来ル極月十日限急度可令
皆済もの也

弘化三午年十一月　北條雄之助印

右村
名主
組頭
惣百姓

●弘化四年　大落堀藻刈受取覚（百間中島岩崎家文書　№８４６）

覚　五百七十壱文　藻刈之時節
一　永百八拾文壱分　此小壱百八拾八文
右者大落堀当夏藻刈中諸入用御掛り様御泊り助合共書面之通、慥ニ受取申候以上

未七月　大落惣代共㊞
中島村
御役人中

●嘉永元年　笠原沼新田絵図（百間中島岩崎家文書　№２８６５）



●嘉永元年　第六天関枠取替証文（百間中小島家文書　№３６）

（帯封）
「　下野田村地所
　　古証文
　　字第六天関枠為取替証文　」

為取替規定連印之事

黒沼笠原代用水路組合百間村・西村・東村、内郷用水為引取先年字第六天ニ而用水分水ニ相成候処、双方日割を以番水ニ引取来百間村井筋際ニ西村・東村用水為引取方関枠有候場所土症不宣、殊ニ年来相立難保候ニ付、去ル未年百間村井筋江引下ケ候処、先年逆井蓮谷村新田・平嶋外村より奉出訴論所御裁許ニ相成候場所ニ付難渋故障之間、平嶋・逆井外村より被及懸合、百間村より西・東両村江及懸合早速取払、猶又当申年伏込之道一同相談之上普請可相仕立筈之処、当五月朔日西・東両村用水差支ニ付、談事合も不行届百間村江届而已ニ而仕立方取懸り処平嶋組ト掛合も不仕、殊ニ順年之義も有之候ニ付、平嶋組外村々ニ而談合中得呉候様掛合仕候処、不得止口之普請出来仕候ニ付、平嶋・爪田谷笠原組村々より出訴ニも可申成義を扱人立入不行届段、扱人より右故障村々より及挨拶、猶又先規古形之場所へ持替いたし筈候処、土症悪鋪保兼候ニ付扱人より故障□□申入、先年為形男柱表より男柱表迄三尺相下ケ前後共長九尺之場所江関枠伏込可申筈候、是迄右関枠上ニ土橋壱ヶ所有候処左候而ハ保方不宣候ニ付橋巾丈ケ土橋際より相下ケ可申筈、左ニ候而者通路差支ニ付東村組下支配之地所巾壱間西・東両村ニて用水工手築出し人馬通路差支ニ不相成候様可仕筈ニ而示談行届候上者已来関枠模様替者勿論水行差障等、決而致間敷筈示談行届一同申分無之、依之規定連印、仍而如件

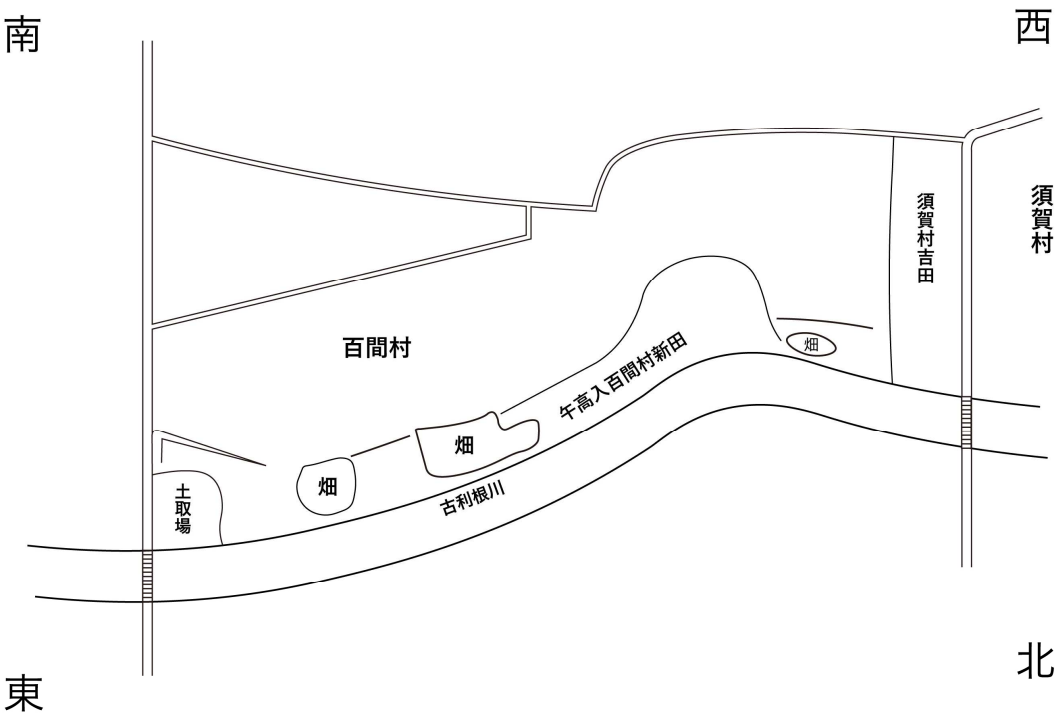
嘉永元申年五月　　東村
　　名主　吉五郎
　　西村
　　名主　新右衛門

爪田谷村
　組頭　勇松
逆井蓮谷村新田
　名主　藤左衛門
百間村
　組頭　浅右衛門
　名主　清次郎
同　佐次右衛門
同　四郎左衛門
同　源八郎

●嘉永二年　逆井百間村新田年貢割付（百間折原家文書　№５８８）

酉御年貢可納割附之事
申より戌迄三ヶ年之定免武蔵国埼玉郡
一高五拾九石六斗七升五合逆井
　此反別拾町八反八畝拾五歩　百間村新田
　　此訳
田高三石弐升四合六
　此下々田反別五反拾弐歩
畑高五拾六石六斗五升壱合
　此反別拾町三反八畝三歩
　　内訳
高六石壱斗弐升六合
　中畑壱町壱畝廿四歩　　七
高弐拾石三斗壱升弐合
　中下畑三町三反五畝六歩　六
高弐拾六石八斗四升五合
下畑五町三反六畝廿七歩　五
高弐石五斗六升八合
　下々畑六反四畝六歩　四
　　反永七拾文
　　去申同
　米弐石五斗四升六合
取　　去申同
　永七貫九百六拾壱文九歩
　外
一永弐拾壱文壱歩　　秣場銭
一米三舛六合　　御伝馬宿入用
一米壱斗壱舛九合　　六尺給米
一永百四拾九文弐歩　　御蔵前入用
　米弐石七斗壱合
納合
　永八貫百三拾弐文弐歩
右者、当酉定免御取箇書面之通相極条、村中大小之百姓入作もの迄不残立会無高下割合之、来ル極月十日限リ急度可令皆済もの也
　嘉永二酉年十月　竹垣三右衛門㊞
　　右村
　　名主
　　組頭
　　惣百姓

●嘉永四年　午高入百間村新田絵図（百間折原家文書　№３４８８）



右之田畑御改ニ付絵図面可差上旨被　仰渡候ニ付、麁絵図面奉差上処、相違無御座候以上

武州埼玉郡
午高入百間村新田
名主　清次郎㊞
与頭　兵左衛門㊞
地主　大寿院㊞

嘉永四亥年三月

竹垣三右衛門様
御役所

●嘉永六年　黒沼笠原沼代用水不用証文（百間折原家文書　№２９１）

（表紙）
「嘉永六年　黒沼笠原沼代用水組合　用水不用証文　丑八月」

差上申用水不用証文之事　当丑夏黒沼笠原沼代用水元中島圦組合私共村々田方用水為御差配被成御詰合用水之儀、苗代時節より御差配被成下養水迄行渡申候、一体当年之儀者稀成照続ニ而去子年より　茂下際元水不足仕候程ニ御差配難被成下置候ト、流末村々之内ニ者数日千割ニ相成候　場所も御座候ニ付、猶必死之御差配被成下置候ニ付、右場所ニ而此節養水引入相成組　合村々大小百姓一同難有仕合奉存候、然ル処最早不用時節相成候ニ付元水御差留メ相　成候而茂聊差支之儀無御座候、然ル上者御都合次第御場所被成御引き払候而茂用水之　儀ニ付□而御願ケ間敷儀無御座候、且御詰合中御取斗方何ニ而茂御非分ト奉存候儀毛　頭無御座候、依之組合村々連印を以用水不用証文差処上申如件

内藤外記知行所

武州埼玉郡三箇村　名主　米蔵㊞
組頭　彦七㊞
百姓代　忠兵衛㊞

一ツ橋領知
同州同郡除堀村　名主　彦右衛門㊞
組頭　銀蔵㊞
百姓代　只七㊞

望月新八郎御代官所
同州同郡青柳村　名主　重次郎㊞
組頭　久兵衛㊞
百姓代　与七㊞

平岡石見守知行所
同州同郡下早見村　名主　祐助㊞
組頭　佐平太㊞
百姓代　留五郎㊞

一ツ橋領知
同州同郡西粂原村　名主　小源次㊞
組頭　重次郎㊞
百姓代　惣太郎㊞

同領知
同州同郡上野田村　名主　多兵衛㊞
組頭　九兵衛㊞
百姓代　助右衛門㊞

天野愛之助知行所
同州同郡寺塚村　名主　祐輔㊞
組頭　幾右衛門㊞
百姓代　定右衛門㊞

川副勝太郎知行所
同州同郡白岡村　名主　藤内㊞
組頭　源左衛門㊞
百姓代　佐平太㊞

大岡兵庫頭領分
同州同郡千駄野村　名主　喜平㊞

組頭　磯右衛門㊞
百姓代　清左衛門㊞

渡辺□次郎知行所
同州同郡実ケ谷村
名主　□兵衛㊞
組頭　七五郎㊞
百姓代　友吉㊞

大岡兵庫頭領分
同州同郡岡泉村
名主　永之進㊞
組頭　作左衛門㊞
百姓代　庄蔵㊞

一ッ橋領知
同州同郡下野田村
名主　竹之助㊞
組頭　音吉㊞
百姓代　庄兵衛㊞

望月新八郎御代官所
堀田備中守領分
同州同郡百間村
名主　清次郎㊞
組頭　喜十郎㊞
百姓代　庄兵衛㊞

望月新八郎御代官所
小笠原主計知行所
同州同郡須賀村
名主　平蔵
組頭　礼次郎
百姓代　祐助

望月新八郎御代官所
永井兼之助知行所
同州同郡百間東村
名主代　組頭　武八
百姓代　清右衛門

望月新八郎御代官所
池田甲斐守知行所
同州同郡中島村
名主出府ニ付　組頭　吉左衛門
同　沖右衛門㊞
百姓代　又市㊞

池田甲斐守知行所
同州同郡西村
名主代　組頭　弥市右衛門㊞

百姓代　又左衛門

同御代官所
渥美九郎兵衛知行所
同州同郡東粂原村　名主　丹蔵㊞
組頭　忠左衛門㊞
百姓代　浅右衛門㊞

清水領地
同州同郡爪田ケ谷村　名主　新兵衛㊞
組頭　寅松㊞
百姓代　富蔵㊞

大岡兵庫頭領分
同州同郡増富村　組頭　常吉㊞
百姓代　林蔵㊞

堀金之助知行所
同州同郡鹿室村　組頭　和吉㊞
百姓代　茂吉㊞

望月新八郎御代官所
同州同郡表慈恩寺村　名主　太助㊞
組頭　園右衛門㊞
百姓代　武平次㊞

同御代官所
同州同郡藤助新田　名主　源之丞㊞
組頭　長蔵㊞
百姓代　源右衛門㊞

同御代官所
同州同郡道口蛭田村　名主　益太郎㊞
組頭　音次郎㊞
百姓代　兵蔵㊞

同御代官所
同州同郡上蛭田村　名主　喜平太㊞
組頭　喜兵衛㊞
百姓代　森右衛門㊞

同御代官所
同州同郡下蛭田村　名主　友之助㊞

組頭
孫左衛門㊞
百姓代
広次㊞

同御代官所
同州同郡中曽根村
年寄
小右衛門㊞
百姓代
庄右衛門㊞

同御代官所
同州同郡徳力村
組頭
忠八㊞
百姓代
和助㊞

同御代官所
同州同郡内牧村
名主
彦六㊞
年寄
文吉㊞
百姓代
彦七㊞

同御代官所
同州同郡吉郎兵衛新田 組頭
無藤次㊞
百姓代
傳七㊞

同御代官所
同州同郡九人組新田 組頭 富五郎㊞
百姓代
源蔵㊞

同御代官所
同州同郡小溝村
名主
武右衛門㊞
組頭
源兵衛㊞
百姓代
伊左衛門㊞

同御代官所
同州同郡新方袋村
年寄
孫左衛門㊞
組頭
甚蔵㊞
百姓代 兵右衛門㊞

同御代官所
同州同郡裏慈恩寺村 名主
東馬㊞
組頭
松五郎㊞
百姓代
定八㊞

同御代官所
同州同郡梅田村
年寄
清五郎㊞
百姓代
弥藤次㊞

松平下総守原村領分
同州同郡原村
名主
弥五郎㊞

組頭　忠次郎㊞
百姓代　藤左衛門㊞

一ツ橋領知
同州同郡河原井村　名主　長左衛門㊞
組頭　重蔵㊞
百姓代　庄蔵㊞

同領知
同州同郡台村　名主　重左衛門㊞
組頭　弥五郎㊞
百姓代　七平㊞

同領地
同州同郡上下高岩村　名主　善兵衛㊞
組頭　詰五郎㊞
百姓代　忠右衛門㊞

望月新八郎御代官所
堀田備中守領分
同州同郡蓮谷村　組頭　九郎次㊞
百姓代　豊次郎㊞

新井源八郎知行所
同州同郡野牛村　名主　英蔵印㊞
組頭　傳九郎㊞
百姓代　庄蔵㊞

一ツ橋領地
同州同郡太田袋村　名主　源之丞㊞
百姓代　常吉㊞

徳□富次郎知行所
同州同郡篠津村　組頭　久左衛門㊞
百姓代　清兵衛㊞

大岡兵庫頭領分
同州同郡樋ノ口村　名主　孫郎㊞
組頭　彦次郎㊞
百姓代　与市㊞

右村々組合惣代
内藤外記知行所
同州同郡三ケ村　名主　栄蔵

平岡石見守知行所
同州同郡小久喜村　名主　定右衛門㊞
渥美九郎兵衛知行所
同州同郡東粂原村　名主　丹蔵
堀田備中守領分
同州同郡百間村　名主　清次郎
望月新八郎御代官所
同州同郡梅田村　年番　清五郎

用水御掛り　御役人中様

●安政元年　西粂原分水箱樋普請廻状写（百間折原家文書　№６６９）

（包紙）
「折原清輔様其下　　新井四郎左衛門」
（包紙裏面）
「先達而被仰聞候、西久米原村地内圦樋繕普請入用割合廻帳之写、子細書記差上申候」

覚

〆金四両弐朱
銀百「　」
銭拾九貫八百八拾八文
為残五拾七貫五百三拾文
　此割高百石ニ付壱貫六百六拾文
村高六分　　東久米原村
一四貫二百六拾八文
村高六分　　須賀村
一八貫九百拾六文
　此外平均
一弐貫六百六拾九文　　爪田ヶ谷村
一三貫四拾五文　　上野田村
一壱貫八百「　」　　蓮谷村
一五貫六百廿「　」　　西久米原村
一五貫弐百拾九文　　百間本村
一五貫八百八拾三文　　金谷原村
一六貫四百「　」　　西原村
一六貫五百拾四文　　西村
一拾弐貫百七文　　東村

右者笠原井筋西久米原村地内分水圦樋板口柵其外大破ニ付、御村々見届相談之上地元役人立合普請取掛り仕立仕候間、板木鉄目大工手間其外諸入用一式取調勘定致候処、書面之通相違無御座候、別紙合「　」御披見之上御村々□り之分、右御苦労御持参御勘定奉願上候、以上

寅四月　　惣代
西村　弥一右衛門
東久米原村　吉右衛門
西久米原村　小源治

右之御名前ニ而廻帳達し御座候処、相違無御座候
四郎左衛門

本村御名主　清助様

●安政三年　中島村地内関枠仕用帳（百間中島岩崎家文書　№２３１７）

（表紙）
「　中嶋村地内関枠仕用帳
　　七ヶ村組合　」

関枠内法長九尺　横九尺　中嶋村地内
高六尺　壱ヶ所

右者、享保十三申年笠原沼御開発之節井澤弥惣兵衛様御掛リニ而新規伏込被仰付、其後御私領御出金相願度々伏替修復仕候処、天明八午年皆御入用ヲ以新規伏替被　仰付、其後尚亦御私領出金ニ而度々伏替被成下、其後近来之儀者、享和三亥年、文化五辰年、同十酉年、文政六未年、天保六未、弘化四未春伏替被下候処、当用水法急候ニ付、此度御願申上新規伏替仕候所、相違無御座候

一三坪壱合六夕　両側板
一弐坪三合三夕　前後土抱板
　敷板
一弐坪五合　前後扇板
一四坪弐合八夕　関板
一壱坪三合三夕　敷土金板
一四合　樋尻土抱板
一弐坪　左右羽金板
一壱坪　前後土抱板
一弐坪三合三夕
　右板坪合拾九坪三合三夕
　　右入用
尺〆三本一分三リン五毛　削立壱尺
一杉板拾弐枚　長九尺五寸　巾壱尺壱寸
　両側板
　此通挽七通八分四リン　厚三寸
尺〆壱本五分四リン　右同断
一同拾弐枚　長七尺　巾壱尺壱寸
　前後土抱板
　此通挽六通壱分六リン　厚弐寸
尺〆壱本六分五リン　右同断
一同九枚　長壱丈　巾壱尺
　敷板
　此通挽六通六分　厚弐寸
尺〆弐本八分弐リン　右同断
一同弐拾弐枚　長七尺　巾壱尺壱寸
　前後扇板
　此通挽□壱通弐分八リン　厚弐寸
尺〆壱本壱分　右同断
一同拾弐枚　長四尺　巾壱尺壱寸
　関板
　此通挽三通三分　厚弐寸五分
尺〆五分四リン二毛
一同木四本　長六尺五寸　五寸角　両側板
　此通挽壱通八分　削立七寸角
尺〆壱本四分四リン　八寸角　男柱
一同木三本　長九尺　削立壱尺
尺〆壱本九分弐リン　巾壱尺壱寸
一同板拾弐枚　長七尺　樋尻土抱板
　此通挽弐通七分八リン　厚弐寸五分
尺〆七分五リン　削立壱尺
一同板拾弐枚　長三尺　巾壱尺壱寸
　左右羽金板
　此通挽弐通八分七リン　厚弐寸五分
尺〆六分三厘　削立八寸六寸
一同木壱本　長壱丈弐尺　巾九寸
　笠木

此通挽　　厚七寸
一同板壱板　　削立壱尺
　　長壱丈弐尺　巾壱尺壱寸
　此通挽九分　　敷土金板
一松丸太壱本　　長弐間　末口壱尺弐寸枕土台
　此代永五百弐拾五文　　厚三寸
一同弐本　　長弐間　末口七寸五分前後土台
　此代永四百廿文　　但壱本ニ付
一同四本　　長弐間　末口七寸　堅土台
　此代永七百六拾文　　但壱本
一杉丸太拾弐本　　永百九拾文買
　此代永八百四拾六文　　長九尺　末口五寸　土抱杭木
　　同
一同拾弐本　　永七拾文五分ツヽ
　此代永六百廿四文　　長八尺　末口五寸　鳫控
一同壱本　　同
　此代永七拾七文　　永五拾弐文ツヽ
一同丸太三本　　長九尺　末口五寸　越中控
　此代永三百八拾四文　　長弐間　末口六寸　梁木
一同丸太拾五本　　同
　此代永百五文　　永百廿八文ツヽ
一古丸太拾五本　　長四尺　末口三寸　桟留杭
　　同
　　永七文ツヽ
　　長四尺　末口□寸　右同断

尺〆拾五本八分八リ七毛
小以　代永拾壱貫五百九拾七文五分
　外ニ永壱貫百五拾九文七分　当辰年
　合永拾弐貫七百五拾七文弐分　御増被下候
　丸太五拾四本
　代永三貫七百四拾壱文
一六本皆折釘百本
　七拾弐本　両側板拾弐枚壱枚六本打
　内弐拾四本　鳫控拾弐挺　壱挺弐本打
　四本　梁木弐本　壱本弐本打
　此鉄目弐貫五百目　壱本鉄目廿五匁
一五寸皆打三百拾本
　五拾四本　敷板九枚壱枚六本打
　内百四拾四本　土抱板三拾三枚壱枚四本打
　八拾八本　扇板廿弐枚壱枚四本打
　弐拾四本　左右羽金板拾弐枚壱枚弐本打
　此鉄目六貫弐百目　壱本鉄目弐拾匁
一弐寸釰弐拾四ツ関板拾弐枚壱枚弐ツ打
　此鉄目壱貫四百四拾目壱ツ六拾匁
一鎌拾弐挺　築木三本　壱本四本打
　鉄目合拾貫六百八拾三文四分
　此代永壱貫六百八拾三文四分
一大工六拾八人五分　　金壱両ニ付
　此代永弐貫四百四拾五文四分　廿八人
一木挽四拾六通五分壱厘　　金壱両ニ付
　此代永九百三拾三拾文弐分　五拾三通
　鉄目
　　合永五貫五拾九文
　賃永

一萱羽口　長五間　　樋表北側
　　高四尺
一同　　長三間　　樋表西側
　　高四尺
一同　　長弐間　　樋尻南側
　　高四尺
一同　　長弐間　　樋尻東側
　　高四尺
一同　　長四間　　樋尻東側
　　高四尺
一同　　長三間　　廻シ堀片貝田落敷上へ
　　高四尺
　羽口合拾五坪七合　　但シ壱坪五束ツヽ
　　五口縄
　野萱六拾三束半　　金壱分ニ付
　　代永壱貫五百八拾七文五分　　拾わツヽ
一葉唐竹百五拾弐本　　壱坪ニ付
　　代永三百四文　　拾弐本ツヽ
　　金壱両ニ付
　　五百本ツヽ
一葉直竹弐百五拾四本　　壱坪弐拾本ツヽ
　　同千百本買
　竹萱代永合弐貫百弐拾壱文六分
一堀割長延拾弐間　　平均横四尺五寸
　　深六尺
　此繕坪九坪　　但堀割築堅〆共
　　此人足三拾六人　　壱坪四人
一水廻シ堀割　馬踏弐間　深六尺上口弐間
　敷　三間　　下タ六尺
　此繕坪三坪七合五夕　　右同断
　　此人足拾五人
　長弐間弐ヶ所分　　平均横九尺
一仮〆切長延四間　　高六尺
　　此坪六坪
　　右入用
一明俵弐百八拾八俵　　但六俵並六尺置
　　表裏口廻し
一縄九拾六房　　但三俵ニ付
　　縄壱房ツヽ
一人足弐百五拾人九分
　内
　拾四人四分　　壱人ニ付七俵抱俵拵
　三拾人　　〆切取払壱坪ニ付
　　五人ツヽ
　三拾壱人五分　　大工手伝分
　弐拾人　　古木取払
　　新木取込共
　三拾弐人　　水替口口四人ツヽ
　　四日分
　五拾五人　　権現堂より材木
　　引取
　五拾壱人　　羽口仕立一式
　　壱坪三人
右之通り諸色人足積方一同立会取調候処
相違無御座候以上
　惣永弐拾三貫六百七拾八文八分
　　組合田反別四拾四町五反弐畝三分
　　此割　反付永五拾三文壱分八リ八毛

八町三反六畝四歩　堀田様御領分
一永四貫四百四拾八文　百間村
七町壱反六畝歩　同領分
一永三貫八百八文弐分　蓮谷村
五町四反〇三歩　森川様御分
一永弐貫八百七拾三文弐分　百間村之内　西原村
壱町六畝五畝壱歩　松波様御分
一永八百七拾八文弐分　同村之内　金谷原
五町六反五畝九歩　永井様御分
一永三貫九文九分　東村
四町七反八畝三歩　御知行所
一永弐貫五百四拾六文八分　中村
拾壱町四反九畝九歩　同
一永六貫百拾四文三分　中嶋村
右之通御普請被　仰付依之村々
役人共立合割合仕奉差上候以上
安政三辰年二月　地元
中嶋村
名主　文次郎㊞
組頭　吉左衛門㊞
百姓代　又市㊞

●安政四年　午高入百間西原村新田年貢減免願（百間西原新井家文書№２０９０）

午恐以書付奉願上候
当御支配所武州埼玉郡午高入百間西原村新田名主組頭百姓代一同奉申上候、当御新田之儀者、御定免場ニ御座候得共、当田方之儀者植付後より度々大雨ニ而稲竹水応ニ相成居水腐仕候間、御定免年季中所御検見奉願上候者奉恐入候得共無拠前書之通ニ付、当壱ヶ年御検見入奉願上候間、何卒格別之以御慈悲御検見入被下成置度奉願上候、右願之通り仰付被下候ハゝ一同相助幾重ニも難有仕合ニ奉存候以上
武州埼玉郡
午高入百間西原村新田
百姓代　七郎右衛門
組頭　源次郎
名主　四郎左衛門

●安政五年　和戸村新田年貢割付（和戸小島家文書　№４２４）

午御年貢可納割附之事
検見取　武蔵国埼玉郡
一高拾四石七斗五升　和戸村新田
此反別四町七反六畝廿四歩
此訳
田高弐石三斗弐升九合
此反別七反六畝拾五歩
去巳より続皆無引
高九斗壱升五合
下田壱反八畝九歩　五
去巳より続皆無引

高壱石弐斗四升八合
　下々田四反壱畝拾八歩　　三
　　右同断引
高壱斗六升六合
　見付田壱反六畝拾八歩　　壱
　　右同断引
畑高拾弐石四斗弐升壱合
此反別四町九歩
　此取永弐貫四百六拾九文壱分
　　去巳同
　内訳
高八石六斗弐升八合
　下畑弐町壱反五畝廿壱歩　　四
高三石三斗三升四合
　下々畑壱町六反六畝廿壱歩　　弐
高壱斗三升九合
　見付畑壱反三畝廿七歩　　壱
高三斗弐升
　屋敷四畝歩　　八
　　外
掛高拾弐石四斗弐升壱合
　外高弐石三斗弐升九合　田高皆損毛当午壱ヶ年免除
一　米七合　　御伝馬宿入用
掛高　　右同断
外高
一　米弐升五合　　六尺給米
掛高
　右同断
外高
一　永三拾壱文壱分　御蔵前入用
　米三升弐合
　納合
　永弐貫五百文弐分
右者、当午御取箇書面之通相極条、村中大小之百姓入作之もの迄不残立会無高下割合之、来ル極月十日急度可令皆済もの也

安政五年十月　川上金吾助㊞

右村
名主
組頭
惣百姓

●安政六年　上野田伏越樋伏替願（百間折原家文書　№６０８）

乍恐以書付奉願上候
六ヶ村組合　　高弐尺
一　笠原用水路伏越樋長六間内法　　五寸壱ヶ所右者一ッ橋様御領知
　　横六尺
武州埼玉郡上野田村地内御普請所之儀者笠原沼新田御開発之節井沢弥惣兵衛様御掛リニ而新規伏込樋御料私料高割ヲ以御普請被仰付其後御入用ヲ以伏替御普請並御料私料高割ヲ以度々伏替被仰付去ル十四ヶ年以前弘化三酉年春敷用御普請被来下置候処木品朽腐洗流ニ相成迚も繕御普請ニ而者難相伺来ル申春用水法兼候間右場所御見分被遊新規皆御普請御目論被成下置度奉願上候間右願之通御聞済被成下置候ハハ難有仕合奉存候以上
　右六ヶ村組合惣代
　堀田鴻之丞領分

武州埼玉郡百間村
安政六未年十月　名主　清輔
池田甲斐守知行所
当領御掛り　同州同郡百間西村
組頭　弥市右衛門
御役人中様

●慶応元年　大落堀縁刈ニ付廻状（百間中島岩崎家文書　№１４３６）

（包紙）
「　急廻文
杉戸宿始メ　大落堀
惣代共　」

尚々申上候両縁リ生芝候草木刈佛候様被仰付候、地先之もの江御申付可被成候、以上

以廻文得御意候、弥差□御座候得とも弥五郎様方御壮健御勤役ニ被遊候由奉喜□候、然者大落堀縁苅被仰付候ニ付相触候処、今日御見分被遊候処、手入無之場所多分有之、厳重ニ被仰付候間、地先之もの江御申付早々実施ニ刈拂可被成候、此廻文早々御順達留村より御返し可被成候以上
丑七月廿六日　右堀
惣代共㊞
杉戸宿㊞　丑七月廿六日右中［　］
清地村㊞
堤根村㊞
本郷村㊞
小渕村㊞
八丁目村㊞
粕壁宿㊞
梅田村㊞
内牧村㊞
東村㊞
西村
中嶌村
百間村㊞
右村々
御名主中

●慶応元年　下ノ谷百間西原組新田年貢割付（百間西原新井家文書　№５５９９）

（端裏書）
「　武蔵国埼玉郡
下之谷
百間西原組新田」

丑御年貢可納割附之事
武蔵国埼玉郡
下之谷
百間西原組新田
子より辰迄五ヶ年定免
一高四拾六石弐斗三升八合
此反別拾壱町四畝拾弐歩
此訳
田高六斗壱升壱合
此反別壱反五畝歩
此取米六斗九升壱合

●慶応元年　笠原沼百間西原組新田年貢割付（百間西原新井家文書№５６１５）

（端裏書）
「　武蔵国埼玉郡
笠原沼
百間西原組新田　」

丑御年貢可納割附之事

検見取　武蔵国埼玉郡
笠原沼
百間西原組新田

一高拾弐石八斗五升弐合　□□皆田
此反別壱町八反拾五歩
□□より□
内高三石ニ付八合　当　水腐□□無引
此反別五反五畝四歩
残高九石五斗四升□□
此反別□□□□歩
此取米弐石三斗五升□合

検見
内米壱石弐斗□升弐合　去子増
内訳
中田壱反八畝歩　九
中ノ下田五反弐畝廿四歩　八
下田四反弐畝拾八歩　七
下々田六反七畝三歩　六
□□□□
残五反五畝四升　当丑水腐□□皆無引
残壱反壱畝廿九歩
外
去同
内訳
下畑田成壱畝三歩　五
下々畑田成壱反三畝廿七歩　四
畑高四拾五石六斗弐升七合
此反別拾町八反九畝拾弐歩
此取永六貫五百七拾五文
去同
内訳
下畑弐町五畝三歩　五
取永六拾文六分
下畑八町八反四畝九歩　四
外
一永弐拾五文壱分　秣野銭
一米弐升八合　御伝馬宿入用
一米九升弐合　六尺給米
一永百拾五文六分　御蔵前入用
納合
米八斗壱升壱合
永六貫七百拾五文七分
右者、当丑御取箇書面之通相極条、村中大小之百姓入作之もの迄無残立会無甲乙割合之、来ル極月十日限、急度可令皆済者也
慶応元丑年十月　今川要作㊞

右村
名主
組頭
惣百姓

一永弐拾壱文　　野銭
　此反別四反壱畝廿四歩　　御伝馬入用
一米八合　　六尺給米
一米弐升六合　　御蔵前入用
一永三拾弐文壱分
　　米弐石三斗九升
　納合
　　永五拾三文壱分
右者、当丑御取箇書面之通相極条、村中大小之百姓入作之もの迄不残立会無甲乙割合之、来ル極月十日限、急度可令皆済者也
　慶応元丑年十月　今川要作㊞

右村
　名主
　組頭
　惣百姓

●慶応元年　午高入百間西原村新田年貢割付（百間西原新井家文書№５６１２）

（端裏書）
「武州埼玉郡
　午高入
　百間西原村新田」

丑御年貢割付之事

検見取　　武蔵国埼玉郡
一高七高三斗七升九合　　午高入
　此反別壱町七石八畝廿壱歩　　百間西原村新田
　此訳
田高壱石五斗八升八合
　此反別三反三畝六歩
　　此取米壱石四斗一升四合
　　去子より続
　　当丑水腐検見引
　内訳
下々田弐反六畝歩　　五
　去子より続
　当丑水腐皆無引
見付田七畝六歩　　四
　右同断引
畑高五石七斗九升壱合
　此反別壱町四反五畝拾五歩
　　此取永七百文三分
　　去同
　内訳
下畑三反壱畝拾歩　　五
　反永四拾九文三分
下ノ下畑五反三畝歩　　四
　反永同断
見付畑五反壱畝廿七歩　　三
　反永同断
屋敷三畝三歩　　九
　反永同断
　外
懸高［　］升壱合

外高壱石五斗八升八合　田高皆続□当丑□□免除
一米三合　御伝馬宿入用
懸高　右同断
外高
一米壱升二合　六尺給米
懸高　右同断
外高
一永拾□文□分　御蔵前入用
一真菰地六畝九歩　五ヶ所
　米壱石□斗壱升五合
納合
　永七百拾四文八分
右者、当丑御取箇書面之通相極条、村中大小之百姓入作之者迄不残立会無甲乙割合之、来極一月十日限、急度可令皆済者也
　慶応元丑年十月　今川要作㊞
　　右村
　　名主
　　組頭
　　惣百姓

●慶応三年　上野田掛渡井御普請出来形帳（百間折原家文書　№２６３）

（表紙）
「　上野田村地内
　六ヶ村組合
　笠原沼代用水路掛渡井御普請出来形帳　」

　　武州埼玉郡
　　上野田村地内
六ヶ村組合
字爪田谷堀
一用水掛渡井長六間　内法　横壱間　敷用掛替
　高三尺　壱ヶ所
是者前々より御普請所ニ而度々掛替被仰付、九ヶ年已然安政六未年出□用掛替被仰付候処、両側板朽損腐候繕ヲ以漸く用水引取候得共、惣体木品朽腐用水差支古木取交り、当卯春敷用掛替被仰付候
　此板坪　九坪　内　七坪　新板坪
　　弐坪　古板坪
　内
　　六坪　長六仆　両側板坪　新板
　　高壱尺　前後両袖
　壱坪　長三尺　土貫板坪　古板
　　高壱尺　樋尻左右
　壱坪　長六尺　土抱板坪　同板
　　高三尺　樋表左右
　壱坪　長六尺　同　板坪　新板
　　右入用
尺〆六本四分三厘五毛
一松板拾八枚　長壱丈三尺　巾壱尺壱寸　両側板
　此通挽拾四通三歩　部　三寸
杉丸太拾六本　長三尺五寸　末口四寸　同短木
　代永弐百弐拾四文三分
　　但長弐間末口四寸定直段
　　壱本代永五拾五文より尺〆壱割引
一ツ橋御領知

壱本永拾四文弐厘

尺〆六分五厘三毛
松木四本　長四尺　削立六寸角　男柱
七寸角
尺〆六分四厘
同木弐挺　長八尺　削立七寸
五寸　笠木
巾　八寸
部　六寸
松丸太拾本　長五尺　末口四寸　外桁木
但長弐間末口四寸定直段
壱本代永五拾五文より尺〆壱割引
壱本永弐拾文六分五厘
杉丸太四本　長平均九尺五寸　右梁木
代永弐百五拾六文五分　長弐間末口四寸定直段
内　弐本　長八尺五寸　中　但壱本代永九拾文より尺〆壱割引
弐本　長壱丈五寸手先　壱本永六拾四文壱分弐厘
古板拾弐枚　長三尺　巾壱尺　前後両袖
部弐寸　土重板
同木四本　長三尺五寸　末口三寸　右抱杭
材木尺〆八本三分弐厘八毛
代永四貫百六拾四文　尺〆壱本
小以　但
永五百文
永九百三拾弐文四分　丸太代
四寸皆打釘四拾六本　壱本　鉄目
但
拾五本
此鉄目六百九拾本
外弐拾六本　古釘用

内　四拾八本　前後左右土抱板壱枚四本打拾弐枚分
弐拾四本　同両袖土重板壱枚弐本打　右同断
六寸皆打釘百本　壱本　鉄目
但
弐拾五本
此鉄目弐貫五百本
外弐拾本　古釘用
内　七拾弐本　両側板壱枚四本打拾八枚分
弐拾八本　側短木土抱梁木壱本四本打
弐拾本　外桁梁木壱本四本打五本分
六寸平落釘九拾弐本　但同断
此鉄目弐貫三百本
外拾六本　古釘用
□ハ両側板壱枚六本打拾八枚分
合鉄目五貫四百九拾本　金壱両ニ付
但
代永壱貫百八拾文六分　四貫六百弐拾永
大工弐拾五人　同
但
賃永九百八拾八文三分　弐拾五人三分
内　弐拾壱人　新板壱坪壱人
四　人　古板壱坪弐人
木挽拾六通分　同
但
賃永弐百六拾六文三分　六拾弐通七分
槙皮百弐拾間　拾間ニ付
但
代永百八文　代永九文
是ハ両側板割目板長六間ツゝ敷板付共六通長延三拾六間
同継手三尺ツゝ前後男柱付共八通長延四間合四拾間三筋打

小以永弐貫五百五拾文弐分
右掛方
川中弐間ツヽ有之
両側板脇土抱板之内共六間ツヽ
一堀割長延拾弐間　横壱間
平均
深三尺
此口坪拾弐坪　堀割築堅足土共
人足三拾六人　但
壱坪三人
用水堀口板長九尺ツヽ
悪水堀　同弐間ツヽ
一仮〆切長延七間　横壱間
平均
高四尺
此坪四坪七合
右入用
明俵三百三拾六俵　間ニ六俵前四重
但
表裏共
縄百拾弐房　土俵三俵ニ付
人足百八拾壱人　但
壱房
内
拾七人　土俵壱人弐拾俵拵
拾四人　〆切口口取払壱坪三人
弐拾五人　大工手伝壱人
拾七人　古木取払新木持縣尺〆壱本
六拾四人　水替桶弐挺手代り共屋根六人ツヽ四日分
四拾四人　材木引取御普請所迄往通四里
尺〆壱本八人ツヽ一日六里歩行
前後左右土抱板先壱間ツヽ
一茅羽口長延四間　横壱間
平均
高四尺
内高三尺羽口
此坪弐坪七合　内弐坪羽口坪
右入用
埜茅　拾束　但羽口壱坪五束
葉唐竹弐拾四本　同　拾弐本
葉直竹四拾本　同　弐拾本
人足八人　但土取壱丁壱坪三人
羽口仕立方
組合高弐千弐百弐拾四石九斗七夕弐才
小以永七貫六百四拾七文壱分　高百石ニ付
但
永三百四拾三文七分五厘ニ三八
此訳ヶ
高弐百拾四石三斗九升三合　御料
永七百三拾六文九分
高弐千拾石五斗七合七夕弐才　私領
永六貫九百拾文弐分
小以金弐万分　永弐百三拾六文九分　御入用
外
金六両三万分　永百弐拾文弐分　私領出金
是ハ御取替金相成候分

午高入
百間西原村新田」

卯御年貢割付之事

検見取
一高七高三斗七升九合　午高入
此反別壱町七石八畝廿壱歩　百間西原村新田
此訳
田高壱石五斗八升八合
此反別三反三畝六歩
此取米壱石四斗一升四合
検見
去寅皆増

内訳
高壱石三斗
下々田弐反六畝歩　五
高弐斗四升八合
見付田七畝六歩　四
畑高五石七斗九升壱合
此反別壱町四反五畝拾五歩
此取永七百文三分
去寅同

内訳
高壱石七斗七升五合
下畑三反壱畝拾歩
反永四拾五文三分
高弐石壱斗四升
下ノ下畑五反三畝歩　四
反永同断

垜萱拾束
葉唐竹弐拾四本　組合
葉直竹四拾本　百姓役
明俵三百三拾六俵
縄百拾弐房
人足弐百弐拾五人
右者、当卯春笠原沼代用水路六ヶ村組合武州埼玉郡上野田村地内掛渡井敷用掛替御普請被仰付、二月上旬より御取掛り御仕立中御附居私者日々御場所より相詰御差図奉請、此節迄ニ御仕用帳之通、双夫ニ皆出来御見分相済且古木品御用立御分御遣払朽損御分御見捨ニ相成申候、已来御場所無油断見廻り、若過崩等出来候ハヽ小破之内取繕大破不相成様可仕旨被仰聞承、尤奉畏候已来御普請筋之儀ニ付御願ヶ間敷義毛頭無御座候、組合村々一同難有仕合奉存候、依之出来形印形差上申処如件
慶応三卯年三月　笠原沼代用水路六ヶ村惣代
堀田相模守領分
武州埼玉郡百間村
名主
清輔㊞

御普請御掛り
御役人中様
右通出来形相違無之候以上
卯　御普請役
三月　高原鉎之助㊞

●慶応三年　午高入百間西原村新田年貢割付（百間西原組関係文書№１６）

（端裏書）
「武州埼玉郡

高壱石六斗壱升七合
　見付畑五反壱畝廿七歩　三
　　反永同断
高四斗七升九合　　九
　屋敷三畝三歩　反永同断
外
一米四合　御伝馬宿入用
一米壱升五合　六尺給米
一永拾八文四分　御蔵前入用
一真菰地六畝九歩　五ヶ所
　米壱石四斗三升三合
納合
　永七百拾八文七分
右者、当卯御取箇書面之通相極条、村中大小之百姓入作之もの迄不残立会無甲乙割合之、来極一月十日限、急度可令皆済もの也
慶応三卯年十月　小笠原甫三郎㊞
　右村
　名主
　組頭
　惣百姓

●慶応三年　百間中村新田年貢割付（百間折原家文書№５４５）

（端裏書）
「　武蔵国埼玉郡
　百間中村新田　」
卯御年貢割附之事
戌より寅迄五ヶ年定免
一高五石八斗六升九合　武蔵国埼玉郡
　此反別壱町壱反三畝歩　百間中村新田
納合　米□□□□升弐合
　永六百九拾七文□分
右者、当卯御取箇去寅年与増減無之書面之通候条得其意村中之百姓無甲乙割合之、来ル極月十日限、急度可令皆済もの也
慶応三卯年十月　小笠原甫三郎印
　右村
　名主
　組頭
　惣百姓

●慶応四年　中島関枠普請願（百間中島岩崎家文書　№２７６５）

乍恐以書付奉願上候
笠原沼用水井路七ヶ村組合御知行所中嶋村地内関枠壱ヶ所、去安政三辰年伏替被仰付候処、年来相立不残朽損相保兼候間、当辰春皆新規御普請被　仰付被下置度、一同以連印奉願上候以上
慶応四辰年
堀田様御領分
同　領分
森川様御知行所
松波様御知行所
永井様御知行所
池田様御知行所

同　御知行所

●年未詳　騎西領七拾八ヶ村組合古利根川幅切広並渕浚普請願書絵図（百間折原家文書　No.３５０５）

（一部）
粕壁橋下御定杭迄
長三千五百三間半川幅弐拾五間
（一部）
此度川幅切広並渕浚御普請奉願候ニ付、麁絵図面奉差上候以上
騎西領七拾八ヶ村組合
字大落古利根川惣代
清水領地
武州埼玉郡久喜本町
名主　伊右衛門
黒田豊前守領分
同州同郡水深村
名主　小膳
島田洋正知行所
同州同郡葛梅村
名主　太兵衛
嶋田弾正知行所
同州同郡久喜新町
名主　市右衛門

●年未詳　小沼掛渡井伏替御普請諸色入用書上（百間中島岩崎家文書　No.３００３）

覚
文化三丙寅年見分之上普請材木諸式代永之高
一永四貫百拾五文九分
高合廿八石壱舛弐合七夕　用水掛高
但高壱石ニ付
永百四拾六文九分三厘
内
永壱貫百四拾文七分六厘五毛　中嶋村
此高七石七斗六舛四合
文化十二乙亥年見分之上普請材木諸式代永〆
一永右同断　右同断
高右同断
内
永右同断
高石同断
文政十一子年百姓役ニ而普請材木諸式入用〆
一銭廿貫七百八拾六文　此割高壱石ニ付
七百四拾壱文五分
銭五貫七百五拾七文　中嶋村
同三百三拾三文　人足三人分
右之通り小沼掛ヶ渡井三ヶ度伏替御普請ニ相成候分書記し差上申候処相違無御座候以上

組合高四万五千八拾四石余
　騎西領組合大落堀
一堀浚長六千八百七拾六間　七拾八ヶ村組合
　内
青毛落合より松木嶋迄　横拾壱間
　平均
　深壱尺
　五千弐百弐拾三間
　此間八千七百五坪
松木嶋より粕壁橋下迄　横拾壱間
　平均
　深壱尺
　千六百五拾三間
　此間三千三拾弐坪五合
弐口間壱万千七百三拾五坪五合　但シ壱坪四人
人足四万六千五百四拾弐人
一仮〆切延長九拾七間　高三尺
　平均
　横弐尺
此間七拾壱坪弐合
　内
拾五間　吉羽村地内
拾五間　和戸村地内
弐拾間　須賀村地内
弐拾間　百間村地内
弐拾間　東村　地内
　右入用
明俵三千四百弐拾俵　四斗入
　残俵共
右者仮〆巾裏表長延
百九拾間之所の角ニ六厘並三厘
縄千百四拾房　弐拾弐口まけ
右者土俵結縄壱房ニ三俵ツヽ
人足四百五拾五人八分
　内
弐百八拾四人八分　仮〆切仕「　」壱坪四人ツヽ
百七拾壱人　土俵拾壱人弐拾俵ツヽ
一同延長四拾六間　高三尺
　平均
　横六尺
此間弐拾三坪
　内
拾間　青毛落
三間　中堀
五間　前堀落
三間　隼人堀
四間　姥ヶ谷落
四間　笠原落
六間　姫宮落
　古隅田川
　右入用
明俵八百弐拾八俵　四斗入
　残俵共
是ハ間ニ三俵三厘弐通分
縄弐百七拾六房　但シ壱房弐拾□□
是ハ大俵三俵ニ壱房ツヽ
人足百拾人四分

内
六拾九人　〆切仕置取払之　壱坪三人
四拾壱人四分　大俵扱壱人ニ付　［　　］
一欠所箭延長百四拾三間　高三尺三ヶ所
此平坪七拾壱坪五人口
内
四拾五間　吉羽村地内
五拾間　須賀村地内
四拾八間　同村□□
右入用
雑木弐百八拾九本　長弐間
末口三寸
是ハ箭杭間ニ送リ三本打
葉唐竹弐千八百六拾本　目通り弐三寸廻り
人足七拾弐人壱部
内
五拾七人八分　弐間杭壱人五本打
拾四人三分　箭壱人五坪かき
右之寄
雑木　長弐□　金壱両ニ
代永　末口弐三寸　但　五拾八本
葉唐竹　目通り弐三寸廻り　但シ金両ニ　千本
此永
明俵　残俵共　金壱両ニ
代永　□百俵
縄　壱房弐拾平目　金壱両ニ
代永　千十房
人足四万七千五百八拾人三分
賃永八百八貫六拾五文壱分　但シ壱人ニ
永拾七文

小以合
御普請役
米倉幸吉様
山深亀蔵様
伊奈半左衛門御内
高木三右衛門様

●年未詳　笠原沼代用水通水ニ付廻状（百間中島岩崎家文書　№１５５６）

（端裏書）
「　御旅宿先
御用廻状　菖蒲町より
此附　西条原村始メ　」

御掛様より□ニ見廻り無油断引入可申旨被議定得其意候、左之通り御出見廻り以急状得御意候、然者用水之儀時廿日七ツ時より当用水筋江通水ニ相成候処日々照続故星川筋御掛水ニ相成、然ル処今廿一日七ツ時より見沼井筋藻刈ニ付八間枠皆建切ニ相成候間、処今廿一日九ツ時迄野牛樋ニ而引入、昼後より高岩関枠建切、明廿二日暁六ツ時下筋江通水ニ相成、村役人中様方人足壱ヶ村五六人つゝも召れ精々見廻り御引入可被成候、除堀村より下筋左右堀割之場所□□急度地先村江断置御掛様御廻村先ニ申立可被候、私共義も明廿二日暁七ツ時出立菖蒲より井筋見廻り可申候様、中より継立候間此状被見次第此附ヲ以順次達留村より御返し可被成候、已上

六月廿一日　百間村　名主　清次郎
条原村　同　丹蔵
戌上此出ス

東条原村
蓮谷村
中島村
右御村々
御名主中

須賀村　同
平蔵

中島ニ而ハ
右邨御廻し着後

●年未詳　笠原沼代用水藻刈見分ニ付廻状（百間中島岩崎家文書　No.３５５２）

（包紙）
「急廻文右惣代
笠原用水藻苅見分上野田村始メ」

前々申上候段五ツ時迄ニ場所御詰合被成下候、急以廻文御達し申候、笠原用水路、明三日河野様久喜町出立百間中村泊りニ而御見分ニ相成候間、御村々様人足召連御案内いたし丈、前々より御返し可被候、以上
未六月二日申　右惣代　高岩村　辰五郎

下刻
上野田村　戌上刻拝見仕
西条原村　亥中刻
東条原村　子上刻
須賀村　丑上刻
蓮谷村卯上刻
中島村

右村々
御名主中

●年未詳　黒沼笠原沼用水ニ百十日ニ付廻状（百間折原家文書　No.９３５）

（包紙）
「御普請役
廻状　大塚三次郎
御用　三箇村始メ」

其組合村々黒沼笠原沼最早弐百十日ニも相成候間、来ル七日昼九ツ時三判持参篠津村江旅宿江可罷出候、此廻状村名下へ令請印、早々順達留り村より可相返候、以上
長月三日　御普請役　大塚三次郎

三箇村　㊞
台村　㊞
河原井村㊞
除堀村　㊞
原村　㊞
樋ノ口村㊞
下早見村㊞
青柳村　㊞
太田袋村　㊞
上・下高岩村㊞
西久米原村㊞
東久米原村㊞
爪田ケ谷村㊞
須賀村　㊞
蓮谷村　㊞

中嶋村　㊞
百間村　㊞
西村　㊞
東村　㊞
右村
役人中

●年未詳　黒沼笠原沼用水差配ニ付廻状（百間折原家文書　No.６１５）

（包紙）
「　　用水惣代　嘉右衛門　惣五郎
急廻状
高岩村始メ」

尚々以御以印形御持参御出張可被下候、且残金御渡し相成候間、仲間勘定いたし度候ニ付、御含御出張可被下候
急以廻章得御意候共、残暑未厳敷御座候処、弥以各様益御機嫌克被遊御座奉恐賀候、附者当領用水不足ニ付、昨日林様御旅宿芋茎村迄罷出、中条元圦開憎相願候処、林様被仰候者用水差配之義弐百十日限ニ御座候処、当年ハ弐百廿日迄御差配請度候ハヽ右書面可差出旨被仰聞候間、乍御苦労様明三日未明ニ除堀村金□方へ御出張可被下候、尤外々ニも御相談申度義御座候間、御自身ニ御出張可被下候、其節此章御返可被下候、已上

七月二日

除堀村
用水惣代
嘉右衛門
原村
同
高岩村

黒須甚左衛門様㊞
百間村
折原清輔様

惣五郎

●年未詳　西条原分水大破ニ付廻状（百間折原家文書　No.６１３）

（包紙）
「　　笠原用水路年番
廻状　　百間村
名主　清輔
爪田谷村始メ」

以廻状得意候残暑強御座候処、益各々様方御壮栄被成御勤役奉賀候、然者用水路西条原村地内分水口箱圦並板五握大破流失ニ付、御村々立会之上当春皆新規普請仕御用割合仕度候間、明後九日正四ツ時、前原宝生院江向無御名代御出席奉願上候、且亦先年之割合外ニも夫々議定等も可有之候与致候、御村々御控篤与御穿鑿被成下、後日割合彼是申分等無之様、仕度無御失意御控御持参被成下割合仕候様致度存候、此廻状御村下御請印被成下、早々御順達可被下候、以上

七月七日

右堀年番
百間村　名主
清輔

爪田谷村㊞
東条原村㊞
須賀村㊞
蓮谷村
中島村
右御村々

御名主中様

追而留村より申上候、此状序江御持参御返却被下度奉願上候

●明治七年　百間四ヶ村請新田年貢皆済（百間折原家文書　№２１５）

甲戌畑御皆済

百間東村
百間西村
四ヶ村
中島村
蓮谷村

一反別弐町五反八畝拾八歩
　此高拾壱石壱斗壱升九合
内
　田反別五畝拾五歩
　　此高三斗三升
　畑反別弐町五反三畝壱歩
　　此高拾石七斗八升九合
　取永金壱貫九百四文八分
　　反ニ付
　　永百拾七文五分

成田宗五郎

一永弐百四拾九文三分　新井伊之助
一同壱貫七百六拾七文三分
　同拾壱文五分　秣場税

成田幸左衛門

一同七拾壱文七分　関根浅右衛門
一同弐百拾五文
　四文五分　秣場税　折原米蔵
一同七拾四文六分　折原武左衛門
一永五百七拾文九分　木村勇左衛門
一同九文　秣場税